京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一－九

伏　見　城　跡

伏見城跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

伏　見　城　跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

石垣基礎10西側（東から）

石垣30（北から）

1　門２（西から）

2　階段100（南西から）

金箔瓦

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、桃山駅駅前広場整備に伴う伏見城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

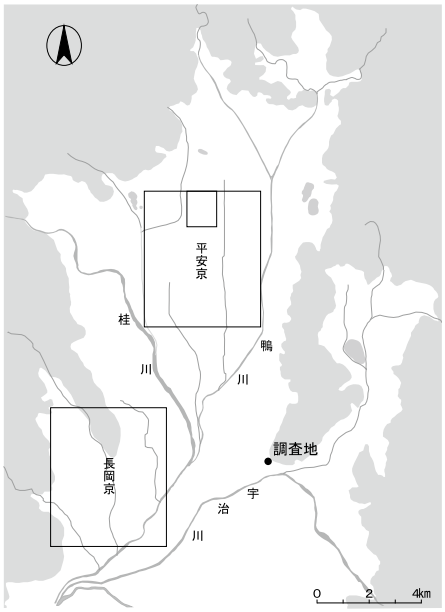
令和４年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　言

1	遺跡名	伏見城跡　（京都市番号　20F557）
2	調査所在地	京都市伏見区桃山町鍋島他　地内
3	委託者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調査期間	2021年８月17日～2021年12月６日
5	調査面積	391㎡
6	調査担当者	柏田有香・渡邊都季哉
7	使用地図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「丹波橋」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使用標高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺構番号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺物番号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本書作成	渡邊都季哉・柏田有香 付章：北野信彦（龍谷大学）
14	分析	検出した石垣等の石材鑑定は橋本清一氏（京都保存科学株式会社）、金箔瓦・金属製品の蛍光Ｘ線分析、金位測定、鉛同位体比測定については北野信彦氏（龍谷大学）にご協力いただいた。
15	備考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
16	協力者	調査にあたっては下記の方々からご教示・ご助力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順） 粟田純司、梶川敏夫、釜井俊孝、北垣聰一郎、北野信彦、高 正 龍、坂本 俊、佐藤亜聖、清水和明、鋤柄俊夫、千田嘉博、高田 徹、谷 徹也、中居和志、中井 均、中西裕樹、中村武生、西川禎亮、橋本清一、福島克彦、古川 匠、松尾史子、宮武正登、森岡秀人、森島康雄、山下大暉



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 1
２．位置と環境 …… 4
（１）歴史的環境と立地 …… 4
（２）既往の調査 …… 5
３．遺　　構 …… 10
（１）基本層序 …… 10
（２）遺　構 …… 10
（３）石材鑑定 …… 15
４．遺　　物 …… 18
（１）遺物の概要 …… 18
（２）土器類 …… 18
（３）瓦類 …… 19
（４）土製品 …… 21
（５）金属製品 …… 21
５．ま と め …… 23
（１）指月伏見城期 …… 23
（２）木幡山伏見城期 …… 27
（３）江戸時代後期 …… 28
付章　伏見城跡出土金箔瓦・鉄砲玉の分析調査 …… 29

図　版　目　次

巻頭図版１　　遺構　石垣基礎10西側（東から）
巻頭図版２　　遺構　石垣30（北から）
巻頭図版３　　遺構　１　門２（西から）
　　２　階段100（南西から）
巻頭図版４　　遺物　金箔瓦

図版１　遺構　調査区平面図（１：150）
図版２　遺構　調査区北西壁・南壁断面図（１：50）
図版３　遺構　調査区西壁断面図（１：50）
図版４　遺構　石垣30実測図１（１：60）
図版５　遺構　石垣30実測図２（１：60）
図版６　遺構　門１実測図（１：50）
図版７　遺構　門２実測図（１：50）
図版８　遺構　石垣基礎10実測図１（１：50）
図版９　遺構　石垣基礎10実測図２（１：50）
図版10　遺構　階段100実測図（１：40）
図版11　遺物　瓦拓影及び実測図１（１：４）
図版12　遺物　瓦拓影及び実測図２（１：４）
図版13　遺物　瓦拓影及び実測図３（１：４）
図版14　遺物　瓦拓影及び実測図４（１：４）
図版15　遺物　瓦拓影及び実測図５（１：４）
図版16　遺構　１　調査区北半伏見城廃城後全景（東から）
　　２　溝20（南から）
　　３　土坑13（北西から）
図版17　遺構　１　調査区北半全景（南東から）
　　２　調査区南半全景（東から）
図版18　遺構　１　石垣30調査区北側（北から）
　　２　石垣30調査区南側（北から）
　　３　溝28断面（北から）
　　４　土坑98断面（北東から）
図版19　遺構　１　門１（東から）
　　２　石垣基礎10東側（南東から）

図版20　遺構　1　石垣基礎10埋没状況（東から）
2　石垣基礎10東側断面（南東から）
3　石垣基礎10根石（南から）
図版21　遺構　1　石垣基礎10東側詰石検出状況（西から）
2　石垣基礎10東側一部完掘状況（西から）
3　石垣基礎10人頭大栗石検出状況（東から）
4　石垣基礎10西側一部完掘状況（北東から）
図版22　遺物　出土瓦
図版23　遺物　出土瓦・土器・土製品・金属製品

挿　図　目　次

図1　調査位置図（1：2,500）　…… 1
図2　調査区配置図（1：600）　…… 2
図3　調査前全景（東から）　…… 2
図4　作業状況　…… 2
図5　現地公開風景　…… 2
図6　遺構養生状況（南東から）　…… 2
図7　遺構保存範囲（1：300）　…… 3
図8　周辺調査位置図（1：5,000）　…… 6
図9　土坑13実測図（1：40）　…… 10
図10　礎石列12実測図、溝20・路面23断面図（1：50）　…… 11
図11　柱穴列1実測図（1：80）　…… 11
図12　石垣30・溝28・路面26断割断面図（1：50）　…… 12
図13　石材分布図（1：125）　…… 16
図14　土器実測図（1：4）　…… 19
図15　土製品実測図（1：4）　…… 21
図16　金属製品実測図（1：1、1：4）　…… 21
図17　遺構変遷図1（1：250）　…… 25
図18　遺構変遷図2（1：250）　…… 26

表　目　次

表１　周辺調査一覧表 …… 7
表２　遺構概要表 …… 10
表３　石材構成表 …… 15
表４　遺物概要表 …… 18
表５　出土瓦の構成表 …… 20

付　表　目　次

付表１　土器観察表 …… 41
付表２　瓦観察表 …… 42
付表３　土製品観察表 …… 43
付表４　金属製品観察表 …… 43

伏　見　城　跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本調査は桃山駅駅前広場整備工事に伴う伏見城跡埋蔵文化財発掘調査である。調査地は京都市伏見区桃山町鍋島他 地内に位置し、『京都市遺跡地図』によると伏見城跡にあたる。

当該地の整備に際し、京都市道路建設課が試掘調査を実施し、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）が指導・監督した。その結果、調査地西半で安土桃山時代の遺構が確認され、発掘調査が必要と判断された。発掘調査は文化財保護課の指導の下、原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

（２）調査の経過

調査区は文化財保護課の指導に従い設定した。排土置き場の確保や重機の通路を確保するために、調査区を３つに分けて調査を行った。まず、１区と２区の調査を行い、２区を埋め戻した後に３区の調査を行った。また、調査中、遺構の広がりを確認するために１区の北西部を拡張した。調

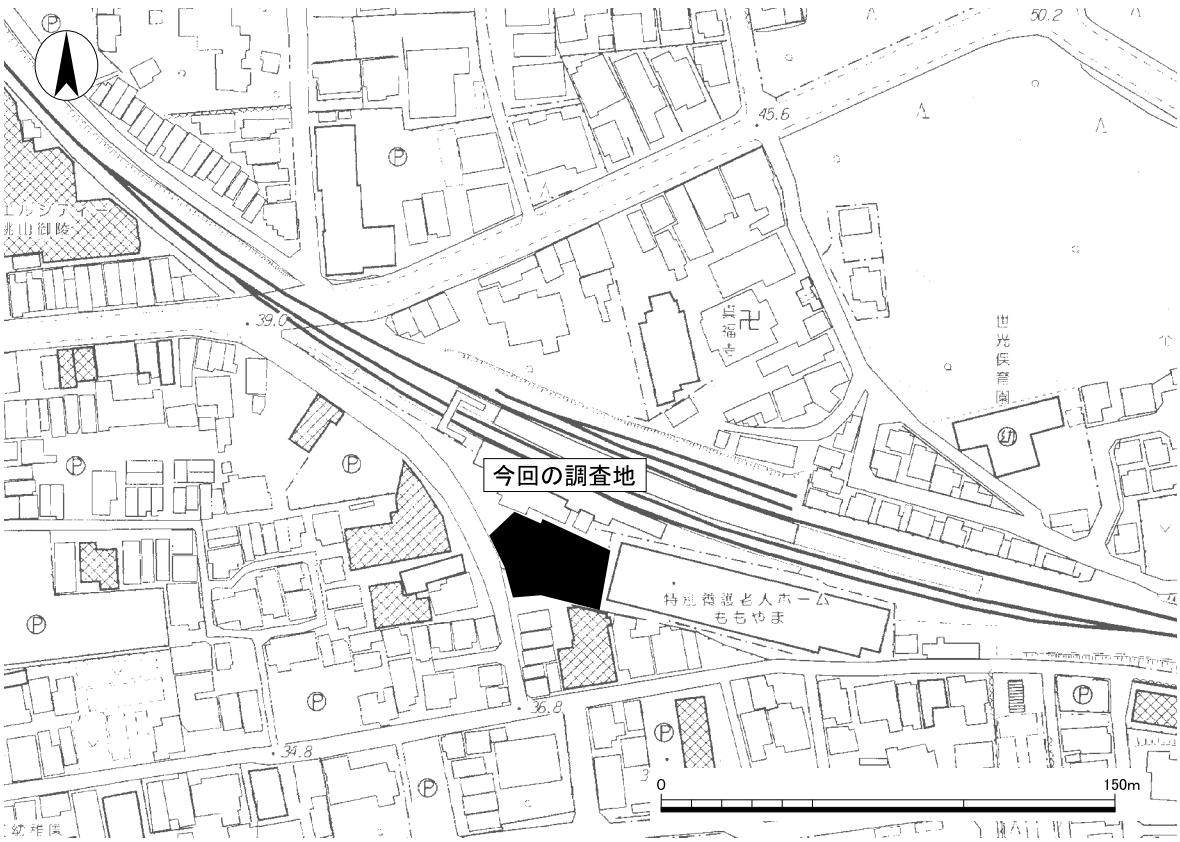


図１　調査位置図（１：2,500）

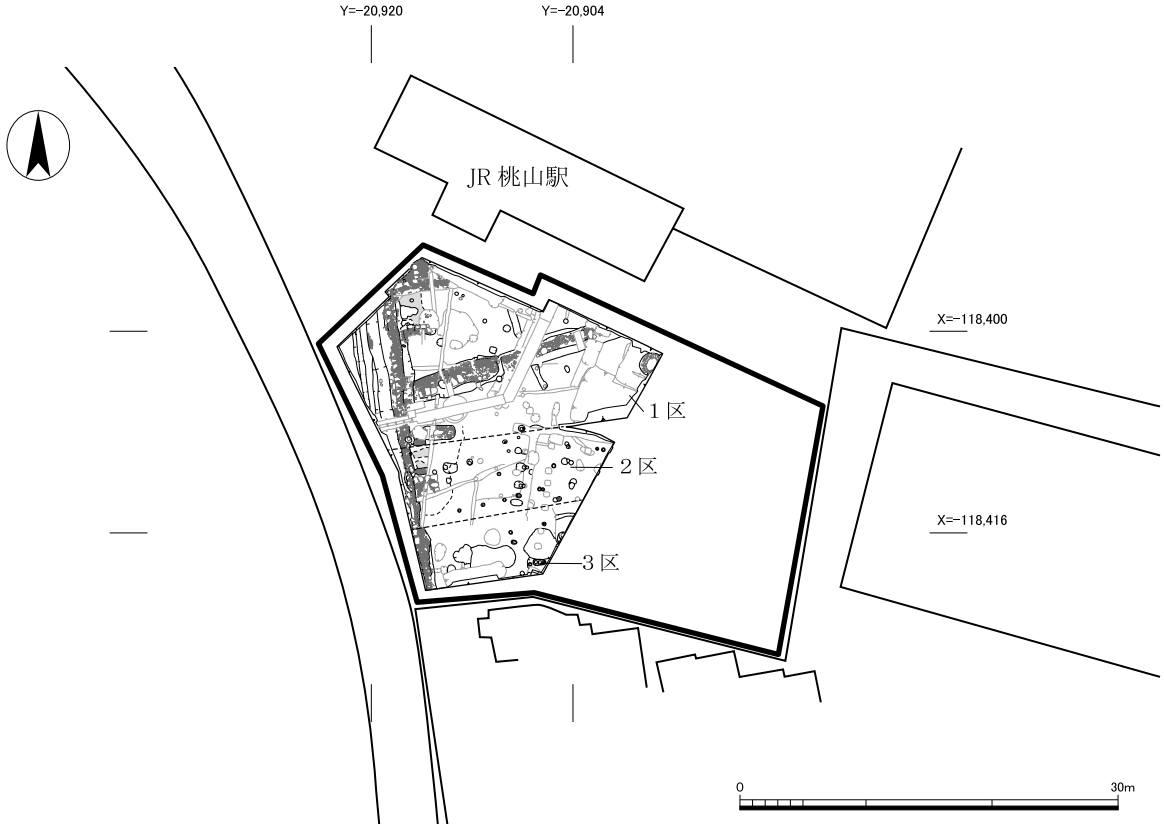


図２　調査区配置図（１：600）

図３　調査前全景（東から）

図４　作業状況

図５　現地公開風景

図６　遺構養生状況（南東から）

査面積は391㎡である。

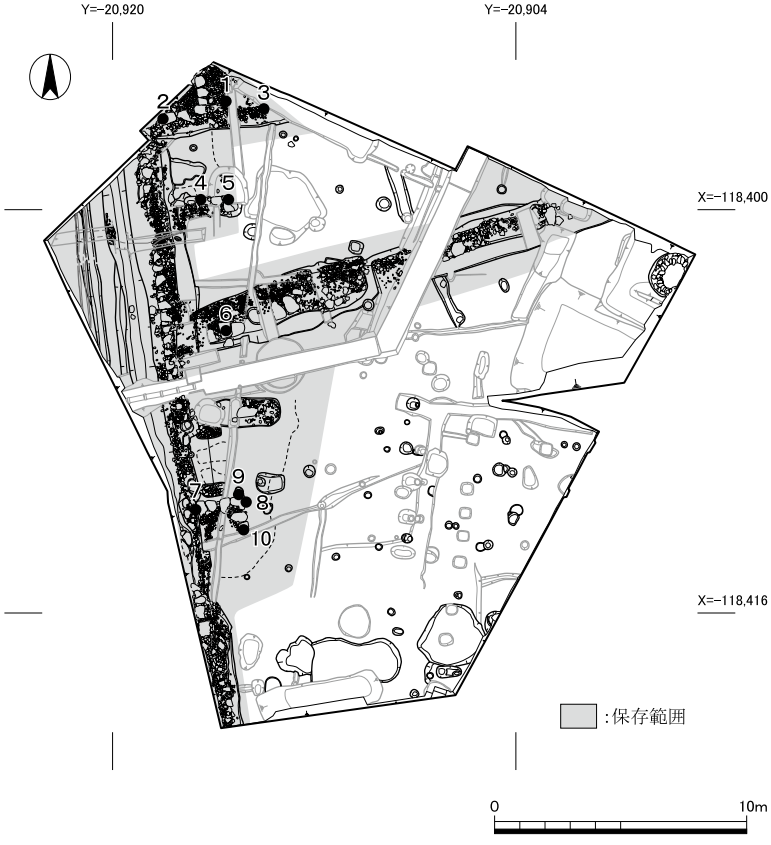
2021年８月17日から１区の調査を開始した。調査した遺構面数は１面３時期（指月伏見城期：安土桃山時代、木幡山伏見城期：安土桃山時代～江戸時代初期、伏見城廃城以降：江戸時代後期）である。図面作成・写真撮影・オルソ測量などによる記録作業を行い、同年12月６日に全ての現地作業を終了した。なお、検出した遺構の内、伏見城期の遺構は大部分が地中保存されることになったため、保存箇所については砕砂入りの土嚢で養生し、厚さ約５㎝の砕砂で覆い保護した後、埋め戻した。

調査中は適宜、文化財保護課による臨検および、検証委員である龍谷大学の國下多美樹教授、同志社大学の浜中邦弘教授の視察を受けた。

調査期間中の11月４日に報道発表を行い、11月６日には地元住民を対象とした現地公開を開催し、約210名の参加者があった。また、12月６日にYoutubeで動画を配信し[1)]、調査成果の公開に努めた。

註

１）「新発見　伏見城の石垣～JR桃山駅前の調査～」 https://www.youtube.com/watch?v=S3fc6JaUfjE



番号	X座標	Y座標
1	−118,395.700	−20,915.500
2	−118,396.400	−20,918.000
3	−118,396.000	−20,914.000
4	−118,399.600	−20,916.500
5	−118,399.600	−20,915.400
6	−118,404.800	−20,915.500
7	−118,411.900	−20,916.700
8	−118,411.600	−20,914.700
9	−118,411.300	−20,915.000
10	−118,412.700	−20,914.800

図７　遺構保存範囲（１：300）

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

本調査地は桃山丘陵の南端部に立地する。調査地の現在の標高はおよそ38.9～39.8ｍで、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。南側は指月と呼ばれる丘陵地で、さらに南は宇治川に臨む。東側は桃山丘陵南端を周り、山科盆地に通じる。西側は国道24号線を越えると、伏見城城下町造営に伴い整備された京町通・新町通・竹中町通などの南北街路と、それらに直交する大手筋通・油掛通・丹波橋通などの東西街路により長方形の街区が形成されている。

室町時代以前

調査地より北西約350ｍに位置する現在の御香宮神社付近には縄文土器の散布地である金森出雲遺跡があり[1)]、調査地から南東約250ｍに位置する泰長老公園付近では貝層が確認されている[2)]。

調査地より南西約500ｍに位置する桃陵遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓[3)]や古墳時代中期後半の円墳が検出されており、埴輪片が出土している[4)]。また、創建年代は不明だが、白鳳時代から奈良時代にかけて、現在の御香宮神社が所在する場所に御香宮廃寺が建てられたとされている[5)]。

平安時代には指月の地が巨椋池に臨む名勝として知られるようになる。橘俊綱が山荘として造営した伏見荘が白河天皇に寄進され、以後鎌倉・室町時代を通して皇族の所有する土地となる。後白河上皇の時代に伏見殿が造営され、後に北朝持明院統の所領となるが、室町時代から戦国時代にかけては指月を含め、伏見の地も戦乱に巻き込まれるようになる[6)]。

安土桃山時代から江戸時代初期

伏見の地は豊臣秀吉の伏見城築城と城下町造営により大きな転機を迎える。伏見城はその始まりから廃絶まで、大きく４つの段階に区分されている[7)]。

第１期：文禄元年（1592）、秀吉は関白の座を甥の秀次に譲り、伏見「指月の岡」に隠居のための屋敷を構える。

第２期：大坂で豊臣秀頼が誕生し、秀吉は隠居屋敷を本格的な城郭に改める（指月伏見城）。指月伏見城は文禄３年（1594）に完成し、秀吉はここで政務を執るようになる。この時、宇治川を巨椋池から分離させて城の外堀とし、巨椋池には堤を築いて大和街道を再整備した。城下には港を作り大坂に通じるように整備し、家臣の住む屋敷を構えさせるなど、伏見の地は指月伏見城を中心に軍事・政治的な都市となった。文禄４年（1595）、秀次との関係が悪化した秀吉は、秀次から関白職を剥奪し、自刃させると、秀次の居城である聚楽第の破却を命じた。聚楽第の建築資材は指月伏見城に再利用されたといわれる。

第３期：文禄５年（1596）閏７月13日に起こった地震（慶長伏見地震）によって、指月伏見城は倒壊する。秀吉は指月より北東にある木幡山（伏見山[8)]）に城の再建を命じ、慶長３年（1598）に死去するまで木幡山伏見城で晩年を過ごした。秀吉の命により、秀頼は大坂城で暮らしており、秀吉亡き後は徳川家康が留守居役として入城していた。慶長５年（1600）、関ヶ原の戦いの前哨戦の

舞台となる伏見城には、家康の家臣である鳥居元忠らが籠城していたが、西軍の攻撃を受けて落城、焼失した。

第４期：関ヶ原の戦いに勝利した家康は、翌年から伏見城の再建に着手した。慶長８年（1603）に家康は伏見城で征夷大将軍の宣下を受ける。豊臣家が滅亡したことや、京都で二条城が造営・整備されたことによって徳川政権における伏見城の意義は失われ、元和９年（1623）に３代将軍家光の将軍宣下が伏見城で行われた後、伏見城は廃城となり、各大名の屋敷も廃棄された。伏見城で使われた天守は二条城に移築され、二条城の天守は淀城に移築されたといわれる。また、伏見城で用いられた石垣石材は淀城で再利用された。豊国神社（京都市東山区）唐門や福山城（広島県福山市）伏見櫓など、伏見城にあった建築物を移築したとされる遺構が京都をはじめ、各地に伝わっている。

江戸時代から近代

伏見城や大名屋敷があった土地は、桃樹が植えられ、周囲一帯は「桃山」と称されるようになった。寛文６年（1666）、水野忠貞が伏見奉行に任命され、伏見と周辺の村の支配、木津川・宇治川を往来する船舶の取り締まり、西国大名及び家臣の往来の監視等を担った[9)]。慶応４年（1868）、鳥羽・伏見の戦いでは伏見奉行所に旧幕府軍が、薩摩・長州軍が御香宮神社付近に布陣し、伏見の町は激戦地となった。

明治時代になると、奈良鉄道が開通、調査地に隣接して明治28年（1895）に桃山駅が造られた。明治45年（1912）に木幡山が明治天皇陵墓地に選定されたことから駅の拡張、整備がなされた。現在は西日本旅客鉄道（JR西日本）桃山駅となっている[10)]。

（２）既往の調査（図８、表１）

伏見城跡では、試掘・立会を含む多くの発掘調査が行われている。調査地周辺は、既往の調査や研究により、指月伏見城の北辺、木幡山伏見城期では浅野但馬守（浅野長晟）の屋敷地の一画と考えられている[11)]。以下では、調査地周辺の主な成果について述べる。

室町時代以前

調査１では陸軍工兵隊の塹壕から、タニシなどを含む貝層と古墳時代の須恵器片を確認している。調査15では奈良時代から平安時代の柱穴・溝・井戸等が検出されており、これらの遺構は御香宮廃寺との関連が推定される。中世の遺構としては、室町時代の整地層と堀が検出されている（調査９・15）ほか、平安時代後期から鎌倉時代の土器が出土している地点（調査38）がある。

安土桃山時代から江戸時代

伏見の地が隆盛する安土桃山時代から江戸時代初期までの遺構や造成土・整地層は全域で確認されている。

指月伏見城推定範囲の国家公務員宿舎・日本住宅公団団地・京都市営住宅地では、調査35・36で東面石垣と堀、調査30・32で東面石垣を検出している。これらの石垣は木幡山伏見城期の整地土に覆われていることから、指月伏見城段階の所産とされる。調査27・29・37・39では指月伏見

城・木幡山伏見城のどちらの時期に属するかは不明なものの、石垣・溝・柱穴・土坑を検出している。また、指月伏見城推定地南東隅にあたる調査34では、測量によって竪堀状の地形が確認されている。国道24号線沿いでは、調査20で北と西に面をもつ石垣の北西角、調査２で東面石垣と西面石垣が検出され、その間が堀と推測されており、指月伏見城西限の根拠となっている。

指月伏見城推定範囲より北側では、調査６で火災面の下に金箔瓦を含む落込みが確認されており、現況地形とともに、立売通が指月伏見城の北堀と推定される根拠の一つとなっている。調査18では立売通の路面と北側溝、町屋跡、町屋と武家屋敷を区画する段差が検出されている。また調査31でも敷地境の段差と考えられる遺構が確認されている。現在の大手筋を挟む調査９・25では２時期の遺構面が安土桃山時代に該当し、両遺構面に掘立柱建物・溝などが検出されている。肥前中納言（前田利長）邸と想定される地点では、石垣や大型の壷地業などが検出されている（調査７・

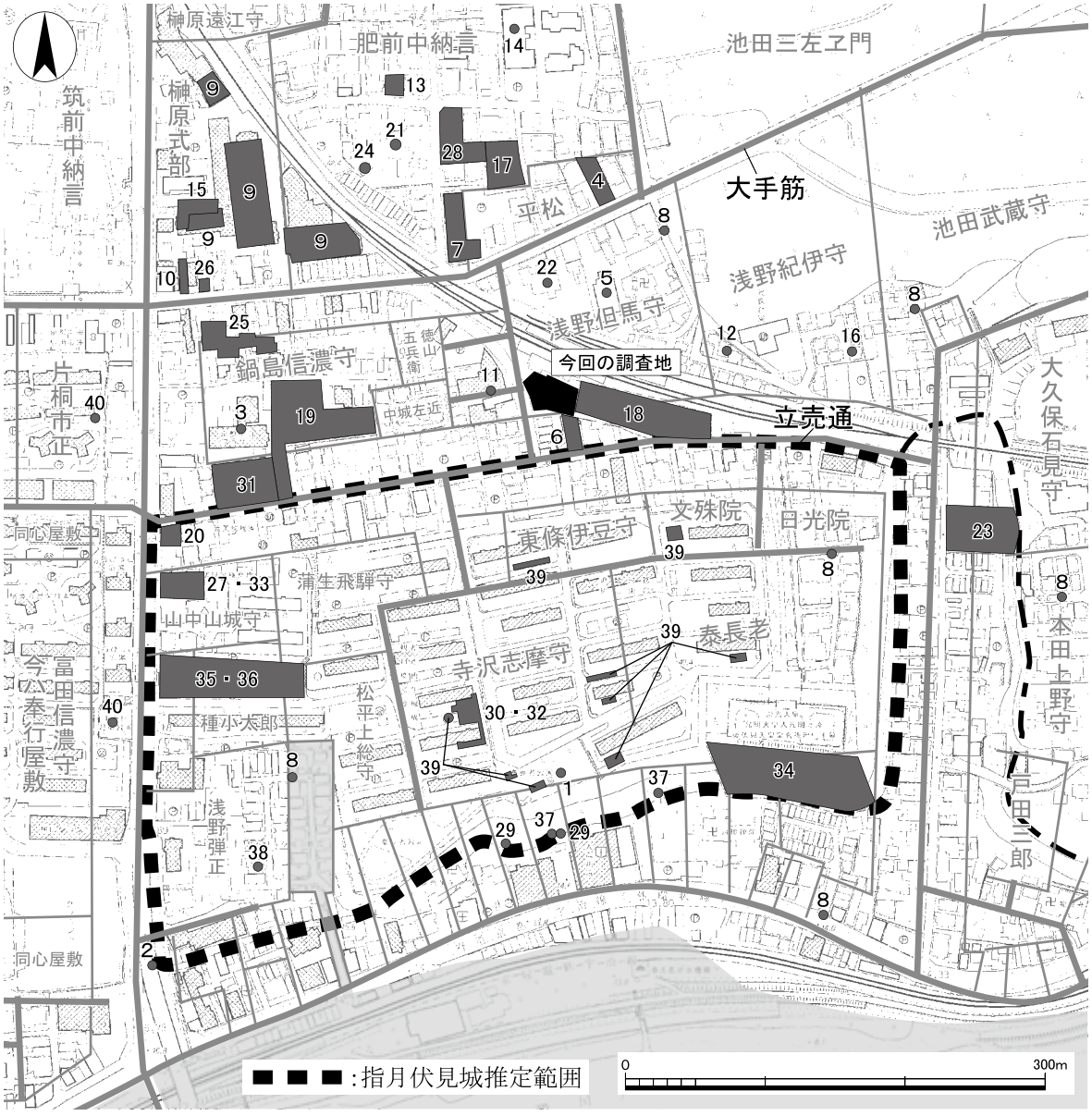


図８　周辺調査位置図（１：5,000）
（京都市文化財ブックス第31集『天下人の城』　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　2017年の図40を元に一部改変し作成）

表1　周辺調査一覧表

No.	調査方法	内　容	文　献
1	発見	陸軍工兵隊の演習塹壕内にて、貝層と須恵器片を確認。	星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の二　伏見城』伏見城研究会 2006年
2	発掘	南北方向の石垣および旧路面、金箔瓦を含む土坑を確認。	鈴木重治編『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会　1975年
3	発掘	GL-0.3mで伏見城期の整地層、-2.0mで室町時代前期の遺構面を確認。	「伏見城跡1」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年
4	発掘	地山上面で伏見城期の溝3条、土坑2基を確認。南側の溝には2段以上の石の護岸。	「伏見城跡2」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年
5	試掘	GL-0.8mで整地層、-1.1mで堀を確認。	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度』京都市文化観光局　1984年
6	発掘	焼土層を挟んで、安土桃山時代の2面の遺構面を確認。築地状遺構を境に水分の多いシルト層を含んだ落ち込みが確認される。指月伏見城北堀の北肩の根拠に。	小森俊寛「伏見城城下町」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年
7	試掘	GL-1.0mで江戸時代前期の包含層、-1.2mで安土桃山～江戸時代前期の柱穴を検出。	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年
8	立会	舟入りに関連する湿潤な堆積を確認。	吉村正親「伏見城跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年
9	発掘	2時期の伏見城期の建物跡、溝を確認。室町時代の堀を検出。	内田好昭・丸川義広・高橋 潔「伏見城跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年
10	立会	炭化物を含む土坑と、金箔瓦・梅鉢紋瓦が出土。	「伏見城跡」『京都市内遺跡立会調査概報　平成5年度』京都市文化観光局　1994年
11	試掘	GL-1.4～2mで時期不明の湿地状堆積を確認。	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成6年度』京都市文化観光局　1995年
12	試掘	GL-0.78mで安土桃山時代の瓦堆積層を検出。	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成7年度』京都市文化市民局　1996年
13	立会	地表面直下すべて砂礫からシルトの無遺物層であることを確認。	「伏見城跡」『京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度』京都市文化市民局　1998年
14	試掘	安土桃山時代の柱穴4基、土坑3基、溝1条を検出。	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成9年度』京都市文化市民局　1998年
15	発掘	奈良時代前期の掘立柱建物、溝、井戸。御香宮廃寺関係か。室町時代の堀、安土桃山時代の溝、柵列を検出。	前田義明「伏見城跡・御香宮廃寺」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年
16	試掘	GL-1.1mで木幡山伏見城の焼亡に伴うと考えられる焼土塊、溝状遺構1基を検出。	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　1999年
17	立会	瓦堆積層から大量の金箔瓦。上面には炭を多量に含んだ層。東面する石垣を確認。	吉本健吾「伏見城跡」『京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度』京都市文化市民局　2000年
18	発掘	安土桃山～江戸時代の立売通路面と北側溝、立売通に面した町屋の跡、町屋と武家屋敷（浅野但馬守）の境界を示す段差を確認。町屋は火災により焼失。	桜井みどり・南 孝雄「伏見城跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年
19	試掘	伏見城期の造成土、東西方向の礫充填溝3条を確認。	馬瀬智光「Ｖ－２　伏見城跡　No.13」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成18年度』京都市文化市民局　2007年
20	詳細分布	北と西に面をもつ石垣の北西角を確認。石垣の北側は堀と推定される。	山本雅和「伏見城跡（09F133）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』京都市文化市民局　2010年
21	試掘	GL-0.8～1.4mで南北方向の路面状遺構（近代か）を確認。	「試掘調査一覧表　No.104」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年
22	試掘	GL-0.25mで伏見城期の造成土を確認。	「試掘調査一覧表　No.105」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年
23	試掘	濠状遺構及び斜面の郭、造成過程を確認。	馬瀬智光「Ｖ－７　伏見城跡　No.106」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年
24	詳細分布	GL-1.3mで時期不明の包含層を検出。	「調査一覧表　12F319」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成25年度』京都市文化市民局　2014年
25	発掘	安土桃山時代の2時期の遺構面と掘立柱建物5棟などを確認。武家屋敷（鍋島信濃守）の一部か。	田邉一元編『伏見城跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』イビソク京都市内遺跡調査報告第9輯　（株）イビソク 2014 年
26	詳細分布	GL-0.7mで時期不明の包含層を検出。	「調査一覧表　14F173」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成26年度』京都市文化市民局　2015年
27	試掘	石垣の裏込と考えられる石材と造成土を確認。	「試掘調査一覧表　No.22」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
28	発掘	安土桃山時代の壷地業、布掘り地業を検出。武家屋敷（肥前中納言）のものか。地山未確認。	奥井智子「Ⅸ　伏見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
29	詳細分布	金箔瓦を含む土坑を検出。	熊谷舞子「Ⅳ－６　伏見城跡・指月城跡（14F018）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局　2016年
30	発掘	西面する石垣（東側石垣）と、東面する石垣（西側石垣）の2時期の石垣を確認。それぞれ指月伏見城期・木幡山伏見城期のものと推定。	『伏見城跡・指月城跡－平成27年度発掘調査報告書－　京都平安文化財発掘調査報告第8集』（有）京都平安文化財　（報告書作成中）

No.	調査方法	内　容	文　献
31	試掘	調査区の南端で伏見城期に遡る町家と武家屋敷跡を区切る段差を確認。江戸時代後期に段差が削平され、造成し直されている。	「試掘調査一覧表　No.100」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
32	詳細分布	30の補足調査。西側石垣の裏込めを確認。西側石垣の上面を木幡山伏見城期の造成土が覆い、東側石垣を構築するための造成土中に金箔瓦が含まれることなどを確認。	奥井智子「Ⅳ－5 伏見城跡・指月城跡(14F529)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
33	詳細分布	27の補足調査。2時期の遺構面と各面で成立する土坑を検出。	「調査一覧表　14F193」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』京都市文化市民局　2017年
34	測量	大光明寺陵南側の斜面を測量。竪堀状地形を確認。	清喜裕二・有馬伸・横田真吾「光明天皇ほか　大光明寺陵の外形調査」『書陵部紀要　第69号〔陵墓編〕』宮内庁書陵部　2018年
35	発掘	指月伏見城期と考えられる東面石垣を検出。	吉川義彦『伏見城跡発掘調査報告』関西文化財調査会　2020年
36	詳細分布	35の補足調査。石垣の延長部を確認。	熊谷舞子「Ⅳ－6　伏見城跡(16F039)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2018年
37	詳細分布	西側調査区で石垣を検出。	熊谷舞子・清水早織「Ⅳ－7　伏見城跡・指月城跡(16F158)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2018年
38	詳細分布	GL-0.8mで検出した土坑から平安末～鎌倉時代の土器が出土。	清水早織「Ⅴ―4　伏見城跡，指月城跡(19F349)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』京都市文化市民局　2020年
39	発掘	伏見城期の石垣・造成土を検出。 表面波探査により堀状の落込みを確認。	馬瀬智光・熊谷舞子・新田和央・北野信彦・古川 匠『指月城跡・伏見城跡　発掘調査総括報告書』京都市文化市民局　2021年
40	試掘	GL-0.6mで伏見奉行所及び伏見城関連遺構を確認。	「試掘調査一覧表　No.108」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和2年度』京都市文化市民局　2021年

13・14・17・24・28)。特に、調査28では巨大な壷地業や布掘り地業が見られ、屋敷の一端を明らかにしている。また、この調査では、木幡山伏見城期の造成土が厚く、工事掘削深度の関係で地山が確認されていない。ほかにも、調査17では厚い整地層の下から、地表下2.88ｍで東面する石垣と桐文・菊文金箔瓦を多量に含む瓦溜が検出されている。

伏見城廃城後の顕著な遺構として、調査18では伏見城期に成立した立売通と北側溝が18世紀まで利用されていることが確認された。

註

1）　三木善則「伏見のあゆみ」『伏見の歴史と文化』　聖母女学院短期大学・伏見城研究会　2003年

2）　星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の二　伏見城』　伏見城研究会　2006年

3）　小森俊寛・原山充志「伏見城跡３」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1993年

4）　河野凡洋・卜田健司『伏見城跡・桃陵遺跡』　有限会社 京都平安文化財　2014年

5）　前掲註１

6）　新田和央「１．遺跡と立地環境」『指月城跡・伏見城跡　発掘調査総括報告書』京都市文化市民局　2021年

7）　山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』文理閣　2001年

8）　これまで、再建された城は「木幡山」にあったとされるが、「伏見山」であった可能性が高い。ただし、本報告では混乱を避けるため、従来通り「木幡山伏見城」とする（谷　徹也「伏見城は「木幡山」にあったのか」『日本歴史　847号』日本歴史学会　2018)。

9）　井上幸治「伏見奉行与力の変遷」『京都市文化財保護課研究紀要　第３号』京都市文化市民局 文化芸術都市推進室文化財保護課　2020年

10）　石野　哲『停車場変遷大事典　国鉄・JR編Ⅱ』JTB　1998年

11）　指月伏見城の推定範囲については、新田和央「１．遺跡と立地環境」『指月城跡・伏見城跡　発掘調査総括報告書』京都市文化市民局　2021年を、木幡山伏見城期の町割については、京都市文化財ブックス第31集『天下人の城』京都市文化市民局 文化芸術都市推進室文化財保護課　2017年、京都市蔵『伏見御城槨并屋敷取之絵図』などを参考にした。

参考文献

谷　徹也「首都としての伏見」『京都の中世史６　戦国乱世の都』吉川弘文館　2021年

谷　徹也「豊臣政権の拠点城郭と「首都」」『令和２年度京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（伏見編）』京都府立京都学・歴彩館　2021年

日本史研究会編『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』文理閣　2001年

森島康雄「伏見城城下町と伏見時代」『伏見城研究会20200626発表資料』2020年

新田和央「１．遺跡と立地環境」『指月城跡・伏見城跡　発掘調査総括報告書』京都市文化市民局　2021年

3．遺　　構

（1）基本層序（図版２・３）

調査地の現在の地表面の標高は、調査区北東部で39.8ｍ、南西部で38.9ｍであり、地形は、桃山丘陵に臨む北東部から立売通に向かう南西部にかけて緩やかに下がる。

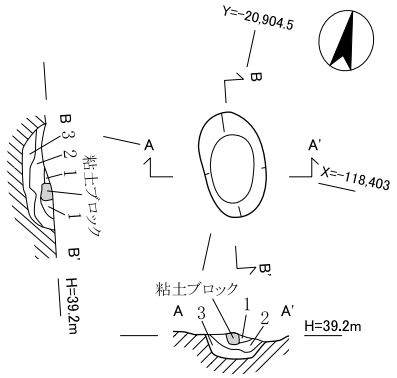
基本層序は、調査区東部では近現代盛土直下が基盤層となる。調査区中央部では近現代盛土直下が木幡山伏見城期の整地層、その下が基盤層となる。調査区西部では、近現代盛土直下が江戸時代の路面構築土、その下が順に木幡山伏見城期の整地層、基盤層となる。

調査は、近現代盛土を除去した面から開始し、指月伏見城期、木幡山伏見城期、江戸時代の各時期の遺構を検出した。検出面の標高は、調査区北東部で約39.2ｍ、調査区南西部で約38.5ｍで、北東から南西に下がる。

指月伏見城期と木幡山伏見城期の遺構については、大半を地中保存することとなったため、調査区全体を基盤層まで掘り下げての面的な調査は行っていない。調査区西部では、江戸時代の路面構築土を掘り下げて、木幡山伏見城期の整地層上面まで調査を行った。また、文化財保護課の指導により、埋設管敷設予定箇所で断割調査を行い、堆積状況の記録を作成した。

（2）遺　構（図版１・16・17）

土坑13（図９、図版16）　調査区北東部の基盤層上面で検出した。平面形は楕円形で、長径0.4ｍ、短径0.2ｍ、深さ0.08ｍである。最下層に炭が敷き詰められる。上層からは被熱した粘土ブロックや鉄滓、鞴の羽口が出土した。鍛冶炉の掘形部分と考えられる。遺構の長軸方位は北に対して西に約13度振る。



1　10YR5/6黄褐色細砂　粘土ブロック・炭多量混
2　5YR5/6明赤褐色中～粗砂　焼土・炭混
3　N1.5/0黒色炭層　　0　1m

図９　土坑13実測図（１：40）

礎石列12（図10）　調査区北東部の基盤層上面で検出した。後述する石垣基礎10を削平する。布掘掘形を持つ礎石列である。布掘掘形は検出長約７ｍ、幅0.2～0.3ｍ、深さ0.05ｍ

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
指月伏見城期 （安土桃山時代）	石垣基礎10、階段100	
木幡山伏見城期 （安土桃山時代～江戸時代初期）	石垣30、門１・２、路面26、溝27・28	
伏見城廃城以降 （江戸時代後期）	路面23、溝20	
時期不明	礎石列12、柱穴列１、土坑13・98	礎石列12は石垣基礎10の上から成立

である。礎石は２石残存し、北側礎石が長径0.35ｍ、短径0.2ｍ、厚さ0.2ｍ、南側礎石が長径0.3ｍ、短径0.2ｍ、厚さ0.1ｍである。柱間は1.5ｍである。遺構の方位は北に対して西に約28度振る。

路面23（図10） 調査区北西部で検出した南北方向の路面である。検出規模は、幅1.1ｍ、南北約4.0ｍである。北・南・西は調査区外に延びる。後述する路面26と伏見城廃城跡の整地層上に高さ約0.5ｍの盛土を行い構築される。路面構築土には径0.05ｍの礫や瓦片が混和剤として使用され、非常に固くしまる。

溝20（図10、図版16） 調査区北西部で検出した路面23上面で成立する南北方向の素掘りの溝である。両端とも調査区外へ延びる。検出長約6.5ｍ、検出幅約0.4ｍ、深さは0.4～0.45ｍである。底部の標高は北から南に下がる。遺構方位は北に対して西に約７度振る。埋土は最下層の４層が流水堆積である。２・３層からは江戸時代後期の遺物が多量に出土した。

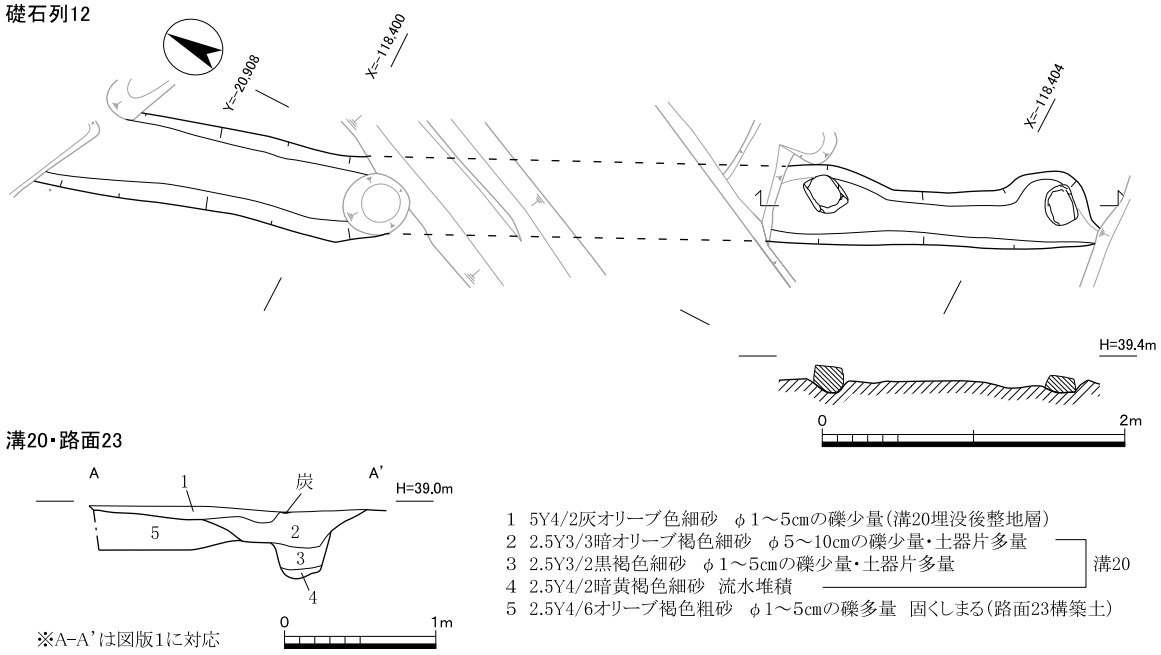


図10 礎石列12実測図、溝20・路面23断面図（１：50）

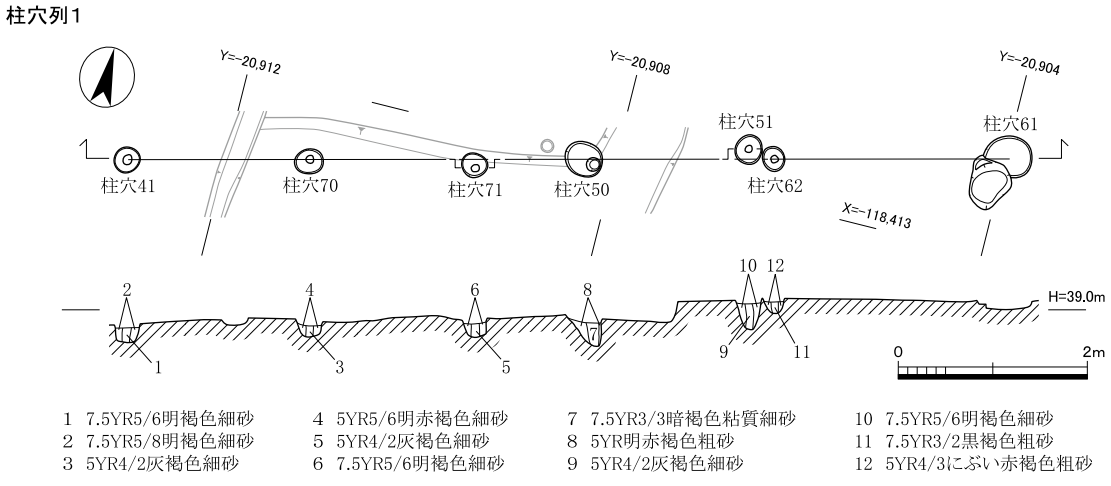


図11 柱穴列１実測図（１：80）

柱穴列１（図11） 調査区南半の基盤層上面で検出した東西方向の掘立柱列である。検出長は約9.4ｍ、柱間は不等間で、東から2.4ｍ、1.8ｍ、1.2ｍ、1.8ｍ、1.8ｍである。柱穴掘形の平面形は円形で、径0.2～0.5ｍ、深さは0.1～0.3ｍである。遺構の方位は北に対して西に約14度振る。

石垣30（図12、巻頭図版２、図版４・５・18） 調査区西部で検出した南北方向の石垣で、西に面を揃え、屋敷地と路面26を画する。築石抜き取り時に崩落したと思われる土と栗石、抜き取り後の整地層に覆われており、それらを除去して検出した。方位は北に対して西に約７度振る。検出長は約23ｍである。

基盤層ないしは造成土の直上に長径0.2～0.6ｍの根石[1)]が据わる。根石が抜き取られている箇所もある。根石には、自然石と一部に粗割石が使用され、間詰石が根石の間に詰められる。根石設置面と東側の屋敷地平坦面との比高差は約0.5ｍで、３段程度の石積みが想定されるが、２段目以上の築石はほぼ残存していない。また、門２と接する部分では石垣が見られず、門２以南の根石の大きさは長径0.4～0.6ｍと、門２以北の石よりも大きい。根石背面より0.3～0.5ｍの幅で掘形を検出した。掘形には、径0.05～0.1ｍの栗石が充填されている。調査区南側の栗石には、珪質頁岩が集中して使用されている〔（３）石材鑑定参照〕。石垣30と溝28の間は平坦面の犬走となっているが、X=－118,412以南では、犬走の幅が狭く、原位置を保っている根石も少ない。また、溝28から根石や築石として使用されていたと考えられる石材が出土しており、大名屋敷の廃絶時に犬走を一部壊して溝28に石垣30の石材を落とし込んだ可能性がある。崩落土と整地層からは安土桃山時代から江戸時代前期の土器が少量と、家紋瓦を含む瓦類が多量に出土した。

路面26（図12、図版４・５） 調査区北西部で検出した南北方向の路面である。検出長は約７ｍで、北・南・西は調査区外へ延びる。路面構築土は、最大0.5ｍの厚みをもち、径0.05ｍの礫や瓦片が混和剤として使用され、非常に固くしまる。

溝27（図版４・５） 調査区北西部の路面26上面で検出した南北方向の素掘りの溝である。検出

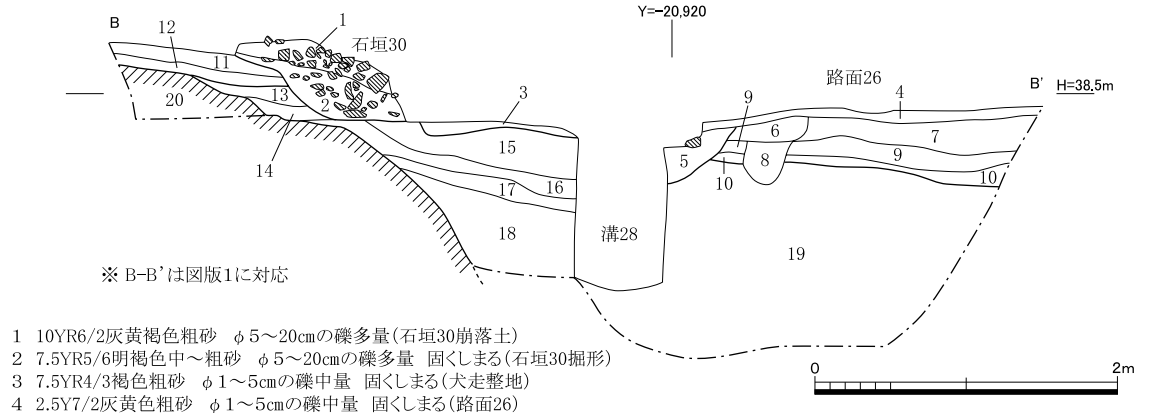


図12　石垣30・溝28・路面26断割断面図（１：50）

長約4.5ｍ、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.05ｍである。

溝28（図12、図版４・５・18） 調査区北西部の路面26上面で検出した南北方向の素掘りの溝である。遺構の方位は北に対して西に約７度振り、石垣30に平行する。検出長12ｍ、幅約0.35ｍ、深さは約0.6ｍである。断面形は逆台形を呈し、溝がある程度埋まった後に再度掘り込んで改修している。溝の底面は北から南へ傾斜し、改修前では調査区北端と南端の比高差は約0.15ｍである。埋土は、改修前・改修後ともに下層は流水堆積である。上層は、石垣30からの崩落土と考えられ、根石や築石、栗石由来と考えられる石材や瓦が多量に混じる。石垣30との間には幅0.3～0.5ｍの犬走が設けられ、西肩の一部では瓦を多量に含む土で固めた護岸を確認した（図12－５層）。埋土からは安土桃山時代から江戸時代前期の土器や瓦類が出土した。

土坑98（図12、図版18） 調査区北西部の断割調査時に路面26の下で検出した土坑である。検出東西幅は5.5ｍで、西は調査区外へ延びる。細～粗砂を主体とする礫をあまり含まない土で埋まり、遺物もほぼ含まれない。土取り穴の可能性が考えられる。深さは1.8ｍ以上あり、遺構の底は確認できなかった。

門１（図版６・19） 調査区北西部で検出した、路面26に開く門跡である。三和土33、石列34、石抜取溝35で構成される。これらは木幡山伏見城期の整地層上面で成立するが、西側は石垣30の掘形に削平され、上面は整地層で覆われていた。遺構の方位は、石列34を基準とすると北に対して西に約３度振る。石列34・石抜取溝35は門の袖石、その間の三和土33は路面と考えられる。

石列34は、東西方向に延びる溝状の掘形をもち、掘形の検出長約2.5ｍ、幅0.8～1.0ｍ、深さ0.35～0.45ｍである。西側は石垣30の掘形に削平される。掘形の底は東から西に深くなる。掘形の東半に根石がＬ字状に４石据わる。根石の大きさは長径0.3～0.5ｍである。東西方向の根石３石は北に面を揃える。根石の背面には栗石が幅0.4ｍの厚さで充填されている。築石は残存していない。掘形の西半では根石の抜き取り痕を検出した。

石抜取溝35は、東西方向に延び、掘形の検出長約5.0ｍ、幅約1.3ｍ、深さ約0.5ｍである。西側は石垣30の掘形に削平され、北は後述する階段100を削平している。掘形の底は東から西に深くなる。根石や築石は全て抜き取られ、背面の栗石が流出している。抜き取り痕跡と栗石の残存状況から、南に面を揃える石列であったと考えられる。

三和土33は、検出長約2.5ｍ、幅約2.4ｍある。固く叩きしまり、上面の標高は東から西に低くなる。

門２（巻頭図版３、図版７） 調査区西部で検出した、路面26に開く門跡である。三和土80、石列25・85、集石24・75、礎石83・84で構成される。これらは木幡山伏見城期の整地層上面で成立する。遺構の方位は、石列85を基準とすると、北に対して西に約７度振る。石列25・85は門の袖石、その間の三和土80は路面、集石24・75は門柱を立てる礎石の据付穴と考えられる。

石列25は、東西方向に延びる溝状の掘形をもち、掘形の検出長は約3.3ｍ、幅約1.1ｍ、深さは約0.4ｍである。南に面をもつ根石が１石残っており、長径0.8ｍ、短径0.4ｍ、高さ約0.3ｍである。背面には径0.05～0.3ｍの栗石が充填されている。根石前面は版築状に土を入れて叩きしめており、

根石はほぼ埋まった状態となる。

石列85は、根石６石がＬ字状に据えられ、北と東に面を揃える。東西方向約２ｍ、南北方向1.3ｍである。根石の大きさは径0.4～0.7ｍで、角の石はＬ字状に加工されている。根石据え付けのための掘形は平面では明瞭に検出できなかったが、攪乱断面と断割調査で溝状の掘形をもつことを確認した（断面Ａ・Ｃライン）。根石据え付け後に路面の整地を行っている。根石の背面には径0.05～0.1ｍの栗石が充填されている。

三和土80は、検出長約1.3ｍ、幅約1.6ｍある。路面上で特に固く叩きしまる。上面の標高は東から西に低くなる。

集石24・75は、平面形は隅丸長方形を呈し、長径約1.0ｍ、短径約0.5ｍで、径0.05～0.15ｍの礫が充填されている。集石24・75間の芯々距離は2.4ｍである。

門２の部分では、石垣30は検出されず、約0.5ｍの段差となる。犬走上には径0.1～0.2ｍの礫が敷かれている。犬走上では礎石83・84を検出した。北側の礎石83は長径0.4ｍ、短径0.2ｍ、南側の礎石84は長径0.5ｍ、短径0.3ｍである。礎石間の芯々距離は1.8ｍである。

また、礎石83の北で地下式礎石86を検出した。掘形の径約0.4ｍ、深さは0.55ｍ、礎石の長径は0.28ｍである。礎石83に先行する遺構とも考えられるが、南側に対となる遺構を発見しておらず、性格は不明である。

石垣基礎10（巻頭図版１、図版８・９・19～21） 調査区中央部で検出した基盤層上面で成立する東西方向の石垣の基礎部分である。溝状の掘形内に石垣の根石を８基確認した。残存する根石列を基準にすると、遺構の方位は北に対して西に約18度振る。西側は石垣30に削平され、東は調査区外へ延びる。

掘形の検出長は約17ｍ、幅約1.5～２ｍ、深さは検出面から0.35～0.7ｍである。断面形は箱形で、掘形底部の標高は東端で38.9ｍ、西端では38.4ｍで、東から西に低くなる。Y＝－20,910付近では、基盤層を一部掘り残すことで掘形の底が土橋状の高まりとなっている。土橋状の高まりより西側では、底面が約0.2ｍ低くなる。

掘形内に石垣の本体となる根石が据わる。根石は南に面を揃える。根石は西側に５石、東側に３石の計８石が残っている。そのうち東側のY＝－20,906ライン上に位置している１石は原位置を保っていないと考えられる。根石の頭を検出面より0.1～0.2ｍの深さで検出していることから、石垣の機能時には根石は完全に埋まっていたことがわかる。根石の傾斜角度は平均して約60度である。根石は掘形の南寄りに据えられ、背面には栗石が充填されている。根石の前面は、版築状に土が積まれ、固くしまる。西側の５石は、長径0.5～0.7ｍの比較的大きな石材が用いられており、うち４石が石英斑岩である。確認できた範囲で矢穴は認められないが、一部ハツリ加工を施したような痕跡が認められるものもある。一方、東側の３石は、長径0.35～0.7ｍあるもののやや小ぶりで、石材は砂岩の自然石である。土橋状高まりの西側の根石が抜き取られている部分では、掘形の底に長径0.2～0.4ｍの石が半円形に並べられており、これは根石の角度を調整する介石と考えられる。また、東側のY＝－20,906ライン付近では、根石を取り上げて根石前面下部に径0.1～0.15ｍの石が

直線的に並べられていることを確認した（図版９左下）。栗石は、上層では径0.03～0.1ｍの小ぶりの礫を主体とし、径0.2ｍ前後のこぶし大の礫が少量混じる。下層は径0.1～0.25ｍのやや大ぶりの礫が用いられている（図版９左上）。ただし、西側のY=－20,914ラインの断割調査では、下層でも大ぶりの礫は認められなかった。

石垣基礎10は、根石や築石を抜き取った後、礫や瓦を含む土で埋め戻し、叩きしめている。埋土からは金箔瓦をはじめ、安土桃山時代の遺物が出土した。

階段100（巻頭図版３、図版10）　調査区北西壁際で検出した東西方向の階段である。検出長は東西約3.0ｍ、南北約2.0ｍである。北・東は調査区外へ延び、西は石垣30、南は石抜取溝35に削平される。西から東へ上がる１段の踏石４石と南側の耳石２石のみを検出しており、全体の規模は不明である。踏石は長径約0.4ｍの石を西に面を揃えて並べている。方位は北に対して西に約９度振る。踏面は径0.05～0.1ｍの円礫を敷き詰めて固め、上下段ともに化粧土を施している（断面Ｄ－15・16層）。耳石２石は、長径約0.8ｍあり、北に面を揃える。踏石南側の石材も耳石由来のものである可能性があるが、石抜取溝35の栗石の上面に乗っており、原位置を保っていないと考えられる。階段100埋土からは金箔瓦や施釉陶器が出土した。

（３）石材鑑定（図13、表３）

各遺構に使用された石材については、鑑定を橋本清一氏に依頼した。鑑定は石垣基礎10、階段100、石垣30、門１の石列34と石抜取溝35、門２の石列25・85と集石24・75、礎石83・84を対象とした（図13）。表３に遺構別に鑑定した石材の種類と数量を掲示した。なお、各遺構の栗石・集石・敷石については、使用石材の大まかな傾向を把握することを目的とし、一部を抽出して鑑定を

表３　石材構成表

遺　構		石　材										
		石英斑岩	砂岩	チャート	頁岩～粘板岩	黒雲母花崗岩	珪質頁岩	珪岩	角閃石花崗岩	ホルンフェルス	脈石英	計
石垣基礎10	根石	4	4									8
	栗石		16	17	3	2	1	7		1	3	50
	栗石(大)		5	1	1	1				2		10
	介石		2	4	3							9
石垣30	根石	6	14	13	10	1	2	1	1		1	49
	栗石	1	10	6	2	3	10	1		3	1	37
門1	石列34 根石	2		1		2						5
	石列34 栗石		4	6		1		2				13
	石抜取溝35 栗石		3	6	1	1		1		1		13
門2	石列25 根石								1			1
	石列25 栗石	1	9	11	3	1				3		28
	石列85 根石	1							5			6
	集石24	1	8	9		1					1	20
	集石75	2	2	7	1	2		2		1	3	20
階段100	踏石・耳石	3		1	2							6
	敷石		7	13		2	4	1		3		30

※栗石・集石・敷石については、使用石材の傾向を把握することを目的に一部を抽出して鑑定を行ったため、計数は出土数とは一致しない。

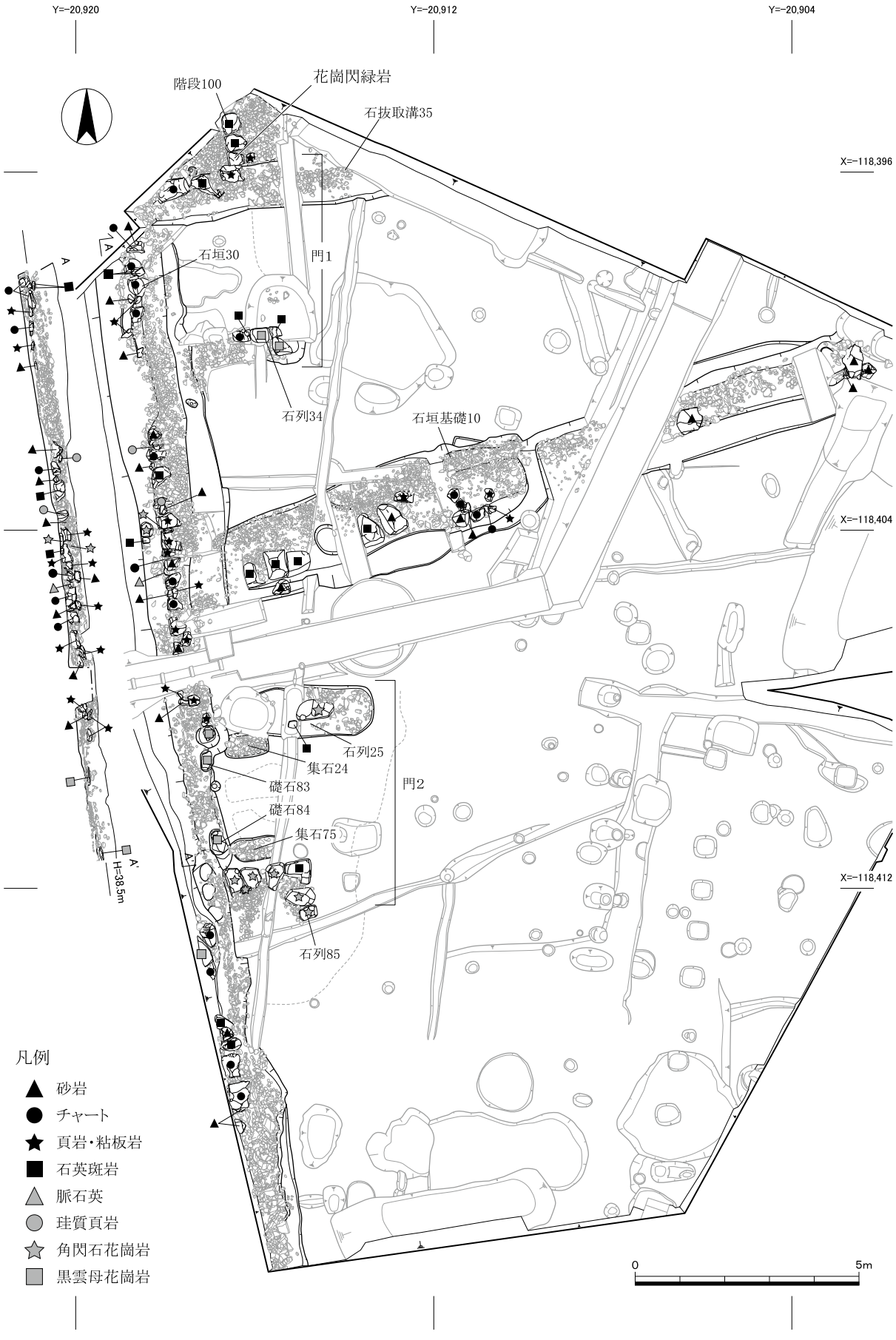


図13　石材分布図（１：125）

行った。以下、鑑定結果をもとに、各遺構から検出した石材の特性を述べる。

使用される石材には、チャート、砂岩、頁岩～粘板岩が主として見られ、いずれの遺構でも丹波帯から採取されたものである。特に、頁岩～粘板岩は醍醐近辺でも得られる丹波帯の熱変成を受けていないものである。また、石垣30南側の栗石に多く使用された角張った珪質頁岩は深草稲荷山山頂にある近辺の丹波帯の石材と類似している。

脈石英は滋賀県三井寺西方から山科北東端、山科東方の音羽川山中に伸びる岩脈から得られる。

黒雲母花崗岩は２種類あり、含有鉱物が線状に配列する領家帯のものとそうでない広島型であり、後者は大文字山あるいは宇治などで採取される。

栗石に使用される礫の中でも、角張った礫は岩体から外れた崖錐礫などの崩落石で、丸みを帯びたものは造成などで地山を掘った際に出てきた礫であろう。これらの礫も砂岩、チャートなどが多い。

どの遺構に使用される石材も、京都近郊から採取・運搬されたと思われる。石垣基礎10と石垣30に注目すると、石垣基礎10の根石は砂岩と石英斑岩のみで構成されている一方、石垣30の根石にはチャートや頁岩～粘板岩など多様な石材を使用している。また、門１の石列34は石英斑岩や黒雲母花崗岩を使用しているのに対し、門２の石列85は角閃石花崗岩を多く使用している。

註

１）　石垣の用語に関しては、「石垣の基礎知識」『世界文化遺産　姫路城石垣の魅力　「石垣フォーラム記録集」』　姫路城郭研究室　2009年を参考にした。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は整理コンテナにして30箱出土した。出土遺物には土器類、瓦類、土製品、金属製品がある。全体の約９割を瓦類が占める。遺物の時期は、弥生時代から江戸時代まで各時期のものがある。ただし、弥生時代から室町時代の遺物は、安土桃山時代から江戸時代の遺構に混入したものである。安土桃山時代から江戸時代初期のものが７割を占め、次いで江戸時代後期の遺物が多い。以下では、遺物種別に概要を述べる。各遺物の個別の詳細については付表１～４にまとめた。

（２）土器類（図14、図版23）

石垣基礎10出土土器（１・２） 石垣基礎10の根石を抜き取った後の埋土から出土した。１は施釉陶器の瀬戸・美濃系折縁皿である。内外面に淡黄色の灰釉がかかる。口径10.6㎝、器高2.3㎝で大窯４期に位置づけられる[1)]。２は輸入陶磁器の青磁椀である。内面と体部外面に釉薬がかかる。龍泉窯系。

階段100出土土器（３） ３は施釉陶器の瀬戸・美濃系天目椀である。内外面に鉄釉がかかり、口縁部は灰白色を呈する。

溝28出土土器（４～７） 溝28は改修前と改修後で２時期に分けられるが、出土遺物に時期差は認められないため、ここではまとめて記述する。４・５は土師器皿Ｓである。４は薄手で口縁部に油煙が付着する。口径9.6㎝、器高2.0㎝である。11Ａ段階に位置づけられる[2)]。６は土師器羽釜で

表４　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器				
古墳時代	須恵器				
奈良時代～平安時代	須恵器				
鎌倉時代	瓦質土器				
安土桃山時代～江戸時代初頭	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品		土師器８点、焼締陶器１点、施釉陶器７点、輸入陶磁器２点、瓦52点、金属製品３点		
江戸時代後期（18～19世紀）	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、瓦類、土製品				
時期不明	土製品		土製品２点		
合　計		36箱	75点（５箱）	２箱	29箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より６箱多くなっている。

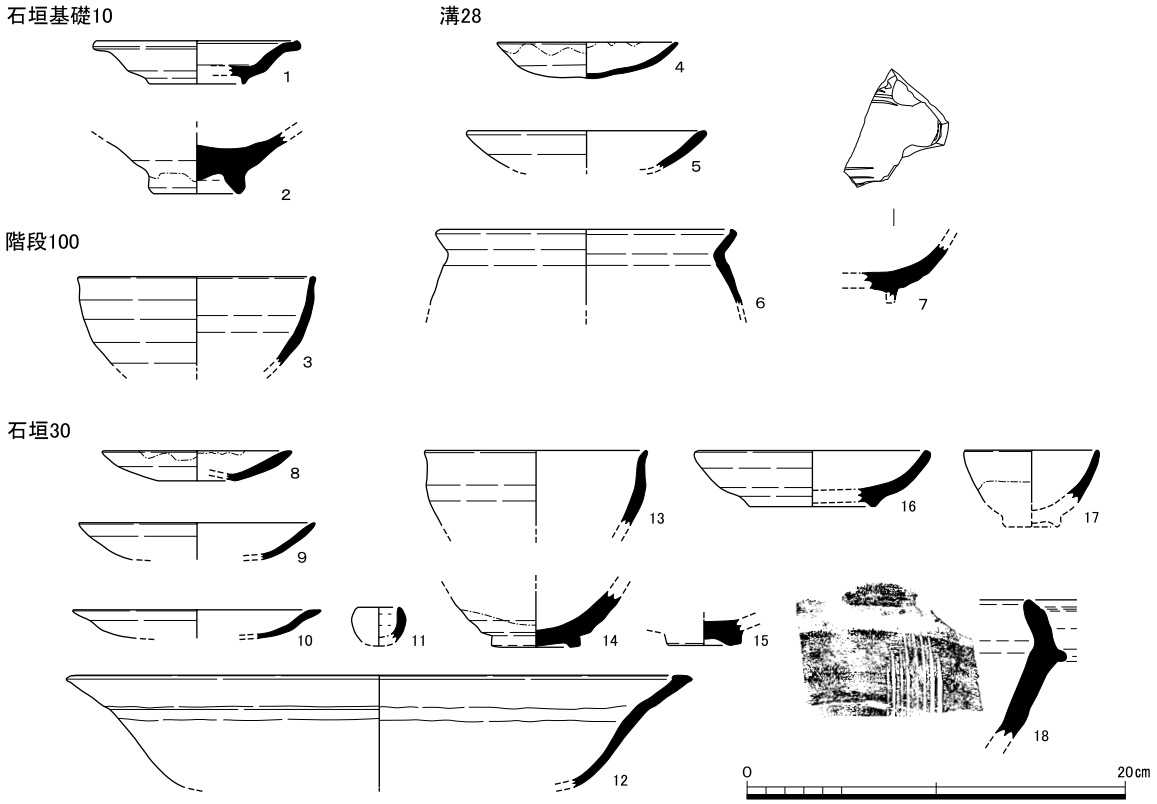


図14　土器実測図（１：４）

ある。口縁端部は上方へつまみ上げる。７は施釉陶器の瀬戸・美濃系青織部の向付である。外面は一部に銅緑釉が、内面に透明釉と銅緑釉がかかる。また、見込み部に鉄絵で３条の文様が描かれる。

石垣30出土土器（８～18）　石垣30の根石と築石を抜き取った後の崩落土から出土した。８～10は土師器皿である。11Ａ段階に位置づけられる。８は皿Sbで、口縁部に油煙が付着する。10は、口縁端部が外反し、内面に面を持つ。11は土師器小壷（つぼつぼ）である。12は土師器焙烙である。13～15は施釉陶器天目椀である。13は瀬戸・美濃系で、内外面に鉄釉がかかる。14は中国産である。ロクロの回転方向が左回りで、内面全体と外面は高台近くまで鉄釉がかかる。15は瀬戸・美濃系で内面全体と外面一部に鉄釉がかかる。16は施釉陶器の瀬戸・美濃系丸皿である。内外面ともに灰釉がかかり、黄色を呈する。大窯３期後半と見られる。17は施釉陶器の唐津焼小杯である。内面全体から外面体部にかけて灰釉がかかる。18は焼締陶器の備前焼擂鉢である。擂目は８条１単位である。口縁部の形状から重根編年Ⅳ Ｂ－２～３期（15世紀後半）に位置づけられる。[3)]

（３）瓦類

金箔瓦（巻頭図版４、図版11）

石垣基礎10埋土から13点、階段100埋土から２点、石垣30崩落土から１点の計16点の金箔瓦が出土した。

瓦１～８は軒丸瓦である。瓦１～４は巴文軒丸瓦である。いずれも瓦当文様凸部と周縁部に朱漆

を塗布し、金箔を貼る〔付章参照〕。瓦５は菊文軒丸瓦で中心の花弁が16枚あり、四重になっている。瓦当文様の凹部に黒色漆を塗布し、金箔を貼る。瓦６～８は軒丸瓦であるが、周縁部のみが残り、文様は不明である。朱漆の上に金箔を貼る。

瓦９～14は軒平瓦である。いずれも唐草文軒平瓦で、瓦当文様凸部と周縁部に朱漆を塗布し、金箔を貼る。

瓦15は飾瓦の一部で、桐文の左側の葉の部分と考えられる。文様の凸部に朱漆を塗布し、金箔を貼る。瓦16は道具瓦の一部と思われる。全体に朱漆が残る。

軒瓦（図版12・22）

金箔瓦以外の軒丸瓦は27点、軒平瓦は28点出土した。そのうち同笵・同文のもの、文様が不明なものを除き軒丸瓦８点、軒平瓦12点を図化した。

瓦17～24は軒丸瓦である。瓦17～21はいずれも左巻三巴文で、巴の大きさ、珠文の間隔が異なる。瓦22は違い鷹羽文軒丸瓦である。違い鷹羽文は浅野家の家紋として使用され、同笵のものが調査18から出土している。瓦23も違い鷹羽文軒丸瓦と考えられる。瓦24は梅鉢文軒丸瓦である。周縁はない。前田家の家紋として使用され、同文のものが調査10から出土している。

瓦25～35は唐草文軒平瓦である。瓦25～27は瓦当凹面と凸面の高低差が小さい。瓦28は向かって左側の唐草文が両方とも上向きになっており、左右非対称である。瓦35は上向きに対向する唐草文で肉彫り状文様の断面は内側が窪む。伏見城跡の発掘調査で比較的多く出土する[4)]。瓦36は唐草文滴水瓦である。平瓦との接合角度は約120度である。

丸瓦・平瓦（図版13・14・22、表５）

丸瓦・平瓦は、石垣30崩落土からの出土数が最も多く、次いで溝28、石垣基礎10埋土の順に多い。表５に石垣基礎10、溝28、石垣30から出土した瓦の破片数と丸瓦の凹面に見られる製作痕の比率を記載した[5)]。石垣基礎10出土の丸瓦は、不明なものを除くと、コビキＡとコビキＢの出土数はほぼ同数である。一方、溝28は不明なものを除けば全てコビキＢであり、石垣30もコビキＡの比率は1.5%である。コビキＡ・Ｂの比率からみて、石垣基礎10出土の丸瓦は、溝28と石垣30出土のものよりも古い様相を示す。

瓦37～40は丸瓦である。瓦37～39の凸面はヘラケズリとナデ調整を施し、凹面には糸切り痕

表５　出土瓦の構成表

		石垣基礎10			石垣30			溝28		
種類	技　法	破片数	技法比率	種類比率	破片数	技法比率	種類比率	破片数	技法比率	種類比率
丸瓦	糸切り(コビキA)	12	26.1%		2	1.5%		0	0.0%	
	鉄線切り(コビキB)	11	23.9%		49	38.0%		34	43.6%	
	不　明	23	50.0%		79	60.5%		44	56.4%	
	合　計	46	100.0%	24.3%	130	100.0%	13.8%	78	100.0%	26.6%
平瓦		143		75.7%	815		86.2%	215		73.4%
合計		189		100.0%	945		100.0%	293		100.0%

（コビキA）のほか、布目と吊り紐痕が残る。吊り紐は1段で、谷部分に結び目を持つ。側面と端縁には面取りが見られる。瓦40は凹面に鉄線切り痕（コビキB）が見られる。

瓦41・42は平瓦である。いずれも布目は確認できない。

丸瓦の瓦37～39と平瓦の瓦41は石垣基礎10出土、丸瓦の瓦40と平瓦の瓦42は溝28出土である。石垣基礎10出土の丸瓦・平瓦は、径・厚みともに溝28や石垣30出土のものより大きい傾向が認められる。

道具瓦（図版15・23）

道具瓦は11点出土しており、そのうち10点を図化した。

瓦43・44は全体像が不明であるが、鬼瓦の一部の可能性がある。瓦43は裏面は強いナデ調整、表面突出部の剥離部分にカキヤブリが認められる。瓦44は裏面に強いナデ調整が認められる。瓦45・46は鬼瓦である。瓦45は表面を板ナデ調整で仕上げる。瓦46は全体をナデと板ナデで仕上げる。瓦47は輪違瓦である。凹面は布目、凸面は縦方向のケズリで仕上げる。瓦48は125度の角度で厚手の平瓦と薄手の平瓦が接合する。全体をナデ調整で仕上げる。瓦49は無文の半円形の軒部に対し約110度の角度で丸瓦が接合する。面戸瓦か。瓦50は水切りを有する右切隅瓦である。瓦51は厚手で、表面は丁寧なナデ、裏面は粗いナデで仕上げる。鬼瓦の一部か。52は熨斗瓦である。薄手で塀などの熨斗瓦と考えられる。

（4）土製品（図15、図版23）

土製品には鞴羽口が2点ある。いずれも土坑13から出土した。

土1は外径7.5㎝、孔径2.3㎝である。心棒作りで、外面はナデである。基部に溶解した鉄分が付着する。孔部は被熱により赤変する。土2は外径7.6㎝、孔径3.0㎝である。心棒作りで外面はナデ調整痕と、溶解した鉄分らしき付着物が見られる。また、窯体が接続している。窯体部は混和材と見られる炭化物を多く含む。

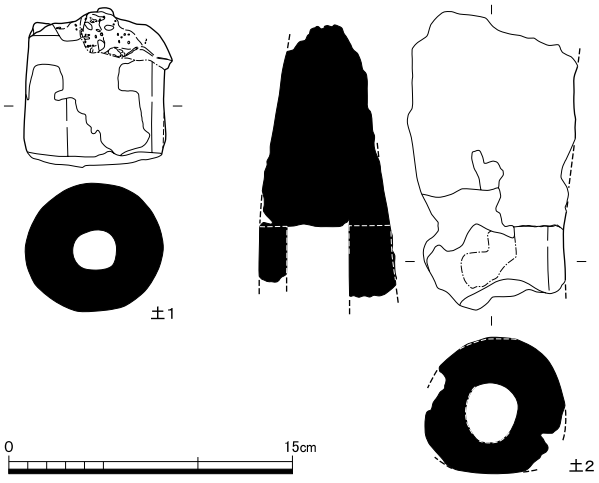


図15　土製品実測図（1：4）

（5）金属製品（図16、図版23）

金属製品には鉛玉、刀子、角柱状鉄製品がある。

金1は鉛玉である。直径1.3㎝、重量7.7ｇである。石垣30崩落土から出土した。鉛同位体比測定によると、素材は外国産である可能

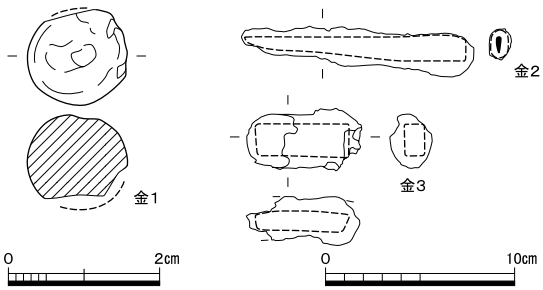


図16　金属製品実測図（1：1、1：4）

性が高い（付章参照）。

金２は鉄製刀子である。残存長12.3㎝、最大幅2.3㎝である。

金３は角柱状の鉄製品である。断面は方形で、縦断面はやや湾曲する。

註

１） 瀬戸・美濃系施釉陶器の編年については、藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通　－研究の現状と課題－」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　－東アジア的視野から－』 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001年を参考にした。

２） 土師器皿の型式・年代については、平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年に準拠する。

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B C	A B	A B	A B	

３） 備前焼擂鉢の編年については、重根弘和「中世備前焼に関する考察　－製作技法から－」『古文化談叢　54』 九州古文化研究会　2005年を参考にした。

４） 山崎信二『近世瓦の研究　奈良文化財研究所学報第78冊』 奈良文化財研究所　2008年

５） 16世紀末から17世紀初頭にかけて、丸瓦を粘土塊から切り離す手法は、糸切り（コビキＡ）から鉄線切り（コビキＢ）に変わり（森田克行『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会　1984年）、京都におけるコビキＢは天正年間末頃に出現する（森島康雄「聚楽第と城下町」『豊臣秀吉と京都　－聚楽第・御土居と伏見城－』 文理閣　2001年）。森島氏は、聚楽第東堀から出土する丸瓦と、聚楽第大名屋敷地内から出土した丸瓦を比較した結果、聚楽第のものは大半がコビキＡ、大名屋敷地のものはほぼコビキＢであることを指摘し、コビキＢの瓦が多いのは天正19年（1591）の京中屋敷替えに伴って新調したものとする（森島康雄「聚楽第と城下町の瓦」『織豊城郭　創刊号』 織豊城郭研究会　1994年）。森島氏の研究に代表されるように、各遺構から出土する丸瓦のコビキ痕の比率を比較することによって、安土桃山時代の遺構の前後関係を推察することができる。

5．まとめ

今回の調査では、木幡山伏見城期の浅野但馬守の屋敷地南西部とされる場所で調査を行い、安土桃山時代の指月伏見城期、木幡山伏見城期、江戸時代後期の遺構を検出した。以下では、遺構の変遷を述べつつ、課題に触れる。

（1）指月伏見城期（図17）

調査では、指月伏見城期の遺構と考えられる石垣基礎10・階段100を検出した。

石垣基礎10は、はじめに溝状の掘形を掘り、その中に石垣基底部となる根石を据え、介石で根石の角度を調整、栗石を背面に入れて、最後に根石の前方を土で埋め固めるという工法を採用している。掘形の規模は、幅が1.5～2.0ｍ、深さは根石が完全に埋まる深さで最大0.7ｍあり、安土桃山時代では類例を見ない。根石は南に面を揃えており、この上に築石が積まれ、北側に一段高い平坦面が設けられていたと考えられる。この石垣基礎10は、木幡山伏見城期の石垣30に壊されている。また、石垣基礎10出土の丸瓦は、凹面に見られるコビキＡの比率が石垣30・溝28出土のものよりも高く、古い様相を示す。遺構の重複関係と出土遺物の両面から、石垣基礎10は石垣30に先行することがわかる。また、遺構の主軸方位を見ると、石垣30や溝28の方位が北に対して西に約７度振れているのに対し、石垣基礎10は北に対して西に約18度振れているという違いがある。この石垣基礎10の方位は、調査地の南側を通る現在の立売通の方位に近似する。立売通は指月伏見城の北堀と推測されている道路であり、指月伏見城推定地では近似する方位の地割が残るほか、推定地北側でも調査25や京都府総合教育センターの調査[1)]などで、安土桃山時代の２時期の遺構面の下層で立売通の方位と近似する遺構が検出されている。これらのことから、石垣基礎10は、木幡山伏見城期の石垣30や溝28に先行し、指月伏見城期に構築された遺構と判断した。

階段100は、西から東に上がる東西方向の階段の一部である。西は石垣30、南は門１を構成する石抜取溝35に壊されていることから、これらの遺構より古く、指月伏見城期に遡る遺構の可能性が高いと判断した。遺構方位は北に対して西に約９度振り、石垣基礎10とも異なる。また、石垣基礎10から出土した金箔瓦は、文様が判別できるものは、軒丸瓦は全て三巴文、軒平瓦は全て唐草文で文様凸部に金箔が貼られる共通性があり、科学分析の結果、箔下塗装にも一括性の高い朱顔料が用いられていることが判明した。一方、階段100から出土した金箔菊文軒丸瓦は、今回出土した金箔瓦中で唯一、黒色漆を箔下塗装とし、文様凹部に金箔が貼られるものである。桐文の金箔飾瓦も出土しており、出土瓦の様相や遺構方位の相違からみて、階段100と石垣基礎10にも前後関係は不明であるが、時期差がある可能性が考えられる。

この石垣基礎10と階段100については、石垣の基礎部分と階段の一部を検出したのみで、石垣の高さや規模、全体構造などを復元することは現段階では困難である。また、性格についても城郭本体に関わるものと武家屋敷など城下に関わるものの２つの可能性が考えられるが、石垣基礎10については、先述したように、これまでみつかった伏見城関係の石垣のみならず、全国的にみても同

時期では類例のない入念な工法が採られていることから、城郭本体に関連する遺構である可能性が高いと考えている。その場合、石垣基礎10の検出位置が、これまでの指月伏見城推定範囲からははずれた北側であることが問題となる。指月伏見城の縄張りについては、近年、詳細な発掘調査成果の検討や現地形、明治・大正期の測量図の分析などをもとに、北端を立売通、東端は舟入、南端は宇治川に面した崖面、西端は国道24号線とし、その内側を３本の南北堀によって区切り、西から東に雛壇状に高くなる４つの平坦面から構成されていたとする案が提示されている[2)]。城郭範囲についてはこれまでも諸説あったが[3)]、北端を立売通とすることは概ね一致している。地形的な要因に加え、調査６や調査20で堀の可能性が高い遺構が見つかっていることが大きな根拠となっている。一方で、調査６・20以外の立売通の北側や南側の調査では現地表下0.5～2.2ｍで地山と判断された面が検出され、その面で桃山期の遺構が検出されていることから、直線的な堀ではない可能性も指摘されている[4)]。また、今調査隣接地で実施された調査18では、立売通に面する南側で、基盤層が標高37.0ｍで検出されている。石垣基礎10検出面の標高は約39.0ｍであり、立売通に並行した直線距離になおすと30ｍで約２ｍの比高差となる。このことから石垣基礎10から南に向かって、緩やかに下がる地形となっていたことがわかり、立売通はこの部分では空堀となっていた可能性も考えられ、直線的ではなかった可能性と合わせ、立売通を防御的な機能を備えた城郭の外堀とすることには再考が必要と思われる。

北限を再考するにあたり周辺調査成果を見直すと、大手筋の北と南で実施された調査９・25（図８）では、整地層を挟んで安土桃山時代の２時期の遺構面が検出されている。調査25では上層と下層で遺構の方位が異なる。大手筋北側の調査17では厚い整地層の下で、東面する石垣と、金箔瓦を多量に含む土坑が検出されている。また、現況地図からみて、大手筋の国道24号線以東が立売通の方位の振れと似ていることがわかる。天明八年（1788）に模写されたとされる『伏見御城櫓并屋敷取之絵図』（京都市蔵）でも、城の大手へ続くこの道だけは方位が異なっており、木幡山伏見城築城に伴って整備された可能性は否定できないが、発掘調査でも大手筋近辺で２時期の遺構面が検出されている事例が複数あることから、城郭の縄張りが大手筋付近まで拡がっていた可能性を考慮する必要があろう。大名屋敷を含む全体的な縄張りはさらに北まで拡がっていた可能性が高く、図８の周辺調査で取り上げた調査成果以外にも、先述したように、京都府総合教育センターや桃山高校の発掘調査から木幡山伏見城期以前に遡る遺構面が検出されている[5)]。指月伏見城期から大名屋敷が存在していたことは史料からも確認でき、秀吉の隠居屋敷から本格的な城郭と城下町へと作り替える動きの中で、聚楽第から伏見への大名屋敷の移転も文禄３年（1594）頃までには概ね終了していたとされる[6)]。その中で、木幡山伏見城段階で肥前中納言邸（国道24号線東、大手筋北側）が所在した場所には、もとは秀吉の隠居屋敷普請を任じられた豊臣秀次の屋敷があり、その近辺には、池田輝政・山内一豊・田中吉政など秀次宿老の屋敷が固めて配置されていた[7)]。指月伏見城の城郭の縄張りが大手筋付近まで拡がっていたとすれば、それに面する北側の一等地に秀次屋敷が置かれたこととは矛盾しない。

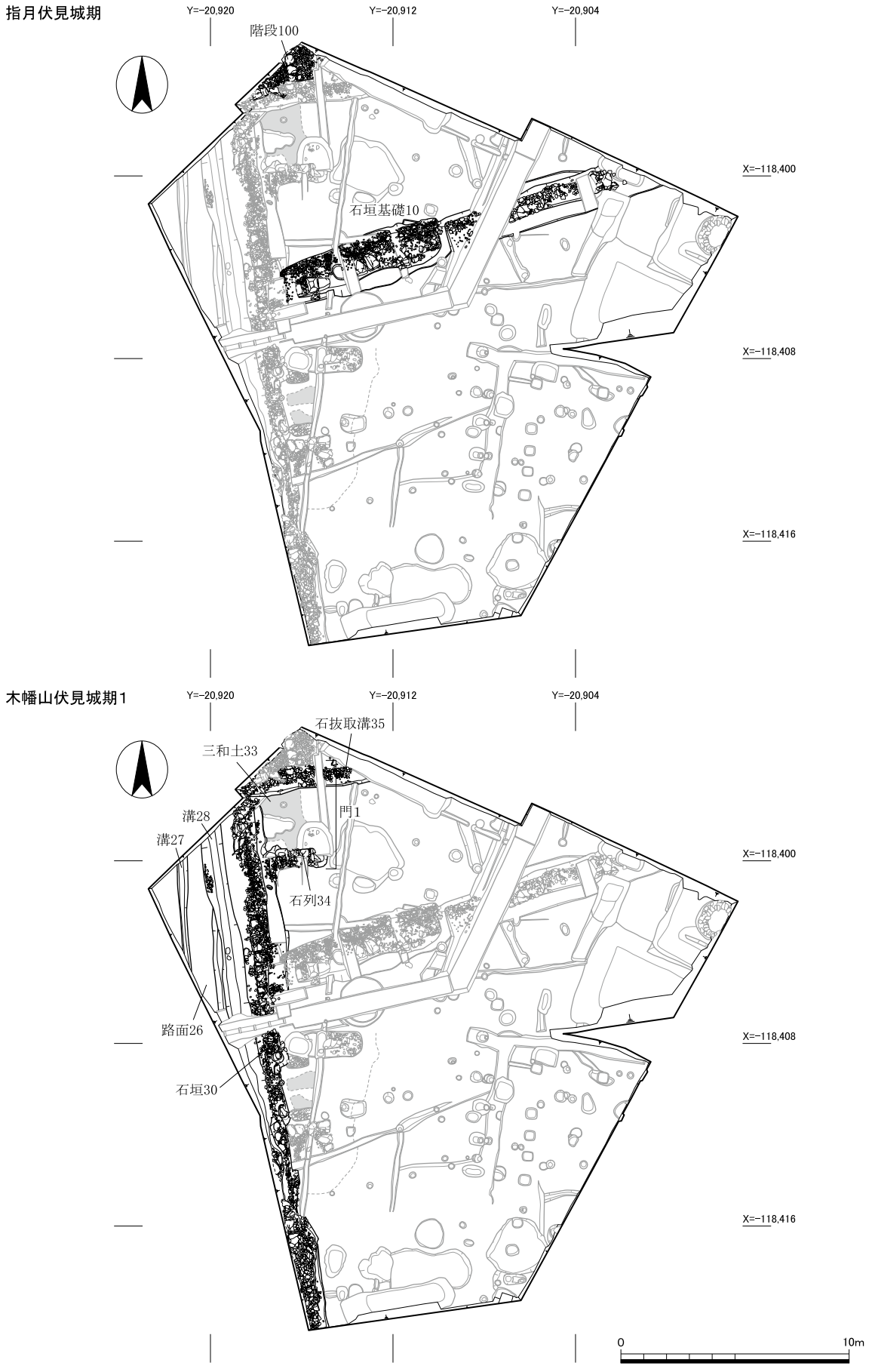


図17　遺構変遷図１（１：250）

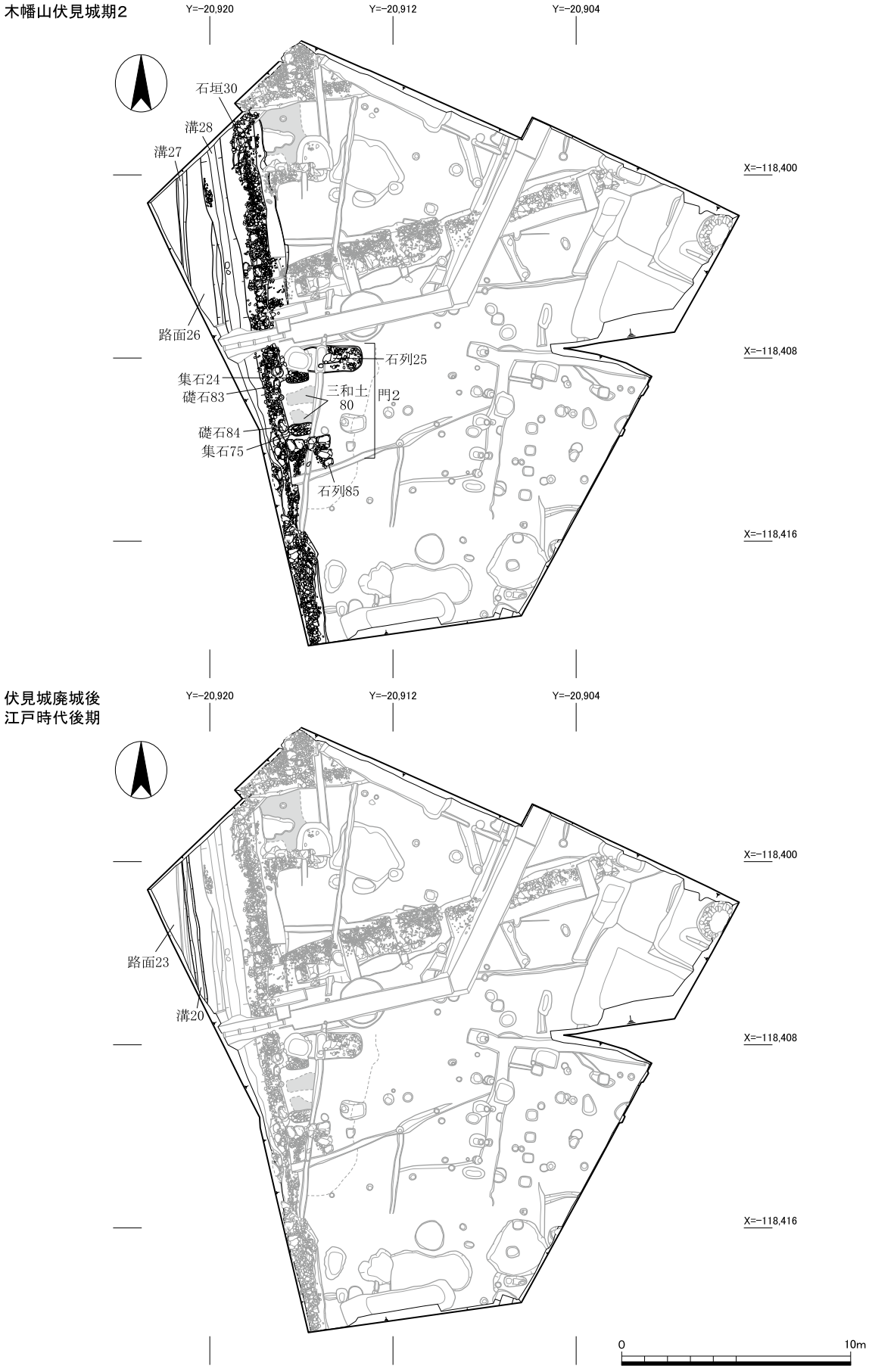


図18　遺構変遷図２（１：250）

（２）木幡山伏見城期（図17・18）

木幡山伏見城期の遺構は、石垣30、路面26、溝28、門１・２などを検出した。

調査区西端で検出した南北方向の石垣30は、西に面を揃え、東側の一段高い平坦面と西側の路面26を画するものである。指月伏見城期のものと考えられる石垣基礎10と階段100を壊して構築されている。江戸時代に描かれた絵図類[8)]では、調査地は浅野但馬守の屋敷地として描かれている。また、石垣30崩落土から、浅野家の家紋である違い鷹羽文の軒丸瓦が出土していることから、石垣30は浅野但馬守の屋敷地と西側の道路とを分けるものと考えられる。隣接する調査18でも違い鷹羽文の軒丸瓦や滴水瓦が出土している。この石垣30に壊される石垣基礎10は、根石も含め大半の石材が抜き取られていた。指月伏見城が地震により倒壊し、木幡山に城郭主要部が移転して当該地を大名屋敷地として整備する際に、石垣基礎10の上に構築されていた石垣を解体して段差を削平し、新たに石垣30を構築したと考えられる。石垣基礎10の根石抜き取り跡は、礫や瓦を混ぜた土を入れて非常に固く叩き締められており、屋敷地として利用する前提で、入念な埋め戻しが行われたと推測される。また、路面26の道路側溝と考えられる溝28の埋土や石垣30崩落土からは17世紀前半代の遺物が出土しており、これは木幡山伏見城廃城の時期と合致する。

石垣30に接して北側で検出した門１と南側で検出した門２は、路面26に開く門と考えられる。いずれも木幡山伏見城期の整地層上面で成立するものの、門１の西側は石垣30の掘形に削平され、上面は整地層で覆われていたことから、門２より古い段階のものと考えられ、門１から門２への作り替えの可能性が考えられる。門１については、袖石と考えられる石列34と石抜取溝35、その間の三和土の一部が残るのみで門の構造については不明であるが、門２については同じく袖石と考えられる石列25・85と三和土のほかに、門柱の礎石据え付け穴と考えられる集石24・75や一段下がった犬走上に礎石83・84が残る。集石24・75に対応する控柱の痕跡は確認できなかった。控柱の礎石が失われたか、親柱２本のみで建つ棟門で、石垣30の上に構築されていたと考えられる塀と連結するものであった可能性がある。また、門２付近の溝28埋土や石垣30崩落土からは多量の瓦が出土しており、門２は瓦葺であった可能性が高い。犬走上に置かれた礎石83・84は柱間1.8ｍと、集石24・75の芯々距離約2.4ｍより狭く、門から溝28を渡って路面26に至るための橋の橋脚の礎石などの可能性が考えられる。これまで伏見城跡の発掘調査で検出された門遺構の数は少ないが、御香宮神社西側の桃山町金森出雲で実施された調査では、良好な状態で門が検出されている[9)]。これは、南北約７m、東西約４ｍの長方形に石列をめぐらせ、その列中に門柱の礎石を配置するもので、礎石間の距離は約6.6ｍある。今回検出した門１・２は、これと比較すると規模が小さい。絵図類によると浅野但馬守の屋敷地は、北は大手筋に面していることから、規模の大きな表門は北にあり、今回検出した門１・２は通用門として機能したと考えられる。

（３）江戸時代後期（図18）

江戸時代後期の遺構としては、溝20・路面23を検出した。

路面23は、木幡山伏見城期の路面26の上に約0.5ｍ盛土をして構築され、その上面から道路側溝と考えられる溝20が掘り込まれている。溝20の方位は、木幡山伏見城期の溝28と近似する。このことから、木幡山伏見城廃城後も、道路と側溝は位置と方位を踏襲して維持され、出土遺物から19世紀まで機能したと考えられる。

註

１） 森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』 文理閣　2001年

２） 新田和央「Ⅴ総括　１.発掘調査と地形からみる指月城の縄張り」『指月城跡・伏見城跡　発掘調査総括報告書』 京都市文化市民局　2021年

３） 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』 文理閣　2001年、山本雅和「伏見・指月城の復元」『リーフレット京都』№261　財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　2010年、馬瀬智光「伏見屋敷と初期伏見城（指月城跡）」京都市文化財ブックス第31集『天下人の城』 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　2017年など

４） 馬瀬智光「Ⅴ総括　２．城郭史における指月城の位置づけ」『指月城跡・伏見城跡　発掘調査総括報告書』 京都市文化市民局　2021年

５） 前掲註１に同じ。

６） 谷　徹也「首都としての伏見」『京都の中世史６　戦国乱世の都』 吉川弘文館　2021年

７） 谷　徹也氏の御教示による。

８） 神戸市立博物館蔵『伏見古城并古町図』寛文元年（1661）、中井忠重蔵『伏見古御城絵図』宝永七年（1710）～享保二十年（1735）、京都市蔵『伏見御城櫛并屋敷取之絵図』天明八年（1788）、など

９） 原山充志・小森俊寛「伏見城跡２」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988年

付章　伏見城跡出土金箔瓦・鉄砲玉の分析調査

北野信彦（龍谷大学文学部）

はじめに

伏見区桃山町鍋島のJR桃山駅前周辺は、指月伏見城期外郭および木幡山伏見城期の武家屋敷が所在した地区である。今回の公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所による発掘調査では、指月伏見城期関連の石垣基礎と階段とともに、江戸時代の絵図に記載のある木幡山伏見城下の浅野但馬守（浅野長晟）屋敷地と西側道路を分ける石垣区画及び門跡が検出された。指月伏見城期の石垣基礎10から13点、階段100から２点、木幡山伏見城期の石垣30から１点の計16点の金箔瓦が出土した。このうち14点の金箔瓦に関する分析調査を実施する機会を得たので、結果を報告する。また、本遺跡からは白サビに覆われた鉄砲玉と考えられる丸玉も一点出土している。この出土資料についてもこの結果を併せて報告する。

（１）調査対象試料

本調査では、出土金箔瓦片14資料を、京都市埋蔵文化財研究所の下鳥羽収蔵庫から本学大宮学舎文化財科学室に一旦搬入し、全体の状態観察、基本の写真撮影、漆箔箇所の拡大観察、可搬型および据付型蛍光Ｘ線分析装置を用いた材質の定性分析、などをまず行った。次に詳細な漆箔に関する分析調査を実施する目的で、１～２㎜角の漆箔料剥落小片を各資料から１試料ずつ京都市埋蔵文化財研究所担当者と協議のうえ注意深く採取し、漆箔顔料の詳細観察、金箔の金位測定の分析試料とした。

また、白サビで覆われた鉄砲玉と考えられる丸玉は、据付型蛍光Ｘ線分析装置による定性分析の結果、鉛玉であることが確認された。そのため、この鉛素材の鉛同位体比測定を実施した。

（２）調査方法

１　漆箔の拡大観察

調査対象である各金箔瓦における漆箔の表面状態は、まず（株）スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で拡大観察した。引き続き、注意深く採取した漆箔小破片試料は、（株）ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープにより1,000倍から2,500倍の高倍率で特に朱漆の朱顔料粒子と黒色漆の観察を実施し、それぞれ画像記録として保存した。

２　金箔および接着漆の無機元素の定性分析

調査対象試料である各漆箔の金箔および接着漆の構成無機元素の定性分析は、まず（株）リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を調査対象箇所に注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は、測定視野は直径8.0㎜スポット、管球は対陰極Ａｇターゲット、管電圧は15kＶ～40kＶの切替操作、大気圧で分析設定時間は60秒である。引き続き採取した

漆箔小破片試料の無機元素に関する詳細な定性分析は、分析用カーボンテープに固定した顔料を（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は200.0～250.0cpsである。

３　金箔の金位（金：銀配合比率）の測定

調査対象試料の金位である金：銀配合比率の測定値の算定には、まず（株）日立ハイテクノロジーズ製の走査型電子顕微鏡（SU3500）による剥落試料の観察を行った。設定条件は、倍率100倍、ワークディスタンス10.0㎜、加速電圧30.0V、スポット強度50.0である。金：銀：銅含有率の測定は、電子顕微鏡に付設している（株）堀場製作所製エネルギー分散型X線分析装置（EMAX X-MaxN）を用い、それぞれ５ポイントの質量測定を行った。設定条件は、加速電圧30.0、照射時間は任意である。なお、この分析は龍谷大学文学研究科日本史学修士課程専攻院生の末次優衣が実施し、北野がそのデータを確認して平均値を算定した。

４　鉛玉の産地同定のための鉛同位体比測定

分析用の試料は、梱包紙に残存した白色サビの剥落片を回収して分析に供した。鉛同位体比測定の方法は、まず、試料に硝酸を加えて溶解したのち、直流Vで電気分解を行った。鉛は陽極の白金電極板上に二酸化鉛として析出するので、硝酸と過酸化水素水で溶解させ、分析用の溶液とした。次に、鉛同位体比測定には、Finnigan社製、MAT262、加熱温度は1200℃、昇温時間は20分である。なお、比較標準試料の鉛は、NBS-SRM-981を使用して規格化した。

（３）調査結果

各種の分析調査を行なった結果、次のような基礎的データの蓄積を得た。

１　分析した金箔瓦は、瓦当部に唐草文を有する軒平瓦が６資料、瓦当部に三巴文を有する軒丸瓦が４資料、菊文様の軒丸瓦１点、文様不明軒丸瓦２点、桐文飾瓦１点の合計14資料である。このうち、瓦５の菊文様瓦のみ凹部に金箔が貼られているが、他の金箔瓦は瓦縁部や文様の凸部に赤色の箔下塗装の上に金箔が貼られるなど類似性が高かった。

２　各金箔瓦の金箔箇所それぞれ数箇所ずつ可搬型蛍光X線分析装置を用いた非破壊分析と、据付型蛍光X線分析装置を用いた定性分析を行った。その結果、いずれも比較的顕著なAu（金）を検出した。その一方でAg（銀）やCu（銅）はほとんど検出されなかった。さらに、資料13以外の資料からはいずれも金（Au）とともに水銀（Hg）のピークが検出された。そのため、これらはいずれも黒漆や生漆ではなく朱漆が箔下漆として使用されたものと理解した。

３　各金箔瓦の漆箔の表面状態を50倍の拡大観察した結果、いずれも瓦胎部の上にまず接着材料である漆塗料を塗布し、その上に１枚掛けで金箔が貼られている状況が確認された。さらにこの漆箔箇所の状況について、採取破片試料を用いて詳細な高倍率観察を実施した。その結果、瓦５は黒色漆を箔下漆としているが、その他の資料は、いずれも10～50μm程度の比較的均一な粒度の深紅色を呈する朱顔料粒子の集合体が観察された。この資料群からはいずれもHg（水銀）のピー

クが検出されているため、箔下朱漆の使用顔料には、一括性が高い朱顔料が用いられていることがわかった。

4　蛍光X線分析装置による金箔瓦の金箔の定性分析を行った結果では、金純度が高い金箔であると想定したが、本調査では、さらに各資料から採取した金箔小破片試料を電子顕微鏡に装着したEPMA分析装置による微量分析と金位（金：銀配合比率）平均値の測定を実施した。その結果、各金箔瓦に使用された金箔の金位は、いずれも96～98%の金含有量であることがわかった。これは、天正大判の金位70%を大きく超え、当時は純金と認識されていた天正分銅金（備蓄金）とほぼ同じ金位である。

5　瓦１～４・６・８～14は、いずれも指月伏見城期の石垣基礎10から出土した一括性が高い金箔瓦である。また、瓦５・15は、指月伏見城期か指月隠居屋敷期の階段100から出土している。

分析調査の結果、いずれの金箔瓦に貼られた金箔の金位、箔下の朱漆の朱顔料ともに、瓦５が黒色漆である点を除き、ほぼ同じ材料が使用されていた。このことから、指月伏見城造営に伴い瓦の種類関係なく一括性が高い金箔貼りの瓦を調達したか、これらの金箔瓦が葺かれた建造物自体が同じであったかなどの条件が関係しているものと認識した。

6　本遺跡から出土した鉄砲玉と考えられる丸玉は、蛍光X線分析では鉛（Pb）のピークが検出されたため、鉛玉であることが確認された。そのため、（株）日鉄テクノロジーズに委託して鉛同位体比測定を実施した結果、馬淵久夫・平尾による鉛素材の産地のうち、中国後漢・三国鏡の領域である華中・華南の鉛鉱山に近似するものの、単体ではなく他の地域の鉛素材を複素材としてブレンドした可能性も推定された。いずれにしても、本資料の鉛玉における基本的な鉛の主素材は華中・華南ラインの鉛鉱山に求められ、日本産鉛の領域とは外れる。そのため、本資料は、平戸もしくは長崎を通じた東南アジアおよび中国交易により調達された海外産の鉛素材を東南アジア交易を通じて調達したことが確認された。

（引用文献）

田口 勇・尾崎保博 編（2009）『みちのくの金　－幻の砂金の歴史と科学－』、アグネ技術協会

北野信彦（2018）『桃山文化期漆工の研究』、p.352、雄山閣

北野信彦（2021）「2 指月伏見城出土金箔瓦の分析調査」『指月城跡・伏見城跡発掘調査総括報告書』、京都市文化市民局

北野信彦（2022）『建造物塗装彩色史の研究』、p500, 雄山閣

表１　出土金箔瓦成分表

遺物番号	No.	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Au	Hg	Pb	金位計算値
瓦1	8.1	15.2K	14.1K	4459	4833	576	23.8K	76	219	11	11	21	1142	2968	16	－
	8.2	5723	7811	2763	3327	638	22.6K	82	206	20	26	30	968	2205	12	
	8.3	12.2K	9714	2897	3777	648	22.4K	73	189	29	15	23	1270	2571	11	
	8.4	18.7K	12.4K	5113	4386	572	22.5K	88	216	37	10	25	1390	3859	4	
	8.5		13.6K	4552	4865	791	25.7K	53	107	16	15	27	1		28	胎土
瓦2	7.1	17.8K	8191	4434	3677	1040	22.2K	79	222	25	27	27	2018	5133		98.30%
	7.2		3725	3763	1384	594	18.3K	107	262		44	46	2619	8422		
	7.3	28.5K	5781	6074	2732	796	18.2K	92	278		32	42	2608	6761		
	7.4		16.1K	14.7K	6054	325	19.6K	62	93		13	24	2		24	胎土
瓦3	10.1	7183	11.5K	2046	5194	533	30.2K	75	143	23	23	29	591	1281	14	98.30%
	10.2	9058	11.6K	2040	5056	522	30.0K	62	145	13	25	32	700	1423	12	
	10.3		11.0K	1476	4210	496	29.0K		73		20	29	11		21	胎土
瓦4	11.1	29.1K	12.0K	2702	5581	538	31.7K	82	176		12	24	268	4303		99.30%
	11.2	35.8K	10.2K	2325	4890	498	29.7K	79	184	7	13	25		4364		
	11.3	13.3K	9044	1868	3350	500	26.3K	74	145	17	23	32		4928	9	
	11.4		24.5K	3520	6230	727	30.3K	53	90	21	7	24	8		18	胎土
瓦5	13.1	1394	11.1K	11.8K	4366	485	11.7K	55	84	13	11	17	299	26	27	97.90%
	13.2	1953	11.7K	10.2K	4400	466	11.2K	57	75		5	12	444	15	32	
	13.3	2097	9543	16.8K	2989	354	9994	50	75		7	16	512	34	32	
	13.4		10.0K	1679	5359	422	19.3K	78	86		8	19	5		28	胎土
瓦6	12.1	29.3K	6513	10.9K	3286	451	26.6K	71	239	20	25	29	1860	5124	9	－
	12.2	28.7K	12.4K	10.1K	5530	591	32.4K	75	205	13		18	543	3196	6	
	12.3	18.1K	13.6K	7131	5932	666	32.5K	60	149	18		17	284	2342	18	
	12.4		14.8K	4220	6304	373	24.7K	66	106	21		17	6	7	19	胎土
瓦8	9.1	3622	3063	1212	939	734	42.5K	127	136	34	11	9	521	2212	17	97.60%
	9.2	19.9K	13.1K	6157	4159	633	26.8K	90	164	27	17	23	31	3563	16	
	9.3	14.9K	10.6K	5073	4066	544	39.2K	84	183	29	25	29	936	3213	21	
	9.4		13.6K	3052	976	869	40.5K	81	90	24		19	15		25	胎土
瓦9	4.1	19.1K	9123	7036	4215	439	27.5K	66	204	19	20	34	600	3436	3	96.80%
	4.2	1648	9090	1654	3223	495	25.5K	59	95		21		158	724	19	
	4.3	21.0K	8999	7572	4207	486	27.1K	66	198		17	27	737	3515		
	4.4		16.2K	1644	6773	387	23.7K	63	94	16	8	19			18	胎土
瓦10	1.1	15.2K	10.2K	4161	3413	520	30.1K	88	235		17	38	509	4412	16	98.40%
	1.2	11.4K	12.6K	2274	4135	622	34.7K	72	297		30	38	1580	2286	15	
	1.3	3170	8968	1815	3277	6470	33.3K	85	134		28	42	161	918	26	
	1.4		20.4K	2591	6932	640	32.7K	72	116	12		22	3		24	胎土
瓦11	5.1	6262	8999	1802	3317	933	33.7K	102	158	25	26	37	302	2938	14	98.00%
	5.2	17.3K	9189	2195	4070	508	33.5K	72	178	18	28	35	82	4795		
	5.3	13.3K	13.6K	1908	5973	573	34.0K	69	139	16	15	35	396	1259	23	
	5.4		18.5K	1745	6660	713	31.0K	65	114	24	14	21			21	胎土
瓦12	6.1	11.2K	9886	2526	4181	2011	58.3K	94	170	41	29	44	940	4597		97.60%
	6.2	2247	9550	1333	4420	667	36.7K	87	105	12	18	31	800	951	25	
	6.3	1945	5229	1257	1991	1704	58.0K	102	99	46	36		352	1971	13	
	6.4		16.9K	1786	7117	602	39.1K	78	87	18	16	27	5	1	17	胎土
瓦13	2.1	2152	8664	2355	3606	776	25.8K	85	148	17	26	30	1106	2041	14	97.90%
	2.2	1488	10.4K	2047	4248	864	27.6K	80	123	15	21		674	568	19	
	2.3	1274	8998	1662	378	685	32.7K	82	111	20	23	32	778	728	28	
	2.4		15.9K	2467	5865	634	26.1K	59	92			23	13	1	21	胎土
瓦14	3.1	4367	18.9K	3536	6664	761	33.7K	69	144	14	8	19	319	666	33	－
	3.2	1956	14.7K	2409	5269	536	27.4K	66	118	12	10	27	172	338	29	
	3.3		16.5K	2497	6614	583	40.2K	63	122	17	13	24			32	胎土
瓦15	14.1	3649	10.3K	2161	3440	1246	10.9K	54	103	11	9	28	65	722	21	－
	14.2	4929	11.4K	2408	4042	1126	11.5K	39	102		9	20	89	714	17	
	14.3	11.6K	15.3K	4552	5226	1194	14.1K	43	122		5	18	35	2198	19	
	14.4		16.4K	1825	4933	214	11.9K	47	78			19			20	胎土

写真１－１　金箔瓦（瓦１）

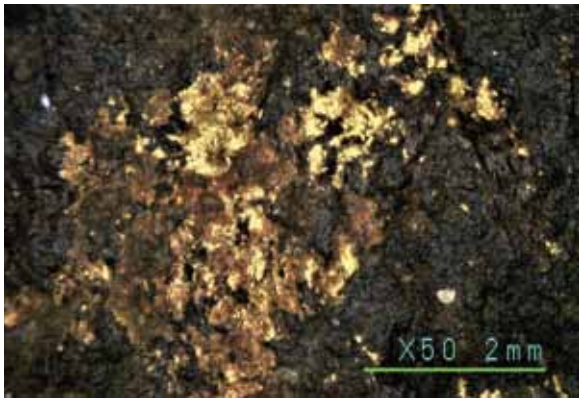


写真１－２　同　漆箔金箔の拡大観察

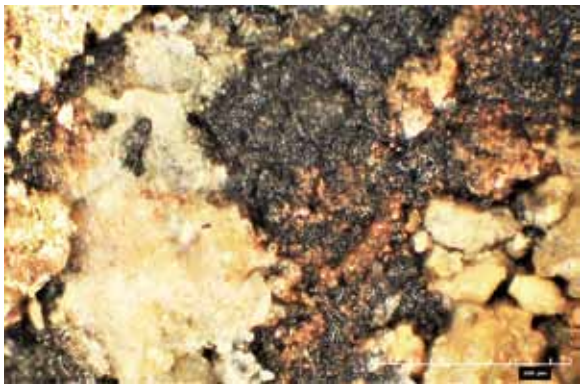


写真１－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

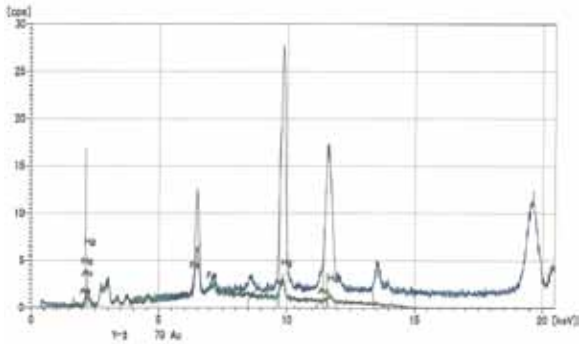


図１　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真２－１　金箔瓦（瓦２）

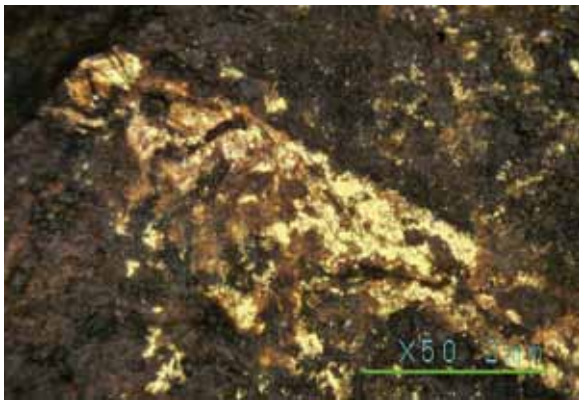


写真２－２　同　漆箔金箔の拡大観察

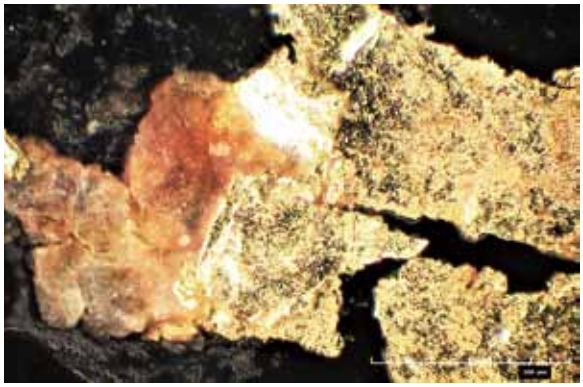


写真２－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

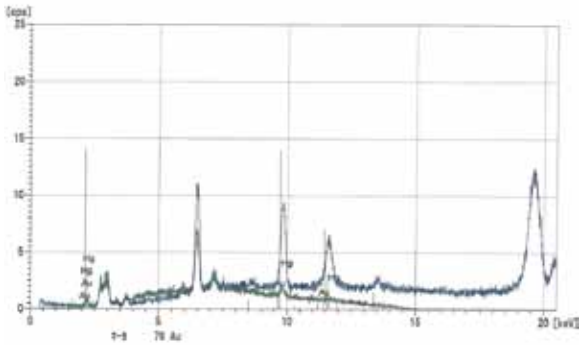


図２　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真３－１　金箔瓦（瓦３）

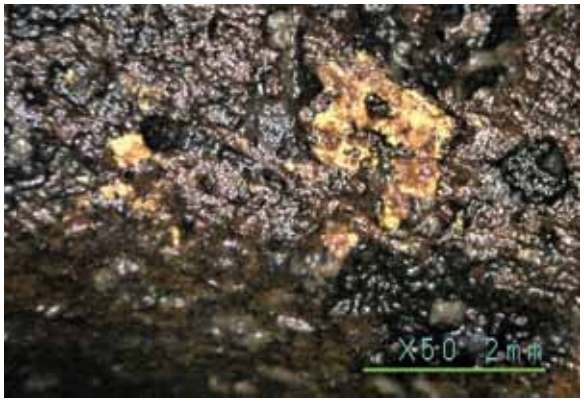


写真３－２　同　漆箔金箔の拡大観察

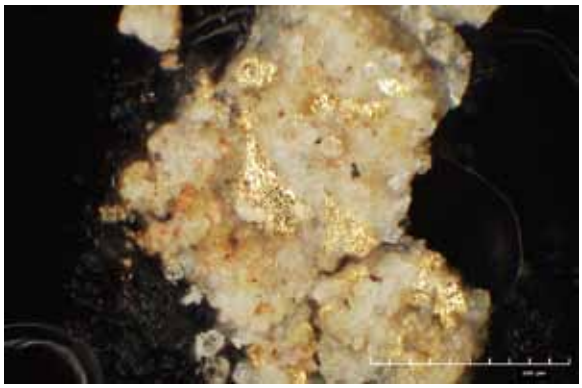


写真３－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

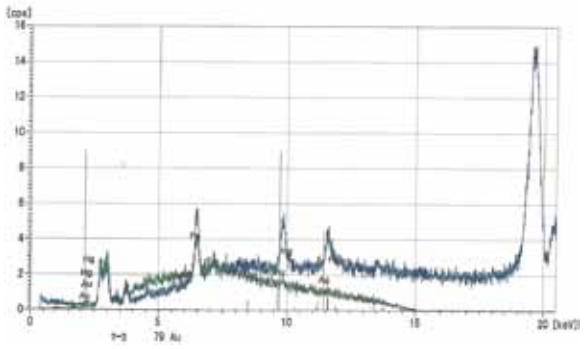


図３　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真４－１　金箔瓦（瓦４）

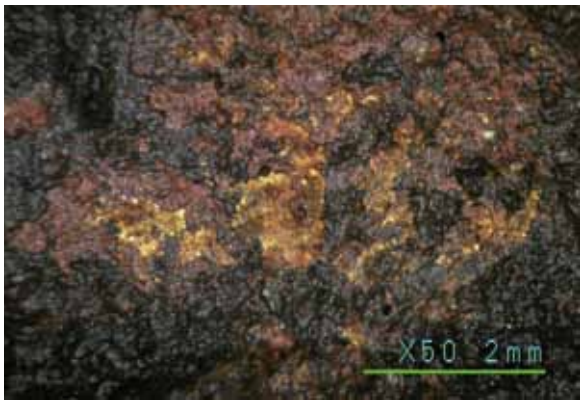


写真４－２　同　漆箔金箔の拡大観察

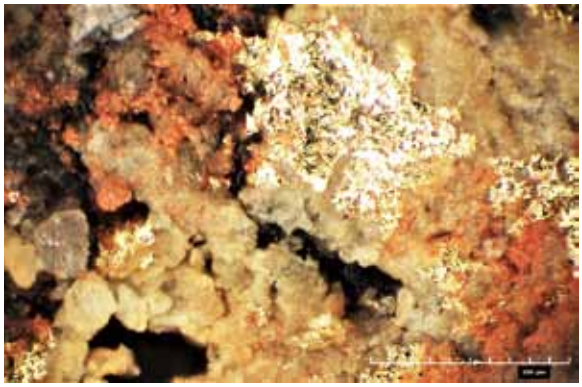


写真４－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

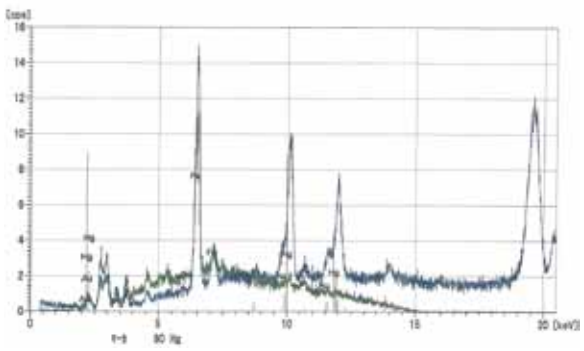


図４　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真５－１　金箔瓦（瓦５）

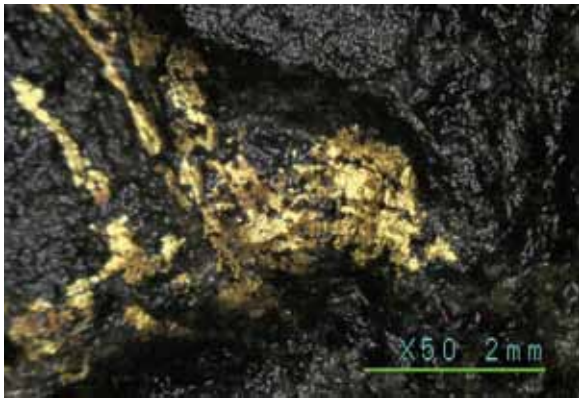


写真５－２　同　漆箔金箔の拡大観察

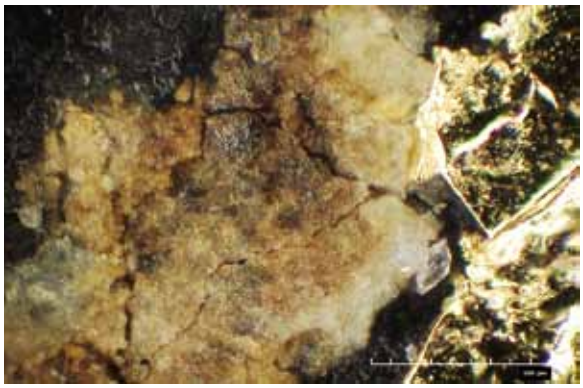


写真５－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

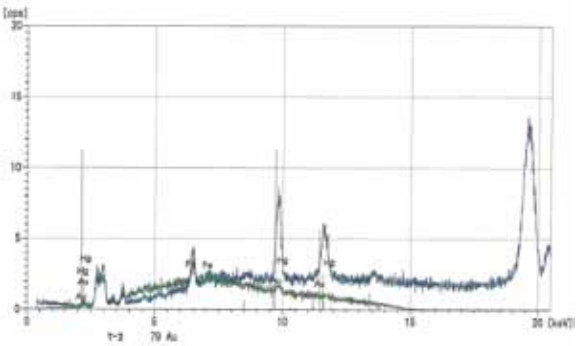


図５　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真６－１　金箔瓦（瓦６）

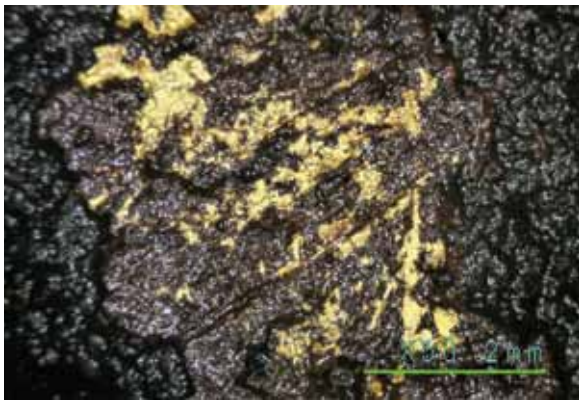


写真６－２　同　漆箔金箔の拡大観察

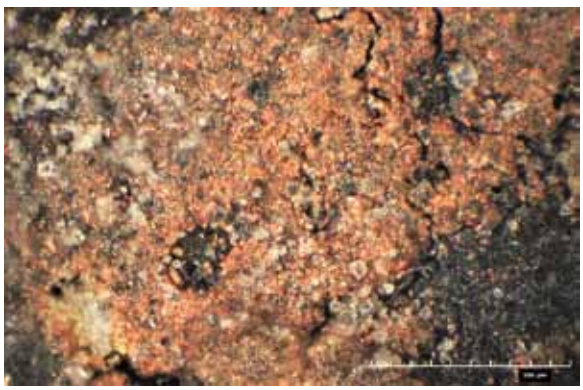


写真６－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

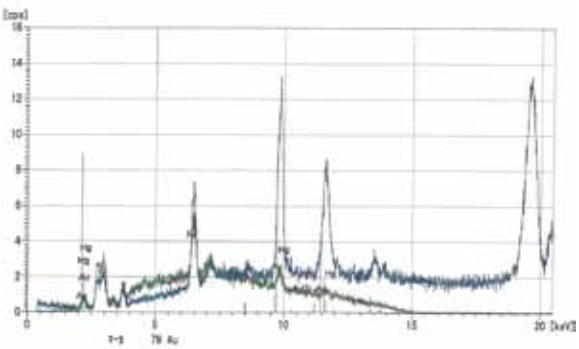


図６　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真７－１　金箔瓦（瓦８）

写真７－２　同　漆箔金箔の拡大観察

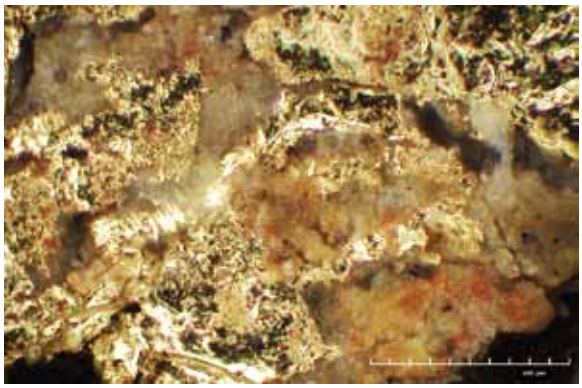


写真７－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

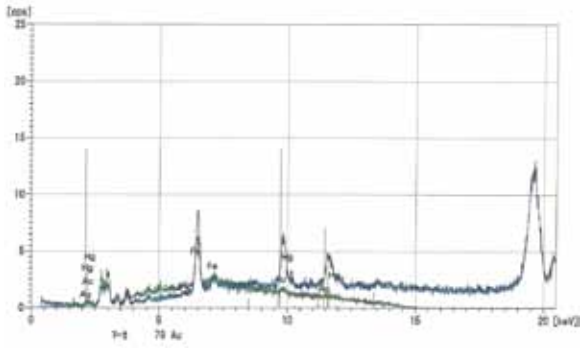


図７　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真８－１　金箔瓦（瓦９）

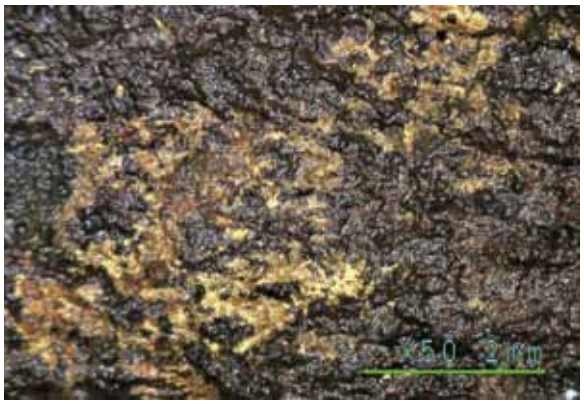


写真８－２　同　漆箔金箔の拡大観察

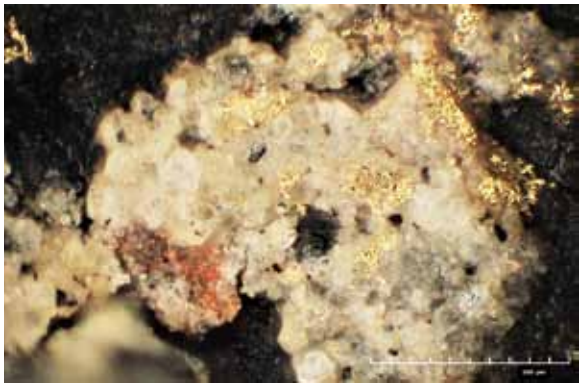


写真８－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

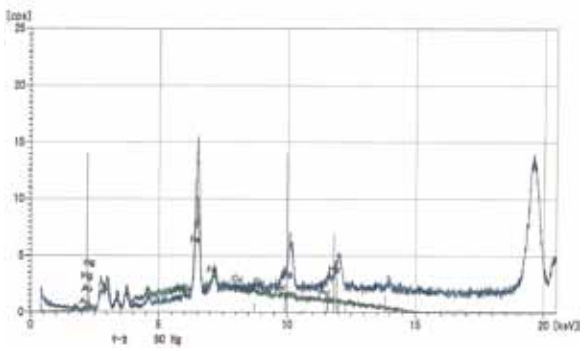


図８　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真９－１　金箔瓦（瓦10）

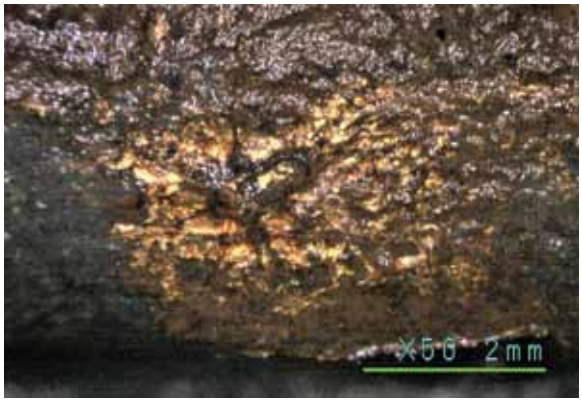


写真９－２　同　漆箔金箔の拡大観察

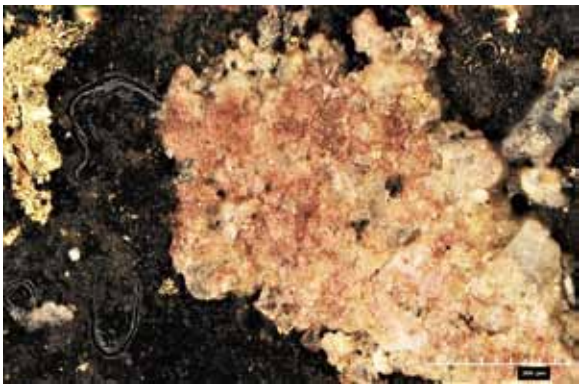


写真９－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

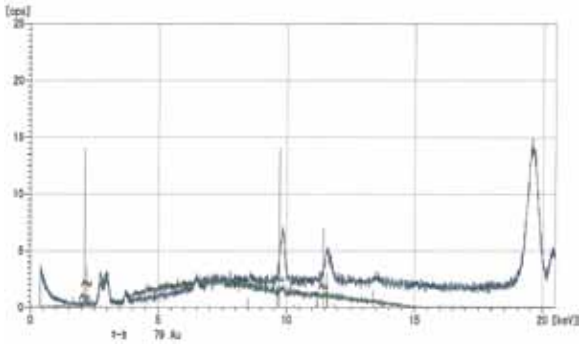


図９　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真10－１　金箔瓦（瓦11）

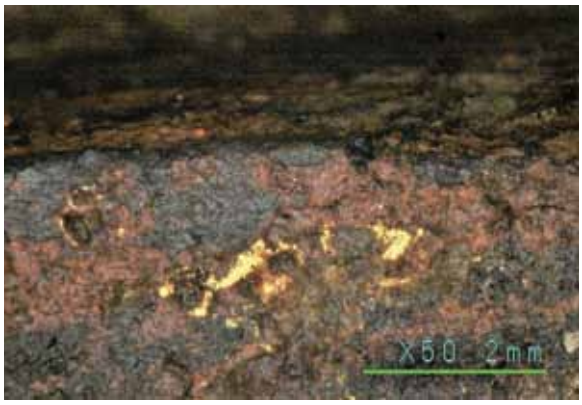


写真10－２　同　漆箔金箔の拡大観察

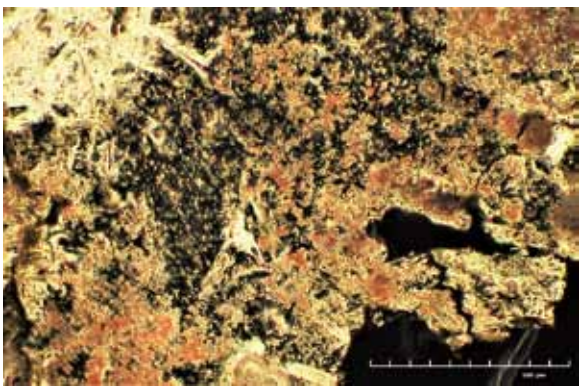


写真10－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

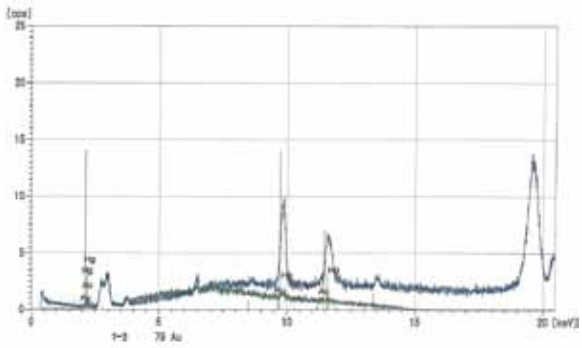


図10　同　蛍光Ｘ線分析結果

写真11－1　金箔瓦（瓦12）

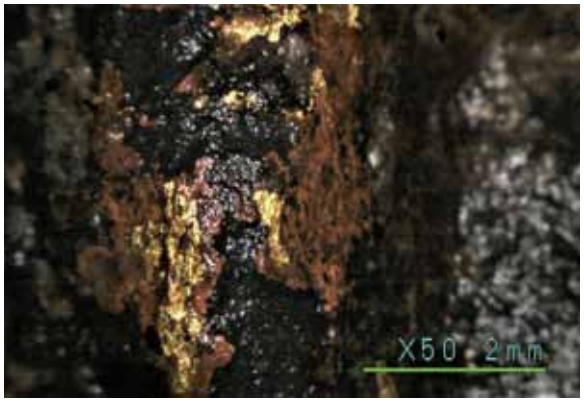


写真11－2　同　漆箔金箔の拡大観察

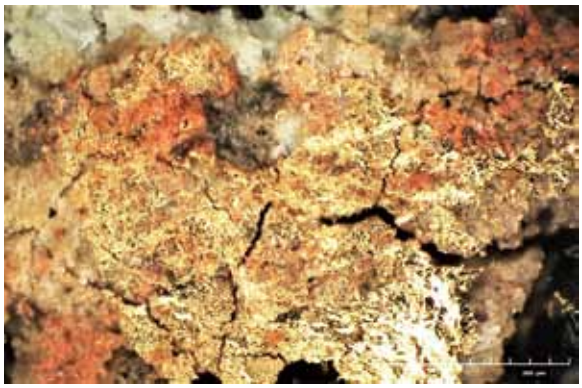


写真11－3　同　漆箔朱漆の拡大観察

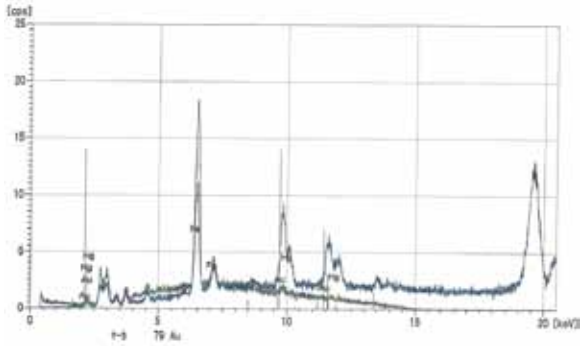


図11　同　蛍光X線分析結果

写真12－1　金箔瓦（瓦13）

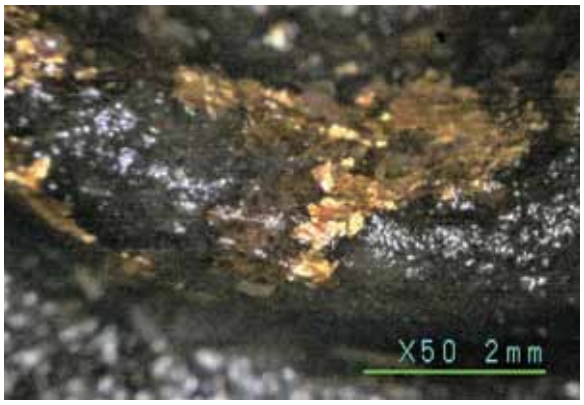


写真12－2　同　漆箔金箔の拡大観察

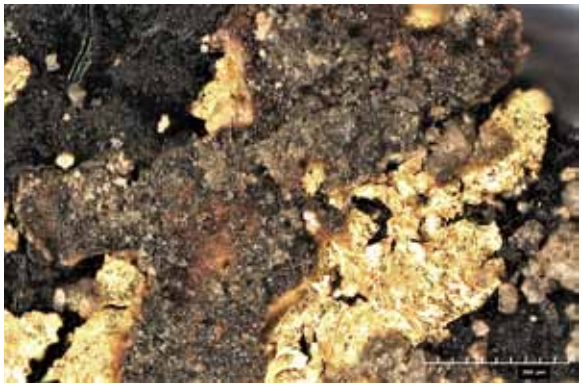


写真12－3　同　漆箔朱漆の拡大観察

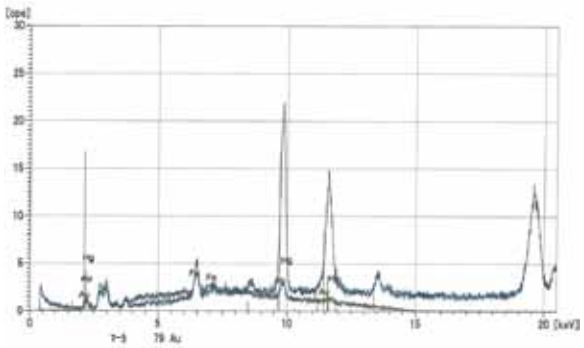


図12　同　蛍光X線分析結果

写真13－１　金箔瓦（瓦14）

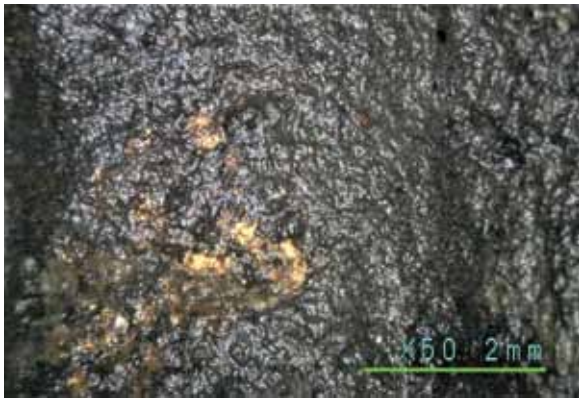
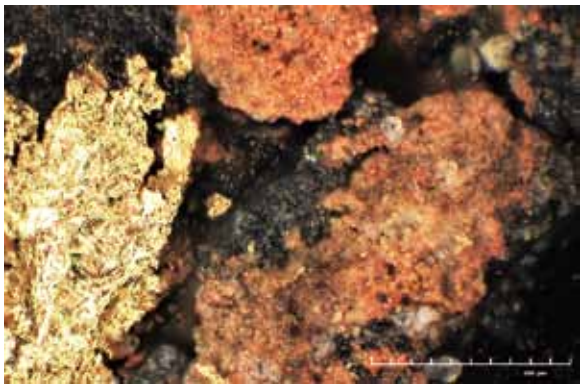


写真13－２　同　漆箔金箔の拡大観察



写13－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

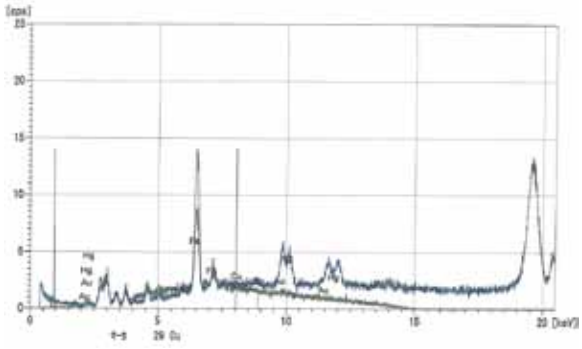


図13　同　蛍光X線分析結果

写真14－１　金箔瓦（瓦15）

写真14－２　同　漆箔金箔の拡大観察

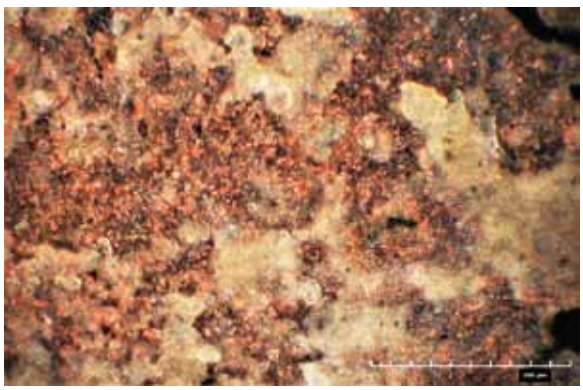


写真14－３　同　漆箔朱漆の拡大観察

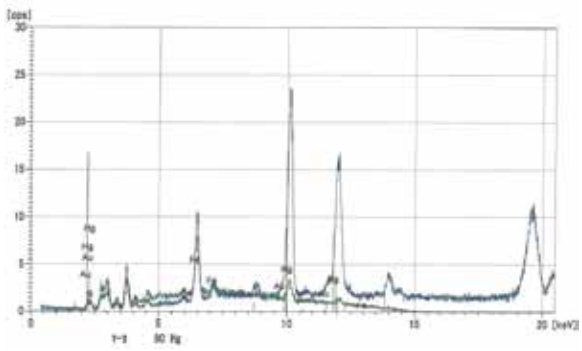


図14　同　蛍光X線分析結果

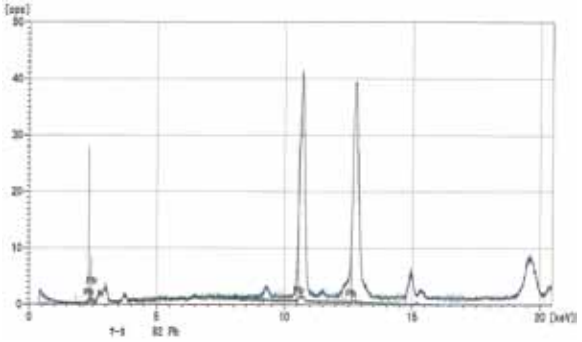
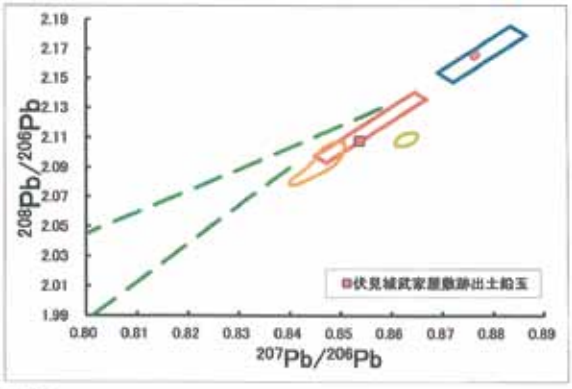
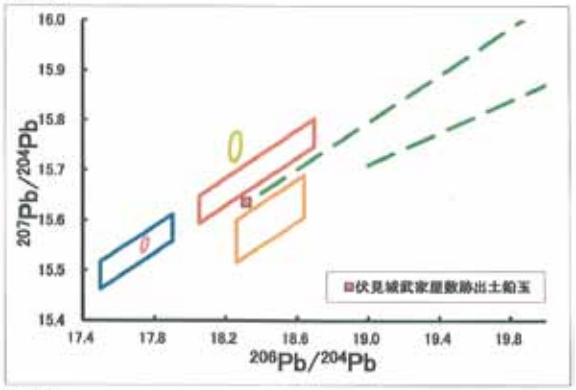


図15　鉄砲玉（金１）の蛍光X線分析結果



A式図



B式図

□：中国前漢鏡の領域
□：中国後漢・三国鏡の領域
□：日本産鉛の領域
—：朝鮮半島系遺物ライン
○：タイ領域

図16　鉄砲玉の鉛同位体比測定による産地同定結果

付表１　土器観察表

No.	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調　胎土	備考
1	施釉陶器	折縁皿	石垣基礎10	10.6	2.3		12.5	胎土:7.5YR7/6橙色　釉:淡緑色	瀬戸美濃 大窯4期
2	輸入青磁	椀	石垣基礎10		(3.3)	4.6	底部 100	胎土:N8/0灰白色　釉:淡青色	龍泉窯系
3	施釉陶器	天目椀	階段100	12.3	4.7		12	胎土:10YR8/1灰白色　釉:灰白～褐色	瀬戸美濃
4	土師器	皿S	溝28	9.6	2.0		100	内:7.5YR8/4浅黄橙色　外:10YR7/4にぶい黄橙色	
5	土師器	皿S	溝28	12.8	(1.9)		17	7.5YR8/4浅黄橙色	
6	土師器	羽釜	溝28	15.2	(4.0)		14	内:7.5YR8/4浅黄橙色　外:7.5YR8/3浅黄橙色	
7	施釉陶器	向付	溝28		(3.0)		14	胎土:2.5Y8/2灰白色　釉:透明～濃緑色	瀬戸美濃 青織部
8	土師器	皿Sb	石垣30	10.0	1.6		20	7.5YR8/3浅黄橙色	
9	土師器	皿S	石垣30	12.4	2.0		15	10YR8/2灰白色	
10	土師器	皿S	石垣30	13.0	(1.5)		15	10YR8/1灰白色	
11	土師器	小壷	石垣30	2.1	(1.9)		30	10YR8/1灰白色	
12	土師器	焙烙	石垣30	33.0	(6.0)		20	7.5YR8/4浅黄橙色	
13	施釉陶器	天目椀	石垣30	11.6	(4.0)		10	胎土:210YR8/1灰白色　釉:黒色	瀬戸美濃
14	輸入 施釉陶器	天目椀	石垣30		(3.0)	4.6	25	胎土:2.5Y8/1灰白色　釉:7.5YR4/4褐色	中国産
15	施釉陶器	天目椀	石垣30		(1.4)	4.0	底部 100	胎土:7.5YR8/4浅黄橙色　釉:黒色	瀬戸美濃
16	施釉陶器	丸皿	石垣30	12.1	3.0	6.6	15	胎土:10YR8/2灰白色　釉:淡黄色	瀬戸美濃 大窯3期後半か
17	施釉陶器	小杯	石垣30	6.9	(2.8)		20	胎土:10YR7/6明黄褐色	唐津
18	焼締陶器	擂鉢	石垣30		(7.3)		5	内:2.5Y5/1黄灰色　外:N6/0灰色	備前 8条1単位

※(　)は残存数値

付表２　瓦観察表

No.	種類	文様	出土遺構	胎土	色調	焼成	形態・手法の特長	備考
瓦1	金箔軒丸瓦	右三巴文	石垣基礎10	精緻(φ1㎜以下の長石・石英・雲母・黒色粒)	N3/0暗灰色	良	珠文14(復元)、巴文大きい。	
瓦2	金箔軒丸瓦	右三巴文	石垣基礎10	精緻(φ1㎜以下の長石・石英・雲母・黒色粒)	N3/0暗灰色	良	珠文24(復元)、巴文大きい。	
瓦3	金箔軒丸瓦	右巴文	石垣基礎10	精緻(φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒)	N4/0灰色	良	珠文12(復元)、巴文大きい。	
瓦4	金箔軒丸瓦	巴文	石垣基礎10	やや粗い(φ3㎜以下の長石・石英・黒色粒)	N4/0灰色	良	珠文14(復元)、巴文大きい。朱漆残る。	
瓦5	金箔軒丸瓦	菊文	階段100	精緻(φ1㎜以下の長石・石英・黒色粒)	N3.0暗灰色	良	四重、16弁。瓦当凹面に金箔。	
瓦6	金箔軒丸瓦		石垣基礎10	やや粗い(φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒)	N3.0暗灰色	良		
瓦7	金箔軒丸瓦		石垣基礎10	やや粗い(φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒)	N3.0暗灰色	良		
瓦8	金箔軒丸瓦		石垣基礎10	やや粗い(φ4㎜以下の長石・チャート)	N3.0暗灰色	良		
瓦9	金箔軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	粗い(φ2㎜以下の長石・石英・雲母・黒色粒・φ7㎜大礫)	N3.0暗灰色	良	周縁面取り。	
瓦10	金箔軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	やや粗い(φ4㎜以下の長石・石英・黒色粒)	N4/0灰色	良	周縁面取り。	
瓦11	金箔軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	やや粗い(φ3㎜以下の長石・石英・雲母・黒色粒)	N4/0灰色	良	周縁面取り。	
瓦12	金箔軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	やや粗い(φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒)	N3.0暗灰色	良	周縁面取り。	
瓦13	金箔軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	やや粗い(φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒)	N4/0灰色	良		
瓦14	金箔軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	粗い(φ5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母)	N4/0灰色	良		
瓦15	金箔飾瓦	桐文	階段100	粗い(φ4㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒・φ9㎜大礫)	N4/0灰色	良		
瓦16	金箔道具瓦		石垣30	粗い(φ7.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒)	N4/0灰色	良	全体に朱漆残る。	
瓦17	軒丸瓦	三巴文	石垣30	やや粗い(φ1～5㎜の長石・花崗岩粒多量)	N4/0灰色	良	珠文14(復元)、巴文小さい。	計1点。
瓦18	軒丸瓦	三巴文	石垣30	精緻(φ1㎜の長石粒多量)	N4/0灰色	良	珠文16(復元)、巴文大きい。	計1点。
瓦19	軒丸瓦	三巴文	石垣30	精緻(φ1㎜以下の石粒多量)	2.5Y6/1黄灰色	良	珠文12(復元)、巴文大きい。	計2点。
瓦20	軒丸瓦	三巴文	北西壁断割	粗い(φ1～3㎜の石粒多量)	7.5Y4/1灰色	良	珠文12(復元)、巴文大きい。	計1点。
瓦21	軒丸瓦	三巴文	北西壁断割	やや粗い(φ1～2㎜の石粒多量)	2.5Y5/1黄灰色	良	珠文10(復元)、巴文大きい。	計1点。
瓦22	軒丸瓦	違い鷹羽文	石垣30	粗い(φ1～2㎜の石英多量)	N3/1暗灰色	良		浅野家の家紋、計2点。
瓦23	軒丸瓦	違い鷹羽文	石垣30	やや粗い(φ1～2㎜の石粒多量)	N4/1灰色	良		鷹羽の元部分が不明瞭で笵傷の可能性も。
瓦24	軒丸瓦	梅鉢文	石垣30	精緻(φ1㎜以下の石粒多量)	7.5Y5/1灰色	良		前田家の家紋、計1点。
瓦25	軒平瓦	唐草文	溝28	精緻(φ1㎜以下の石粒多量)	10YR7/2にぶい黄橙色	良	顎貼付け。	計1点。
瓦26	軒平瓦	唐草文	溝28	粗い(φ1～5㎜の石粒多量)	10YR4/1褐灰色	良	上向き三葉。顎貼付け。	計2点。
瓦27	軒平瓦	唐草文	路面26	精緻(φ1㎜以下の砂粒多量)	10YR4/1褐灰色	良	顎貼付け。	計1点。
瓦28	軒平瓦	唐草文	溝28下層	やや粗い(φ1～2㎜の石粒多量)	10YR5/1褐灰色	良	下向き三葉。顎貼付け。周縁面取り。	石垣30に同文。計8点。
瓦29	軒平瓦	唐草文	北西壁断割	精緻(φ1㎜以下の石粒多量)	10YR6/1褐灰色	良	顎貼付け。周縁面取り。	計1点。
瓦30	軒平瓦	唐草文	石垣30	精緻(φ1㎜以下の石粒多量)	10YR3/1黒褐色	良	上向き三葉。顎貼付け。周縁面取り。	計1点。
瓦31	軒平瓦	唐草文	路面26	やや粗い(φ1～2㎜の石粒多量)	10YR3/1黒褐色	良	顎貼付け。	計1点。
瓦32	軒平瓦	唐草文	石垣基礎10	やや粗い(φ1～2㎜の石粒多量)	10YR5/1褐灰色	良	顎貼付け。	計1点。
瓦33	軒平瓦	唐草文	石垣30	精緻(φ1㎜以下の石粒多量)	10YR3/1黒褐色	良	顎貼付け。	計1点。

No.	種類	文様	出土遺構	胎土	色調	焼成	形態・手法の特長	備考
瓦34	軒平瓦	唐草文	溝28	やや粗い(φ1～2㎜の石粒多量)	10YR4/1 褐灰色	良	顎貼付け。	計1点。
瓦35	軒平瓦	唐草文	撹乱溝	やや粗い(φ1㎜の石粒多量)	10YR4/1 褐灰色	良	唐草を肉彫りで表現する。 顎貼り付け。周縁面取り。	計1点。
瓦36	滴水瓦	唐草文	溝28	やや粗い(φ1～3㎜の石粒多量)	10YR5/1 褐灰色	良	周縁面取り。 平瓦接合の角度は120度。	計1点。
瓦37	丸瓦		石垣基礎10	やや粗い(φ2㎜以下の長石・石英・チャート)	N4/0灰色	良	コビキA、吊り紐痕二重に残る。	
瓦38	丸瓦		石垣基礎10	粗い(φ6㎜以下の長石・チャート・黒色粒)	N4/0灰色	良	コビキA。吊り紐痕。	
瓦39	丸瓦		石垣基礎10	やや粗い(φ3㎜以下の長石・チャート・黒色粒)	N4/0灰色	良	コビキA。吊り紐痕。	
瓦40	丸瓦		溝28 下層	やや粗い(φ3㎜以下の長石・チャート・赤色粒)	N4/0灰色	良	コビキB。	
瓦41	平瓦		石垣基礎10	粗い(φ10㎜以下の長石・チャート・赤色粒)	N3/0暗灰色	やや軟質		
瓦42	平瓦		溝28 下層	やや粗い(φ4.5㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒)	N4/0灰色	良		
瓦43	道具瓦		石列34	やや粗い(φ4㎜以下の長石・チャート)	N4/0灰色	良	接合部カキヤブリ痕	
瓦44	道具瓦		溝28	やや粗い(φ4㎜以下の長石・石英・チャート)	N4/0灰色	良		
瓦45	鬼瓦		石垣基礎10	粗い(φ4㎜以下の長石・石英・チャート・φ8㎜の礫)	N4/0灰色	良	表面ケズリ調整	
瓦46	鬼瓦		路面26	やや粗い(φ4㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒)	N5/0灰色	良		
瓦47	道具瓦		階段100	粗い(φ4㎜以下の長石・チャート・雲母・φ7㎜の礫)	N5/0灰色	良	凹面布目	輪違瓦
瓦48	道具瓦		北西壁断割	やや粗い(φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母)	N5/0灰色	良		
瓦49	道具瓦		石垣30	やや粗い(φ4㎜以下の長石・チャート・雲母)	N4/0灰色	やや軟質		
瓦50	道具瓦		石垣30	やや粗い(φ2㎜以下の長石・チャート・赤色粒)	N3/0暗灰色	やや軟質		右切隅瓦
瓦51	道具瓦		石垣30	粗い(φ12㎜以下の長石・チャート・黒色粒)	N3/0暗灰色	良		
瓦52	道具瓦		溝28 下層	粗い(φ2㎜以下の長石・石英・雲母・φ6㎜の礫)	N5/0灰色	良		熨斗瓦

付表３　土製品観察表

No.	種類	出土遺構	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	色調	胎土	備考
土1	鞴羽口	土坑13	(8.5)	(7.5)	6.8	2.5Y7/4浅黄色	密(φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒)	
土2	鞴羽口	土坑13	(15.8)	(9.0)	(7.2)	10YR6/3にぶい黄橙色	密(φ5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒)	

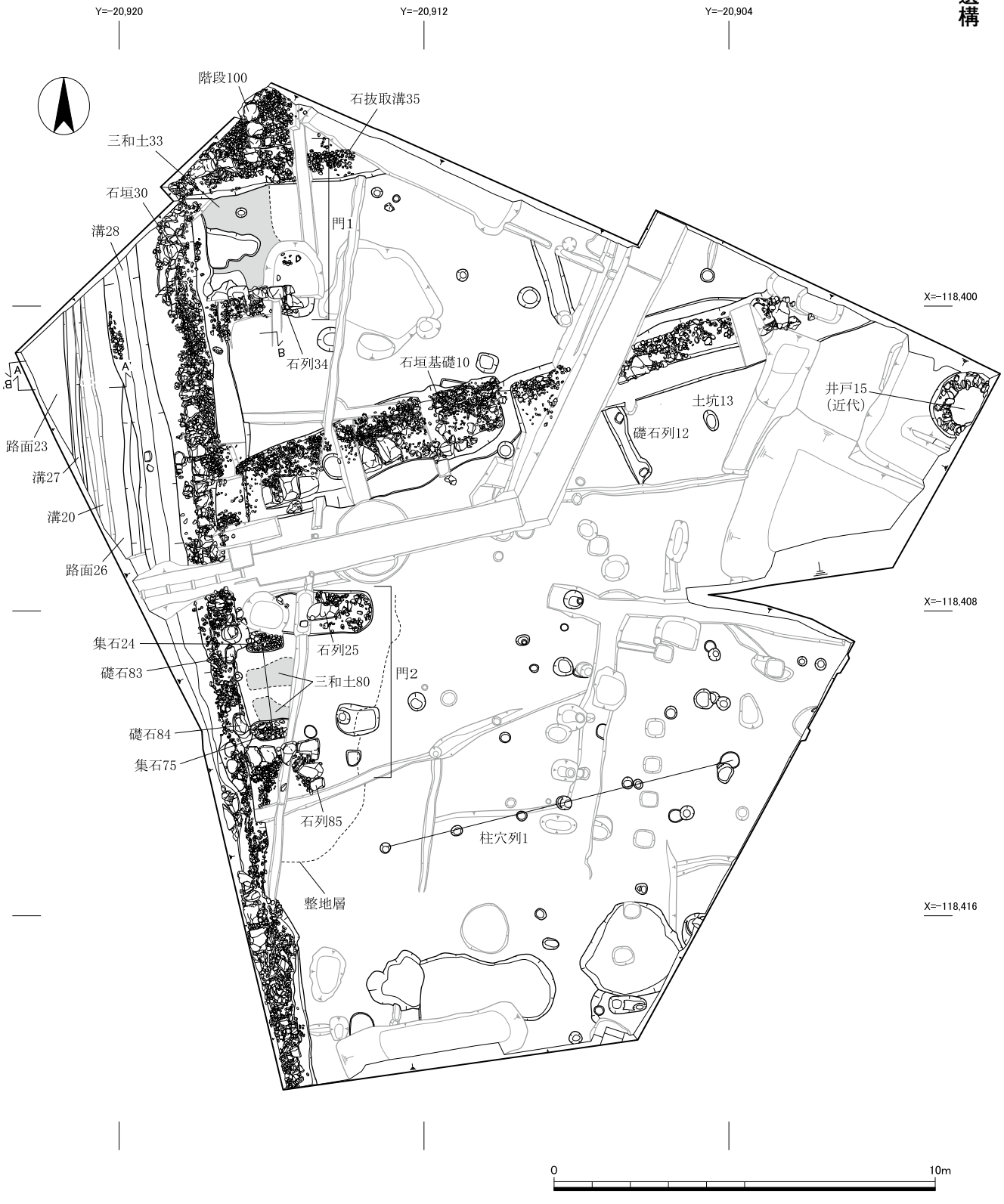
※(　)は残存数値

付表４　金属製品観察表

No.	種類	出土遺構	寸法(cm)	重さ(g)	備考
金1	鉛玉	石垣30	径1.3	7.7	原材料は外国産
金2	刀子	溝28	長さ(12.3)　幅2.3　厚さ1.4		
金3	鉄製品	溝28	長さ6.1　幅3.3　厚さ2.6		

※(　)は残存数値

図　　版



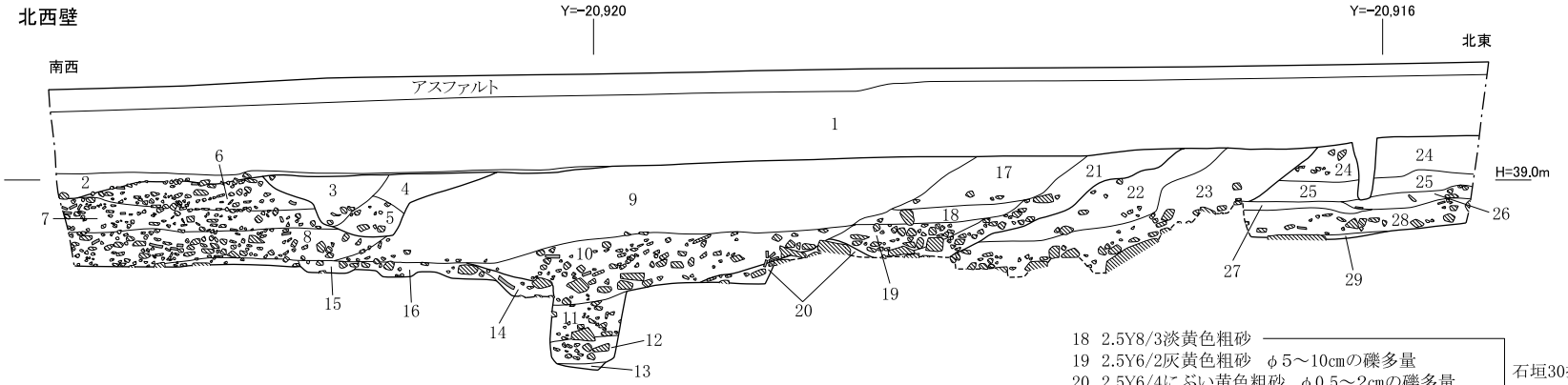
※ A−A'は図10、B−B'は図12に対応

調査区平面図（1：150）

図版2　遺構

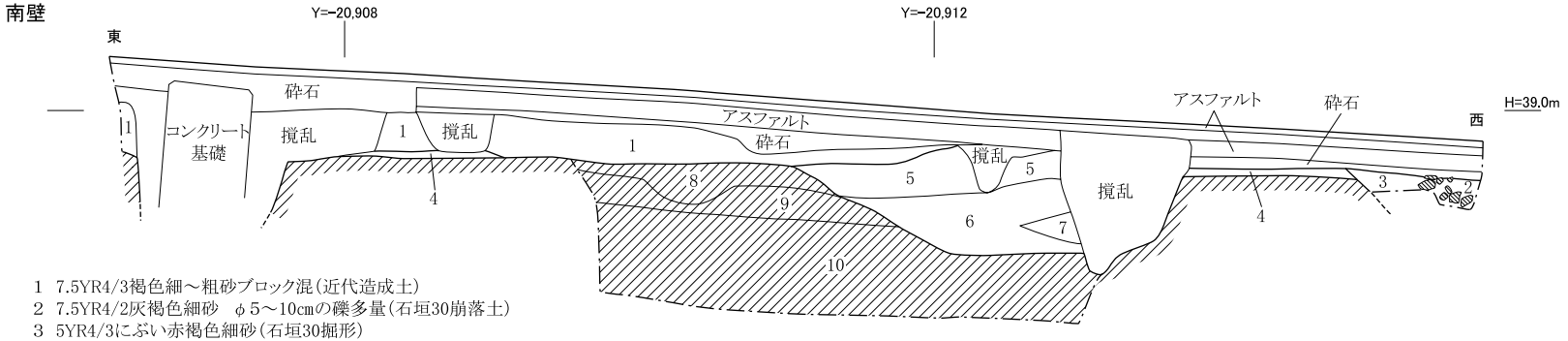
調査区北西壁・南壁断面図（1：50）

北西壁



1　近現代盛土
2　10YR7/2にぶい黄橙色粗砂　φ1～5cmの礫・瓦多量 固くしまる（溝20埋没後整地層）
3　10YR8/2灰白色細砂　φ1～5cmの礫・瓦・土器片少量
4　10YR7/2にぶい黄橙色細砂
5　10YR7/3にぶい黄橙色細～中砂ブロック混 φ1～5cmの礫・瓦中量　（3～5：溝20）
6　2.5Y7/3浅黄色粗砂　φ1～5cmの礫・瓦多量 固くしまる
7　10YR8/2灰白色粗砂　φ1～5cmの礫・瓦多量 固くしまる
8　7.5YR8/2灰白色粗砂　φ1～5cmの礫・瓦多量 固くしまる　（6～8：路面23）
9　7.5YR6/3にぶい褐色粗砂　φ2～5cm礫・瓦中量（伏見城廃城後整地層）
10　7.5YR5/4にぶい褐色粗砂　φ5～20cmの礫・瓦多量（石垣30崩落土）
11　7.5YR3/3暗褐色中～粗砂　φ2～10cmの礫・瓦多量
12　10YR3/4暗褐色細～粗砂　φ2～5cmの礫多量　（11・12：溝28）
13　7.5YR4/4褐色粘質シルト
14　2.5Y8/1灰白色中～粗砂　φ5～10cmの礫多量（溝28護岸構築土）
15　7.5YR4/3褐色細砂　瓦少量（溝27）
16　5YR4/3にぶい赤褐色粗砂　φ5～10cmの礫多量 固くしまる（路面26）
17　7.5YR5/3にぶい褐色粗砂　φ0.5～2cmの礫少量（石垣30抜取後整地層）
18　2.5Y8/3淡黄色粗砂
19　2.5Y6/2灰黄色粗砂　φ5～10cmの礫多量
20　2.5Y6/4にぶい黄色粗砂　φ0.5～2cmの礫多量　（18～20：石垣30掘形）
21　10YR6/2灰黄褐色粗砂　φ2～5cmの礫多量
22　10YR5/2灰黄褐色粗砂　φ2～5cmの礫多量
23　10YR7/3にぶい黄橙色粗砂　φ1～5cmの礫中量　（22・23：石抜取溝35埋土）
24　2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂　φ1～5cmの礫中量
25　10YR3/2黒褐色粗砂　φ1～3cmの礫少量　（24・25：階段100埋没後整地層）
26　10YR3/3暗褐色粗砂　φ1～5cmの礫多量
27　2.5Y8/2灰白色細砂　固くしまる
28　7.5YR2/2黒褐色粗砂 φ5～10cmの礫・瓦多量 固くしまる　（26～28：階段100埋土）
29　2.5Y3/2黒褐色細砂（階段100化粧土）

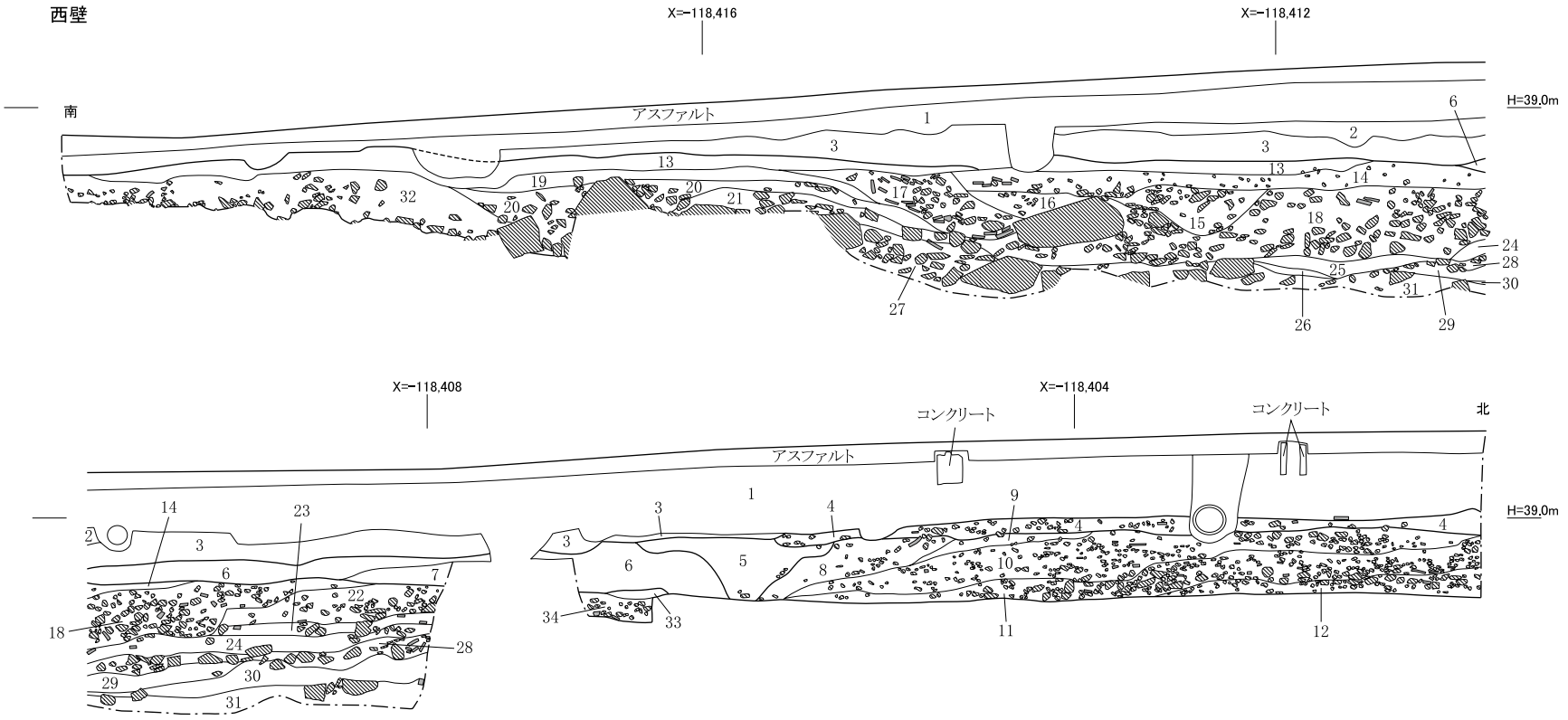
南壁



1　7.5YR4/3褐色細～粗砂ブロック混（近代造成土）
2　7.5YR4/2灰褐色細砂　φ5～10cmの礫多量（石垣30崩落土）
3　5YR4/3にぶい赤褐色細砂（石垣30掘形）
4　5YR明褐色細～中砂
5　10YR4/3にぶい黄褐色中砂
6　7.5YR4/6褐色粗砂　φ1～5cmの礫少量
7　2.5Y6/4にぶい黄色細砂　（4～7：木幡山伏見城期整地層）
8　10YR5/3にぶい黄褐色粗砂　固くしまる
9　7.5GY8/1明緑灰色細～粗砂　φ1～5cmの礫少量
10　2.5GY8/1灰白色粗砂　φ1～5cmの礫多量 固くしまる　（8～10：基盤層）

0　2m

調査区西壁断面図（1：50）



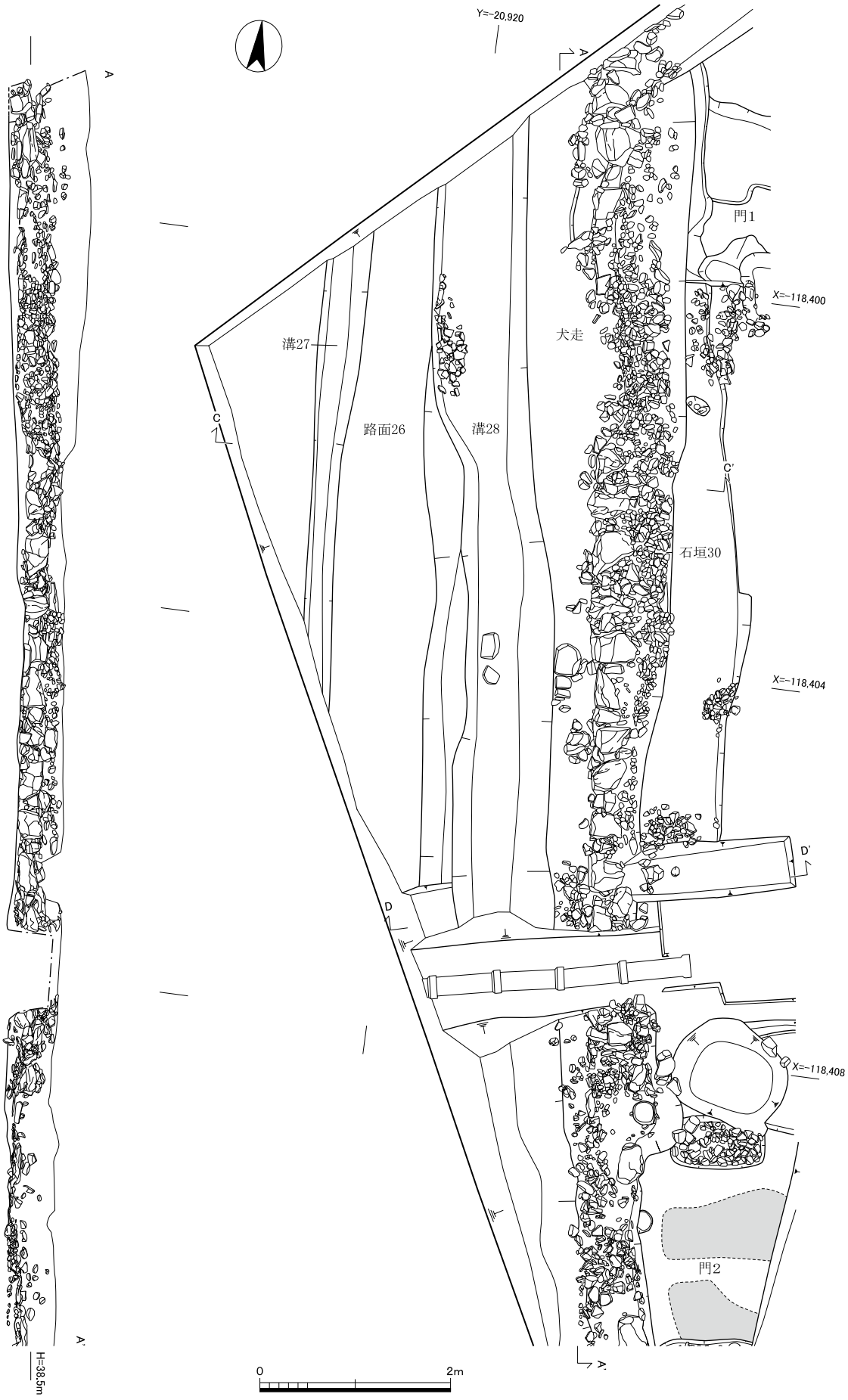
1 近代盛土
2 5YR4/2灰褐色細砂 φ1～5cmの礫中量
3 10YR4/3にぶい黄褐色中砂 φ1～5cmの礫中量
（2・3：近代盛土）
4 2.5Y7/3浅黄色粗砂 φ5～8cmの礫多量 固くしまる（溝20埋没後整地層）
5 7.5YR4/3褐色細砂（溝20）
6 7.5YR3/4暗褐色中～粗砂 φ0.5～3cmの礫中
7 7.5YR4/3褐色中砂 φ0.5～3cmの礫中
（6・7：伏見城廃城後整地層）
8 10YR4/2灰黄褐色粗砂 φ2～5cmの礫中量 固くしまる
9 2.5Y6/2灰黄色中砂 φ2～5cmの礫少量 固くしまる
10 2.5Y3/2黒褐色中～粗砂 φ1～5cmの礫・瓦多量 固くしまる
11 5YR6/3にぶい褐色粗砂 φ1～5cmの礫・瓦多量 固くしまる
12 5YR4/2灰褐色粗砂 φ2～10cmの礫・瓦多量 固くしまる
（8～12：路面23）

13 10YR4/4褐色細～中砂 φ1～5cmの礫少量
14 7.5YR4/3褐色中～粗砂 φ2～5cmの礫・瓦多量
15 10YR5/4にぶい黄褐色中砂 φ2～5cmの礫・瓦多量
16 10YR5/3にぶい黄褐色中砂 φ2～5cmの礫・瓦多量
17 10YR5/2灰黄褐色細～中砂 φ2～10cmの礫・瓦多量
18 10YR4/2灰黄褐色中砂 φ5～15cmの礫・瓦多量
19 7.5YR3/4細～中砂 φ2～10cmの礫・瓦多量
20 2.5Y4/4オリーブ褐色中砂 φ1～10cmの礫・瓦中量
21 2.5Y4/3オリーブ褐色中砂 φ3～10cmの礫・瓦中量
22 10YR5/6黄褐色粗砂 φ2～5cmの礫・瓦多量 固くしまる
23 2.5Y8/3淡黄色中砂 φ2～5cmの礫・瓦中量 固くしまる
24 10YR4/6褐色中～粗砂 φ2～10cmの礫・瓦中量 固くしまる
（13～24：溝28）

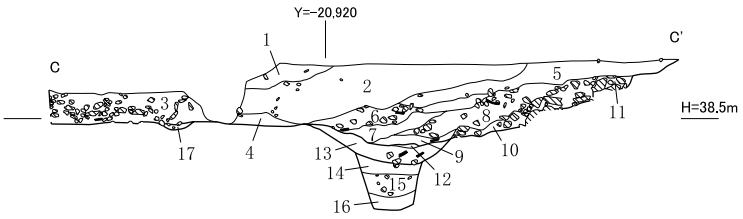
25 10YR4/2灰黄褐色細砂 φ0.5～2cmの礫多量
26 2.5Y8/3淡黄色細砂 φ0.5～2cmの礫多量
27 2.5Y4/1黄灰色泥砂 φ5～20cmの礫多量 固くしまる
28 10YR4/3にぶい黄褐色細～中砂 φ10～15cmの礫・瓦多量
29 5YR3/2暗赤褐色中～粗砂 φ0.5～3cmの礫多量
30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂 φ0.5～2cmの礫少量 固くしまる
31 10YR4/3灰黄褐色細砂 φ2～5cmの礫多量
32 5YR4/3にぶい赤褐色細～中砂 φ2～10cmの礫多量
（25～32：溝28）
33 10YR6/8明黄褐色細砂（路面26化粧土）
34 10YR5/2灰黄褐色粗砂 φ2～5cmの礫・瓦多量 固くしまる（路面26）

0 2m

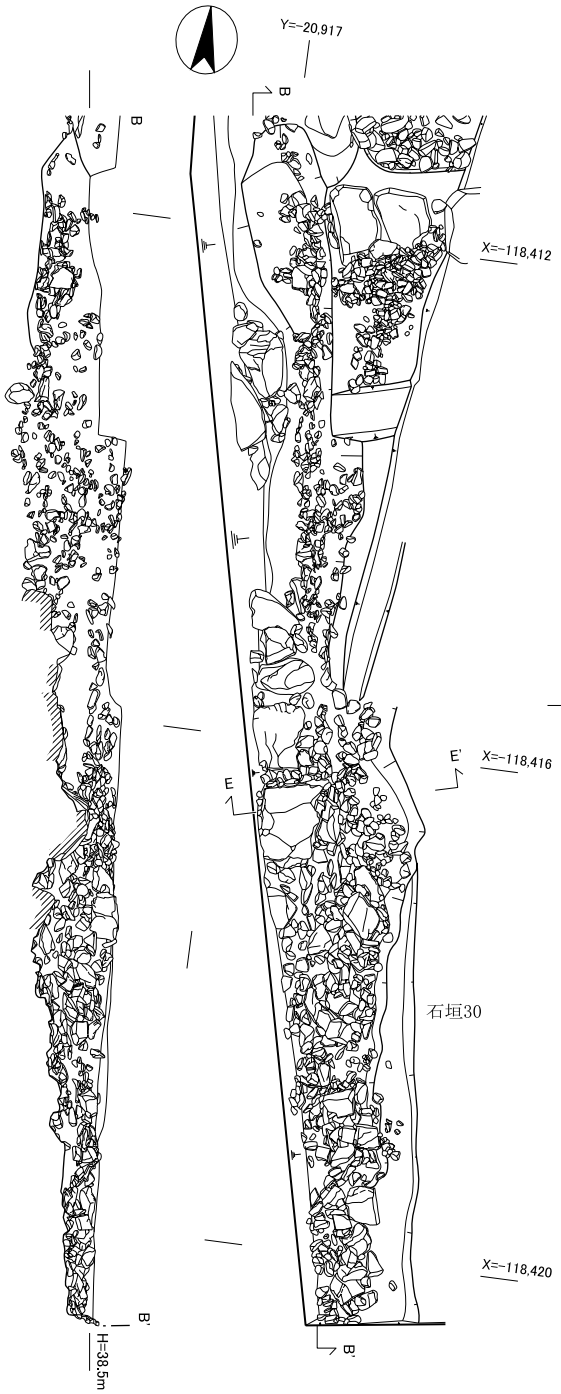
図版3 遺構

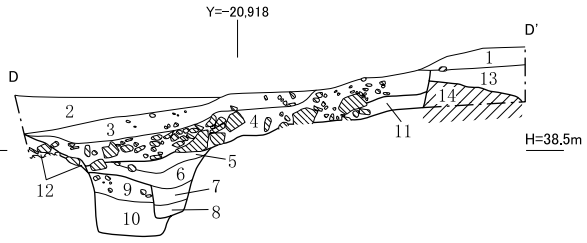


石垣30実測図1（1：60）

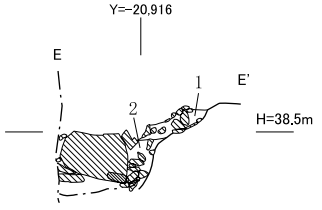


1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂　φ1～3cmの礫・炭少量
2　10YR4/3にぶい黄褐色中砂　φ1～3cmの礫少量　　伏見城廃城後整地層
3　2.5Y4/2黄灰色中砂
4　10YR3/3暗褐色中～粗砂　φ5～10cmの礫・瓦多量、炭少量
　固くしまる(路面23構築土)
5　7.5YR4/2灰褐色細～中砂　φ1～3cmの礫少量
6　10YR4/3にぶい黄褐色中～細砂
　φ1～5cmの礫・瓦多量・炭少量
7　2.5Y4/2黄灰色細砂
8　10YR5/3にぶい黄褐色中～細砂　φ5～15cmの礫・瓦中量　　石垣30崩落土
9　10YR5/2灰黄褐色細砂　φ10～15cmの礫多量
10　2.5Y7/2灰黄色粘質細砂　φ1～3cmの礫・瓦少量
11　2.5Y5/2暗灰黄色中～細砂　φ1～5cmの礫多量
12　7.5Y6/2灰褐色細砂
13　1410YR3/2黒褐色細砂　φ5～10cmの礫・瓦多量
14　10YR6/6明黄褐色粗砂混細砂　やや粘質
　φ1～5cmの礫多量　固くしまる　　溝28
15　10YR4/1褐灰色細～粗砂　φ5～10cmの礫多量
16　10YR4/2灰黄褐色細～粗砂　φ1～3cmの礫中量
17　7.5YR4/3褐色粘質細砂　φ1～5cmの礫少量(溝27)



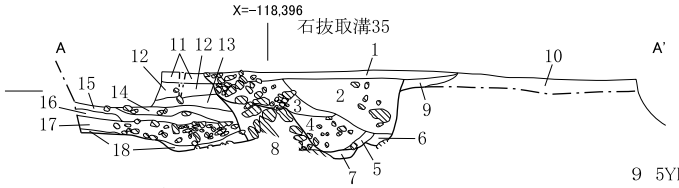


1　7.5YR6/2にぶい褐色中砂　固くしまる(近代盛土)
2　7.5YR4/2灰褐色中砂ブロック混　　伏見城廃城後整地層
3　7.5YR4/3褐色中砂　φ1～5cmの礫少量
4　10YR4/2灰黄褐色中砂　φ1～10cmの礫・瓦多量(石垣30崩落土)
5　2.5Y5/3黄褐色細砂　流水堆積
6　7.5YR6/6橙色細砂　流水堆積
7　5Y5/2灰オリーブ色粘質細砂　流水堆積
8　5Y7/2灰白色細砂　流水堆積　　溝28
9　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質細砂　φ1～5cmの礫少量
10　5Y5/2灰オリーブ色粘質粗～細砂　流水堆積
　φ1～5cmの礫少量
11　7.5YR5/6明褐色細砂　φ5～10cmの礫中量(石垣30掘形)
12　10YR4/3にぶい黄褐色中砂　φ5～10cmの礫・瓦多量(路面26)
13　7.5YR8/2灰白色中砂　固くしまる(木幡山伏見城期整地層)
14　10YR4/2灰黄褐色中砂(基盤層)



1　7.5YR3/2黒褐色中～粗砂　φ5～10cmの礫多量
2　5YR4/3にぶい赤褐色細～中砂　φ2～10cmの礫多量　　石垣30掘形

石垣30実測図２（１：60）

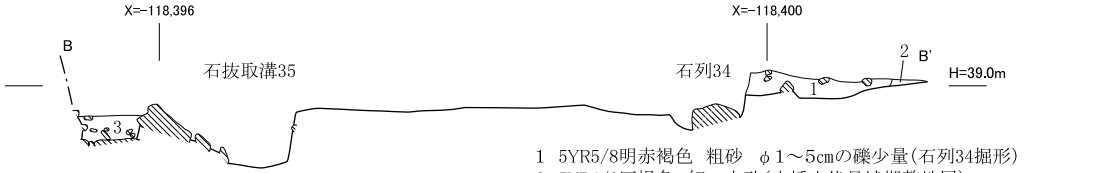


1 7.5YR5/2灰褐色粗砂 φ1～3cmの礫中量
固くしまる(石抜取溝35埋没後整地層)
2 5YR5/2灰褐色粗砂 φ1～5cmの礫少量
3 7.5YR5/4にぶい褐色粗砂 φ1～3cmの礫多量
4 7.5YR2/2黒褐色粗砂 φ1～3cmの礫多量
5 10YR4/3にぶい褐色粗砂 φ0.5～2cmの礫少量
6 10YR5/1褐灰色粗砂
7 7.5YR5/8明褐色細砂 固くしまる(根石据付土)
8 10YR7/2にぶい黄橙色粗砂 φ5～15cmの礫多量(石抜取溝35栗石)

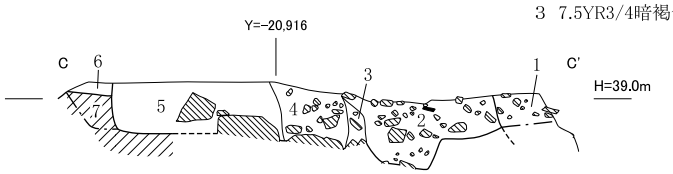
石抜取溝35埋土

9 5YR6/8橙色粗砂 固くしまる
10 5YR5/8明赤褐色粗砂
木幡山伏見城期整地層
11 7.5YR5/4にぶい褐色中砂
12 10YR6/1褐灰色粗砂 固くしまる
13 5YR4/6赤褐色中砂
14 7.5YR6/6橙色粗砂
15 7.5YR5/6明褐色粗砂
16 5Y7/1灰白色粘質細砂
17 7.5YR4/4褐色粗砂 φ1～3cmの礫多量
18 7.5YR4/3褐色粗砂 φ1～3cmの礫多量(階段100化粧土)

階段100埋土



1 5YR5/8明赤褐色 粗砂 φ1～5cmの礫少量(石列34掘形)
2 5YR4/2灰褐色 細～中砂(木幡山伏見城期整地層)
3 7.5YR3/4暗褐色 粗砂 φ1～5cmの礫多量 固くしまる(階段100埋土)



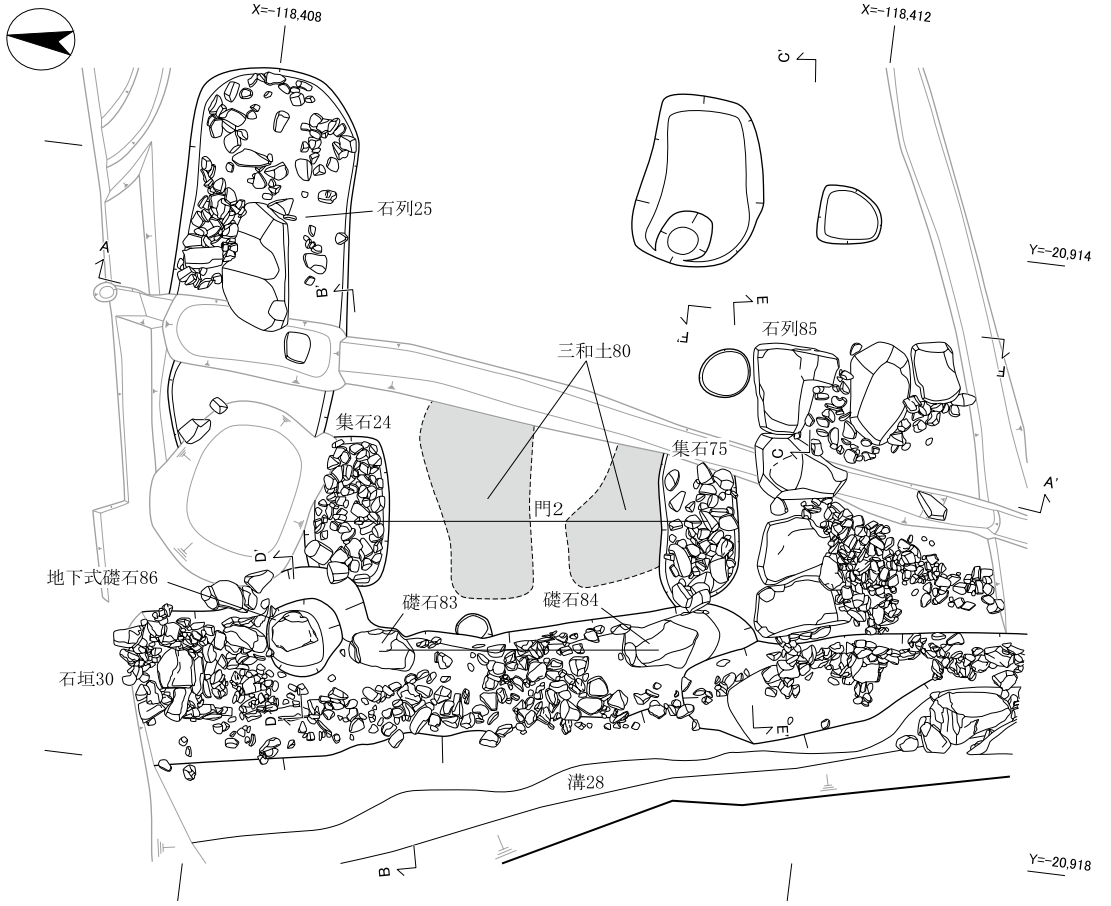
1 7.5YR6/3にぶい褐色粗砂 φ1～5cmの礫中量(石垣30掘形)
2 10YR6/3にぶい黄橙色粗砂 φ3～10cmの礫・瓦多量
3 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 φ1～5cmの礫少量
4 10YR6/2灰黄褐色粗砂 φ3～5cmの礫中量
5 10YR4/6褐色粗砂 φ3～5cmの礫中量

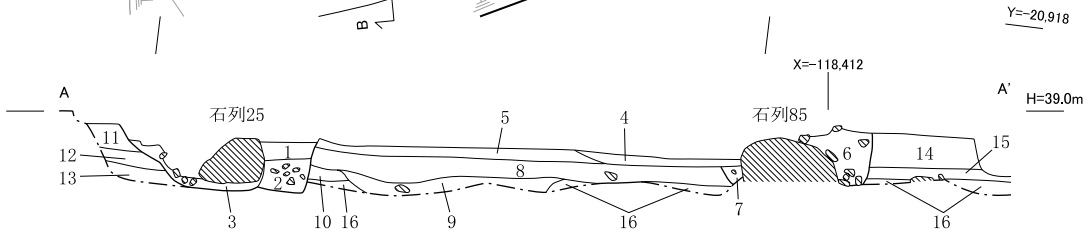
石列34抜取埋土

6 2.5Y7/1灰白色粗砂 固くしまる(木幡山伏見城期整地層)
7 7.5YR5/6明褐色細砂 φ1～3cmの礫少量(基盤層)

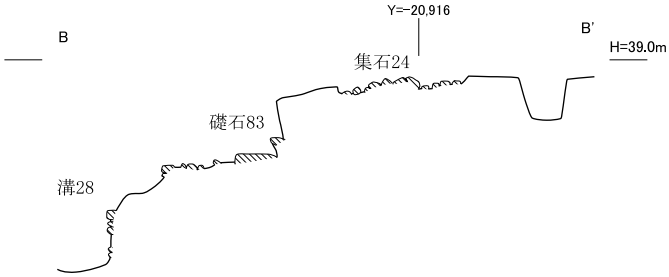
0 2m

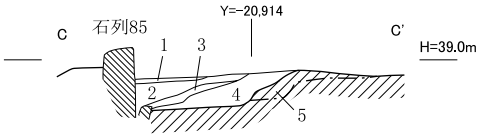
門1実測図（1：50）



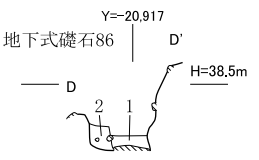


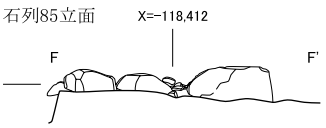
1　7.5YR4/2灰褐色粗砂　φ1～2cmの礫多量 ┐
2　7.5YR4/6褐色粗砂　φ3～5cmの礫中量 ┘ 石列25前面構築土
3　10YR3/3暗褐色粗砂　φ5～10cmの礫多量(石列25掘形)
4　7.5YR5/6明褐色粗砂　φ3～5cmの礫中量 ┐
5　7.5YR4/4褐色粗砂 ┘ 門路面構築土
6　7.5YR3/3暗褐色砂泥　φ3～5cmの礫多量(石列85掘形)
7　10YR4/2灰黄褐色中砂　φ3～5cmの礫少量(石列85前面構築土)
8　5YR4/4にぶい赤褐色粗砂　φ1～2cmの礫少量 ┐
9　7.5YR4/3褐色細砂　粗砂混 ┘ 木幡山伏見城期整地層
10　5YR4/4にぶい赤褐色粗砂
11　7.5YR6/4にぶい橙色粗砂
12　7.5YR5/4にぶい褐色粗砂
13　5YR5/8明赤褐色粗砂　φ0.2～0.5cmの礫中量
14　7.5YR6/6橙色細砂　φ1～3cmの礫少量
15　7.5YR3/3暗褐色粗砂　φ0.5～3cmの礫多量
16　7.5YR6/8橙色粗砂　φ3～5cmの礫中量 ┘ 木幡山伏見城期整地層

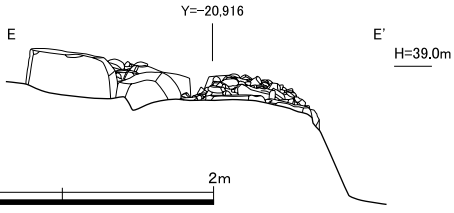




1　7.5YR8/3浅黄橙色中砂　φ0.5～1cmの礫少量　固くしまる ┐
2　7.5YR4/4褐色中砂　φ0.5～3cmの礫少量　固くしまる ┘ 石列85掘形埋土
3　2.5Y7/1灰白色粘質細砂　固くしまる
4　2.5Y4/6オリーブ褐色細砂 ┘
5　7.5YR6/8橙色粗砂(基盤層)

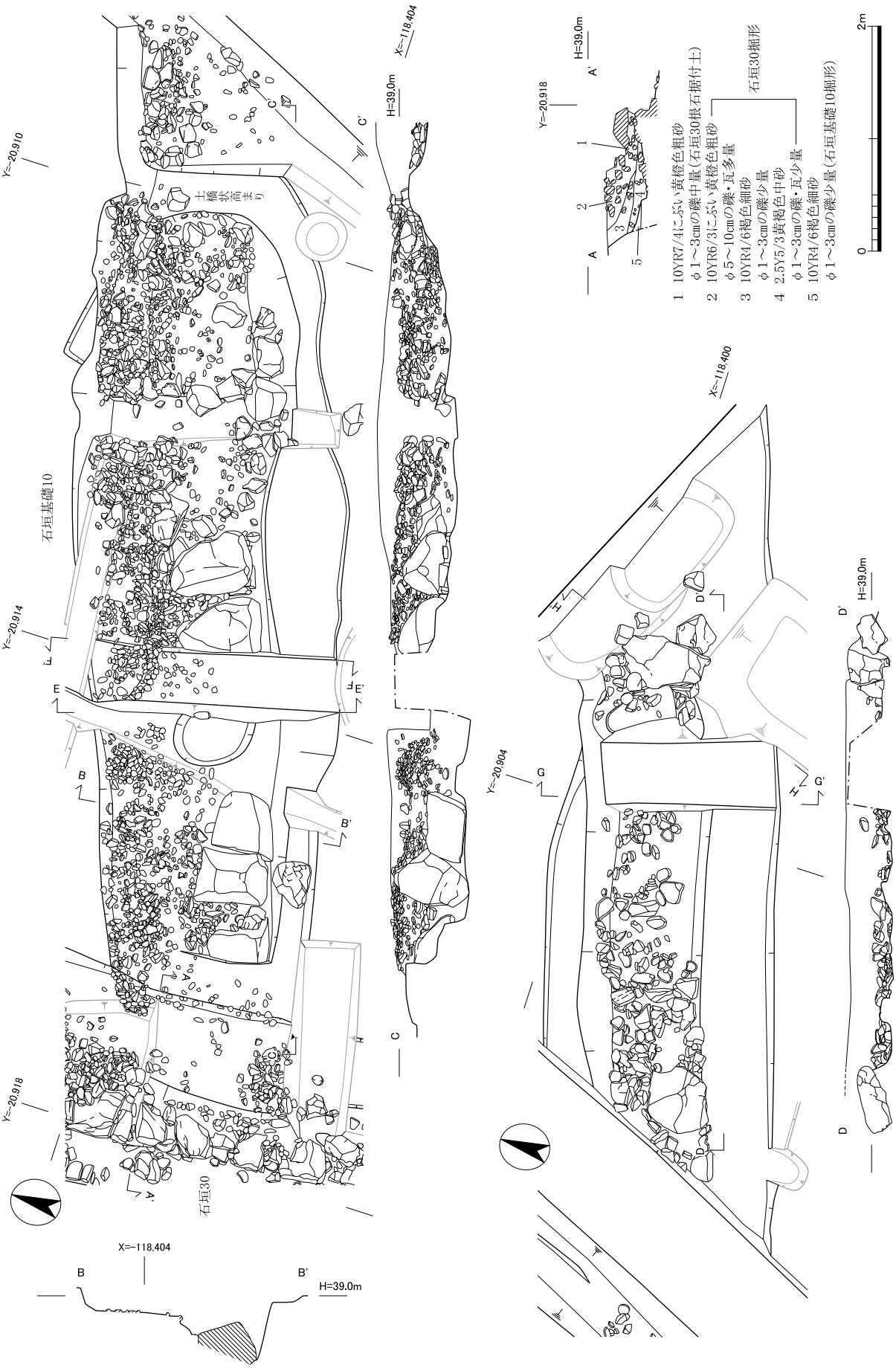






1　7.5YR4/4褐色粗砂
2　2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂　φ0.5～2cmの礫少量

門2実測図（1：50）

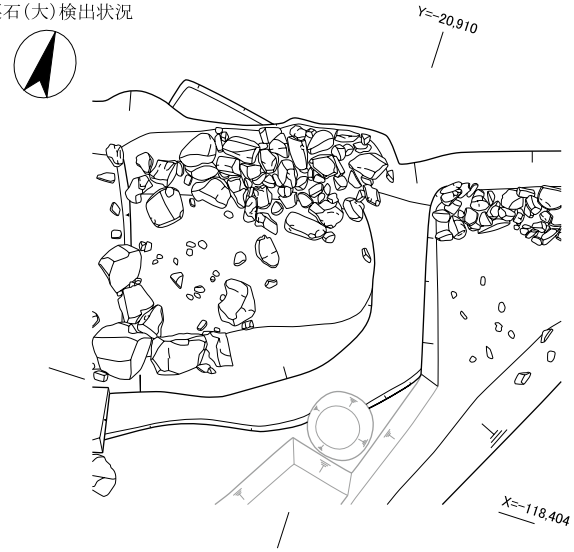


石垣基礎10実測図１（１：50）

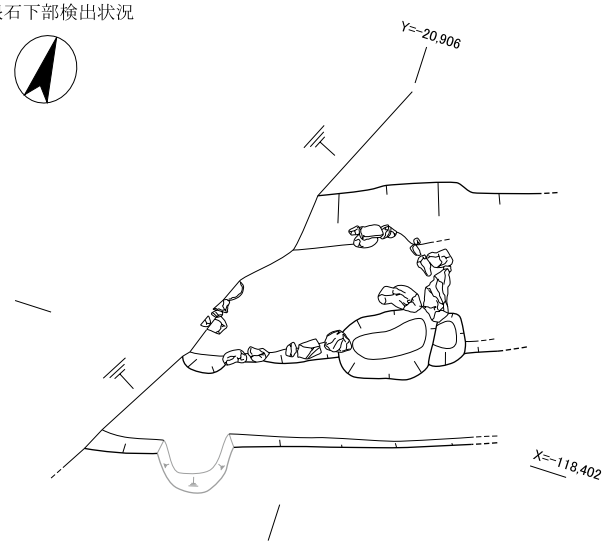
図版6　遺構

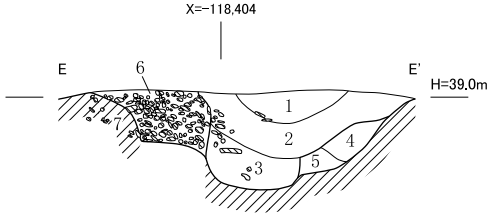
石垣基礎10実測図2（1：50）

栗石(大)検出状況



根石下部検出状況

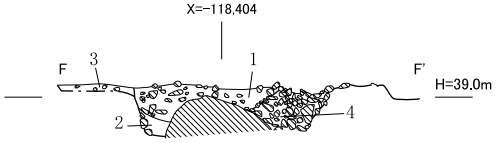




1　5YR4/2灰褐色粗砂
　φ1～5cmの礫多量　固くしまる
2　7.5YR6/1褐灰色粗砂
　φ1～5cmの礫多量　固くしまる
3　10YR4/1褐灰色中～粗砂
　φ1～5cmの礫少量
4　10YR4/6褐色中砂
5　7.5Y8/1灰白色細砂
6　5YR5/2灰褐色粗砂　φ1～10cmの礫多量(栗石)
7　7.5YR6/2灰褐色粗砂　φ1～5cmの礫少量(基盤層)

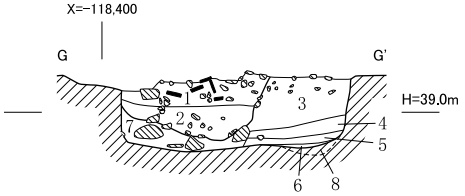
築石・根石抜取
埋土

掘形埋土



1　10YR7/2にぶい黄橙色粗砂
　φ1～5cmの礫多量　固くしまる
2　10YR4/6褐色中砂　φ5～10cmの礫多量
3　10YR6/4にぶい黄橙色粗～細砂
　φ1～5cmの礫多量　固くしまる(石垣前面構築土)
4　7.5YR4/2灰褐色粗砂
　φ2～10cmの礫多量(栗石)

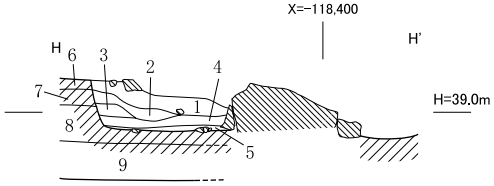
築石抜取
埋土



1　7.5YR4/3褐色粗砂
　φ5～10cmの礫・瓦多量　固くしまる
2　7.5YR4/6褐色粗砂
　φ5～10cmの礫・瓦多量　固くしまる
3　7.5YR4/4褐色細～中砂
　φ1～5cmの礫中量　固くしまる
4　10YR3/2黒褐色中砂
　φ1～2cmの礫少量　固くしまる
5　7.5YR4/6褐色粗砂
6　10YR5/3にぶい黄褐色細砂　固くしまる
7　7.5YR3/4暗褐色中砂(根石据付土)
8　10YR4/4褐色粗～細砂
　φ1～2cmの礫中量　固くしまる(基盤層)

築石・根石抜取
埋土

石垣前面
構築土

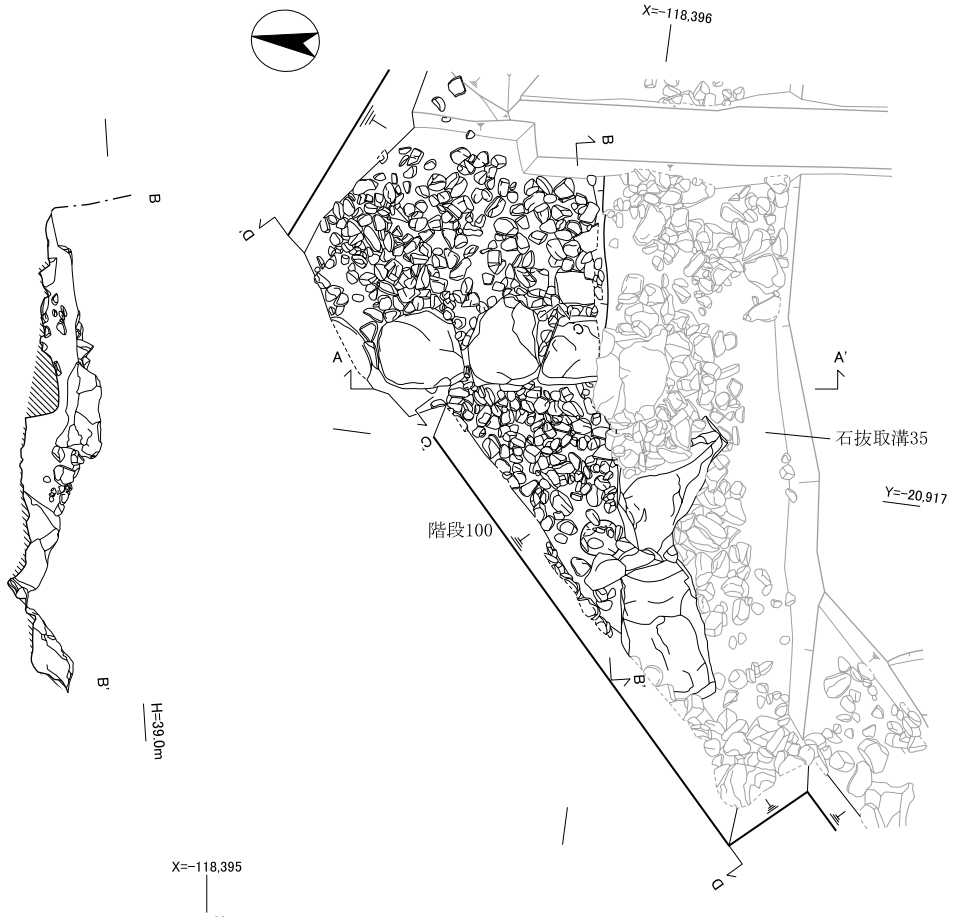


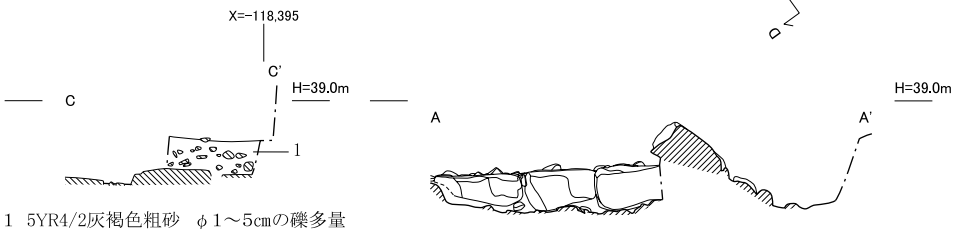
1　5YR4/4にぶい赤褐色細～中砂
　φ1～5cmの礫少量　固くしまる
2　5YR4/2灰褐色粗砂
　φ1～2cmの礫少量　固くしまる
3　10YR6/3にぶい黄橙色中～粗砂
　φ1～2cmの礫少量　固くしまる
4　10YR3/4暗褐色中～粗砂
　φ1～2cmの礫少量
5　10YR5/3にぶい黄褐色細砂　固くしまる
6　5YR5/6明赤褐色粗砂　固くしまる
7　2.5GY8/1灰白色中～粗砂　固くしまる
8　7.5YR6/8橙色粗砂　φ0.5～3cmの礫多量、
　φ4～10cmの礫少量　固くしまる
9　5YR4/2灰褐色粗砂
　φ0.5～7cmの礫中量　固くしまる

石垣前面
構築土

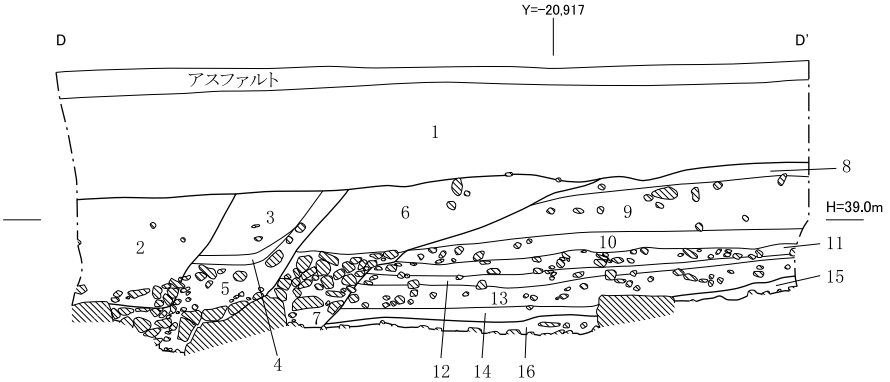
基盤層

0　2m

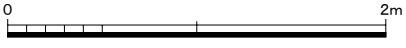




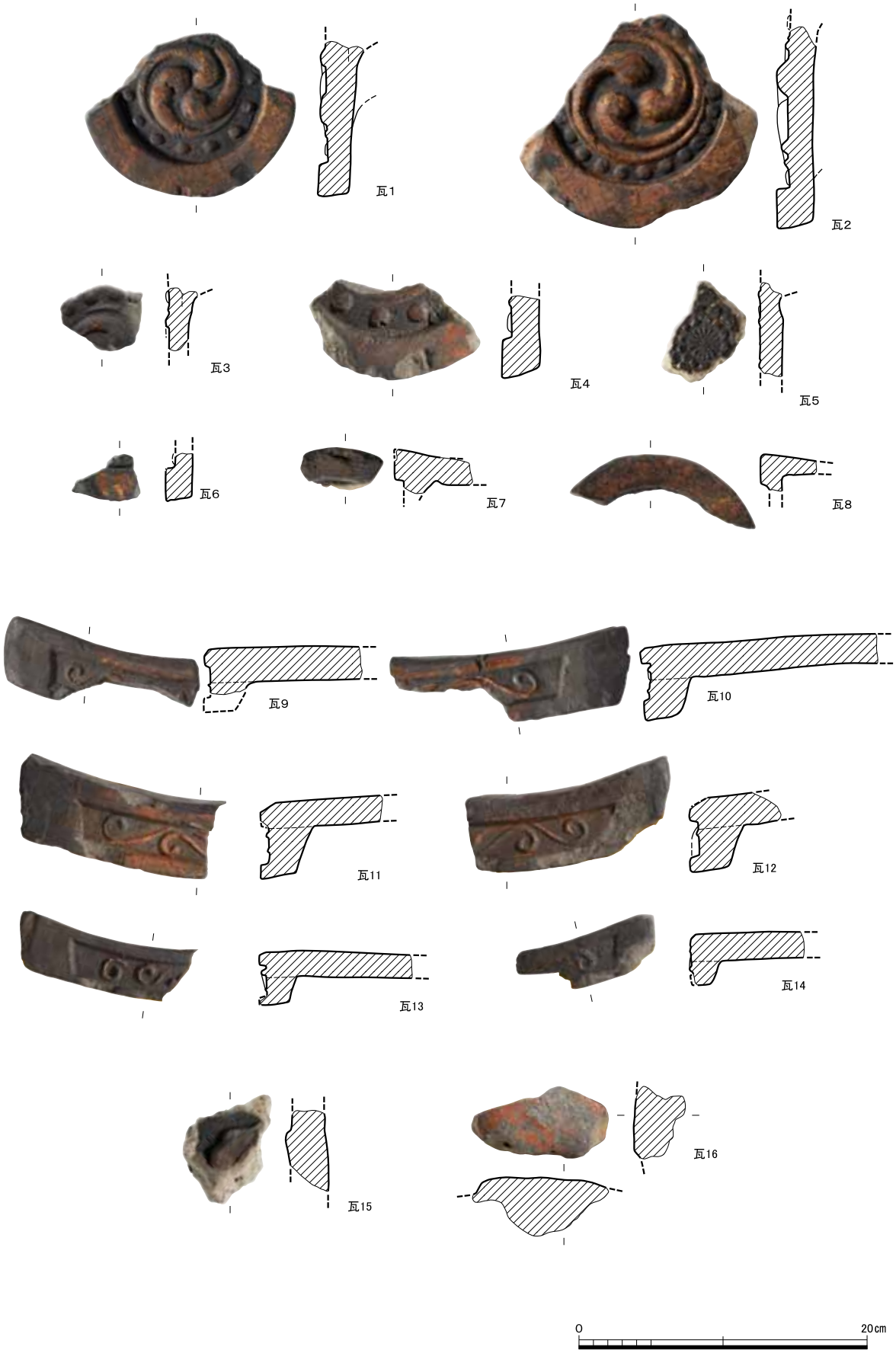
1　5YR4/2灰褐色粗砂　φ1～5cmの礫多量
　固くしまる(階段100埋土)



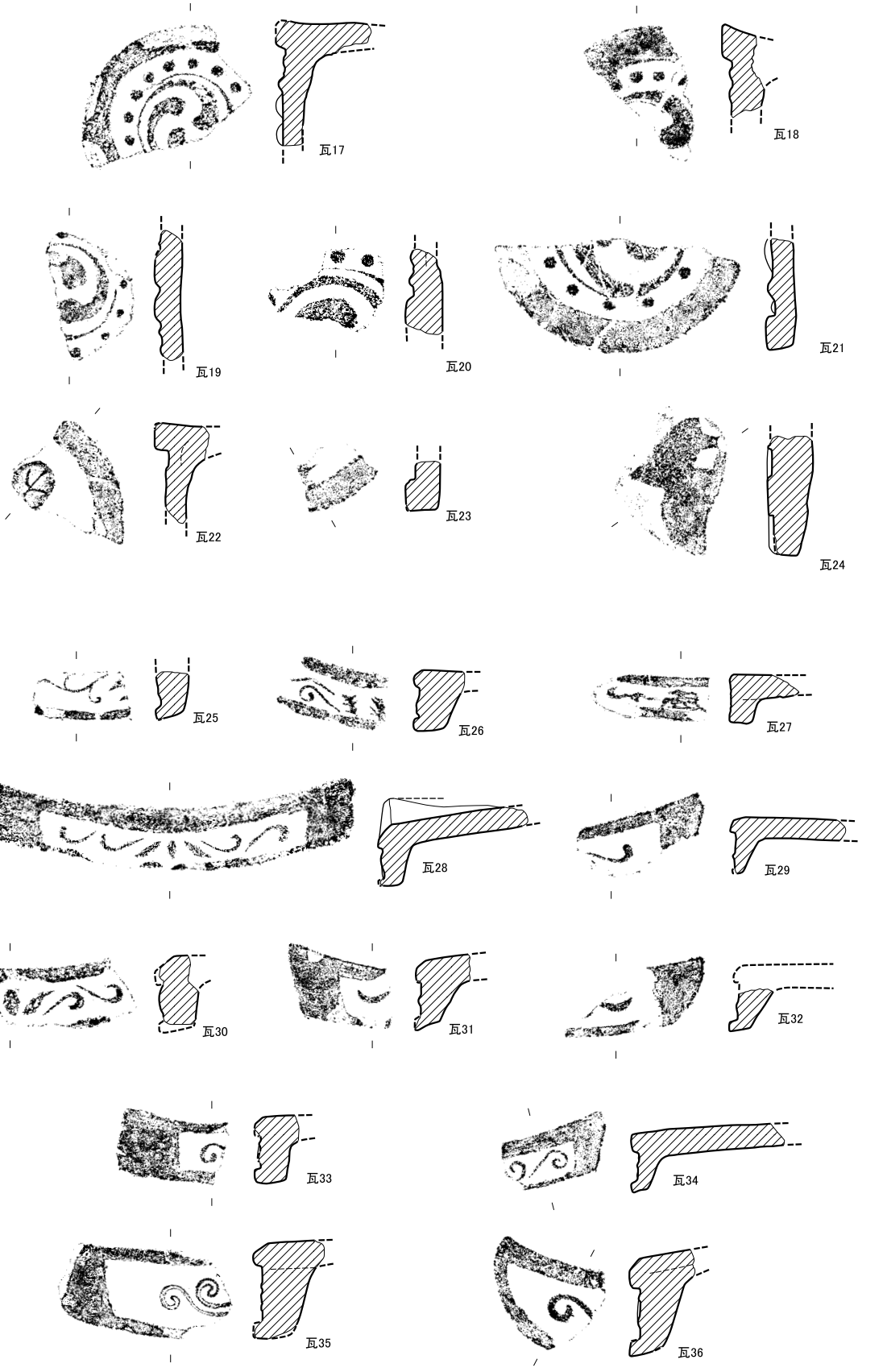
1　近代盛土
2　10YR7/4にぶい橙色粗砂　φ1～5cmの礫少量(石垣30抜取後整地層)
3　10YR7/2にぶい黄橙色中～粗砂　φ2～5cmの礫少量
4　10YR5/1褐灰色細～中砂　炭多量　　石垣30掘形
5　7.5YR5/4にぶい褐色細～粗砂　φ1～10cmの礫多量
6　7.5YR6/3にぶい褐色粗砂　φ2～10cmの礫少量
7　10YR6/2灰黄褐色粗砂　φ5～10cmの礫多量　　石抜取溝35埋土
8　7.5YR6/8橙色中～粗砂　φ2～5cmの礫少量
　固くしまる
9　7.5YR4/6褐色粗砂　φ1～5cmの礫少量　　木幡山伏見城期整地層
10　2.5Y6/1黄灰色中～粗砂
　φ2～5cmの礫中量　固くしまる
11　7.5YR8/3浅黄橙色中～粗砂
　φ2～5cmの礫中量　固くしまる
12　7.5YR3/2黒褐色中～粗砂
　φ2～5cmの礫多量
13　7.5YR4/3褐色粗砂　φ1～10cmの礫多量
14　10YR4/3にぶい黄褐色粗砂　固くしまる　　階段100埋土
15　2.5Y3/2黒褐色細砂
16　10YR3/4暗褐色細砂　　階段100化粧土



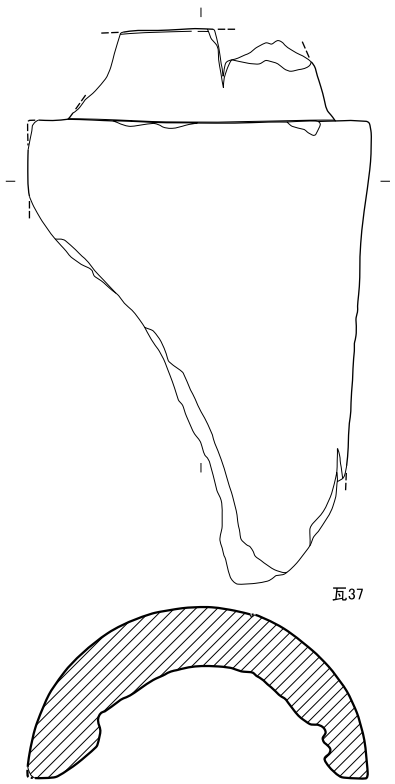
階段100実測図（1：40）

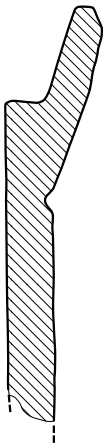


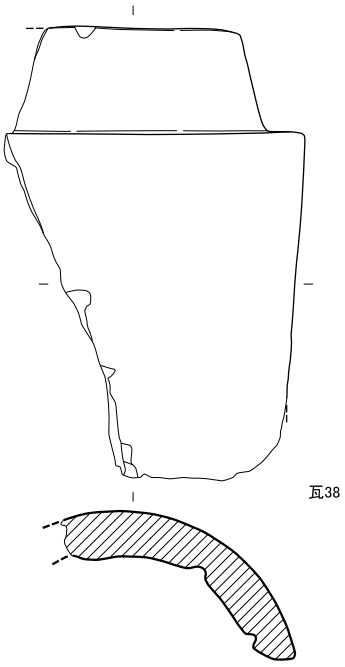
瓦拓影及び実測図１（１：４）

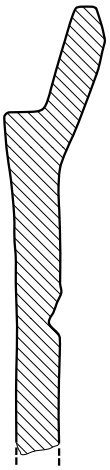


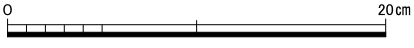
瓦拓影及び実測図２（１：４）



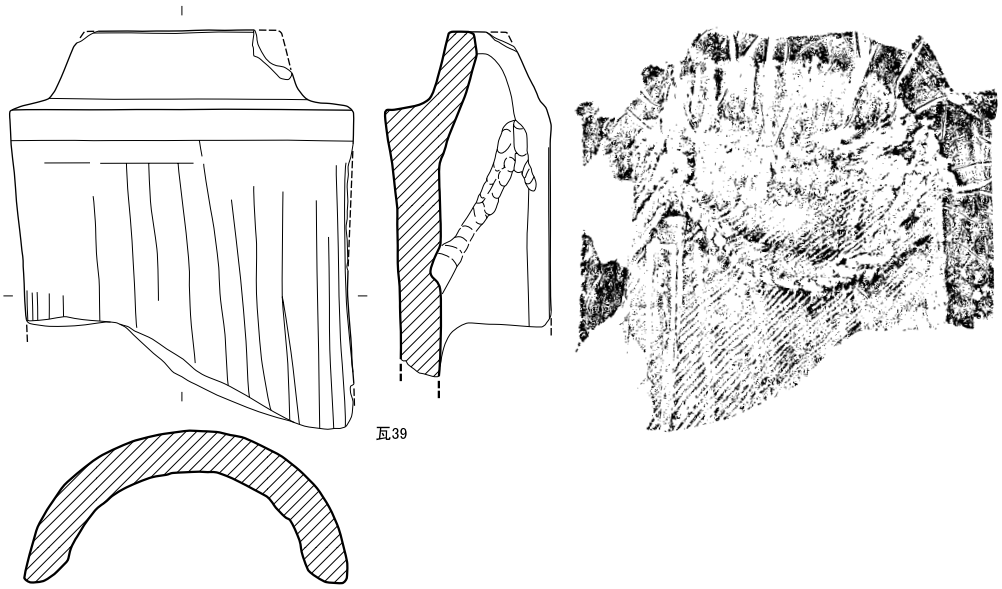


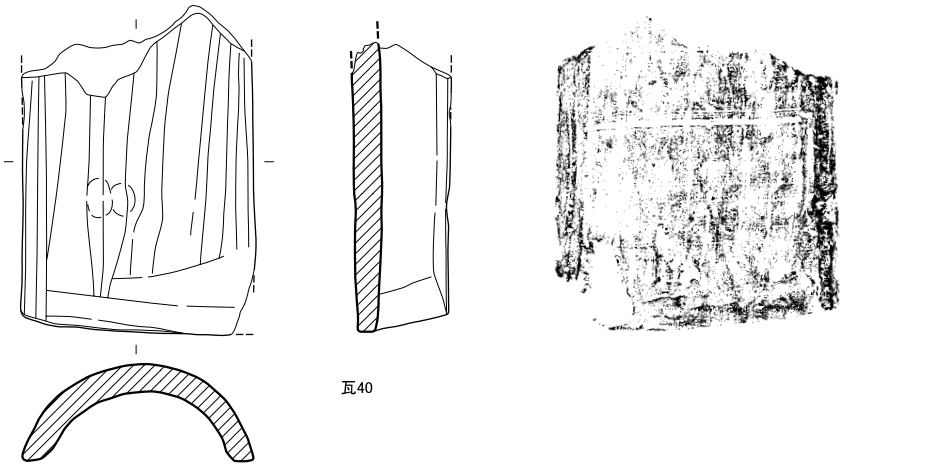


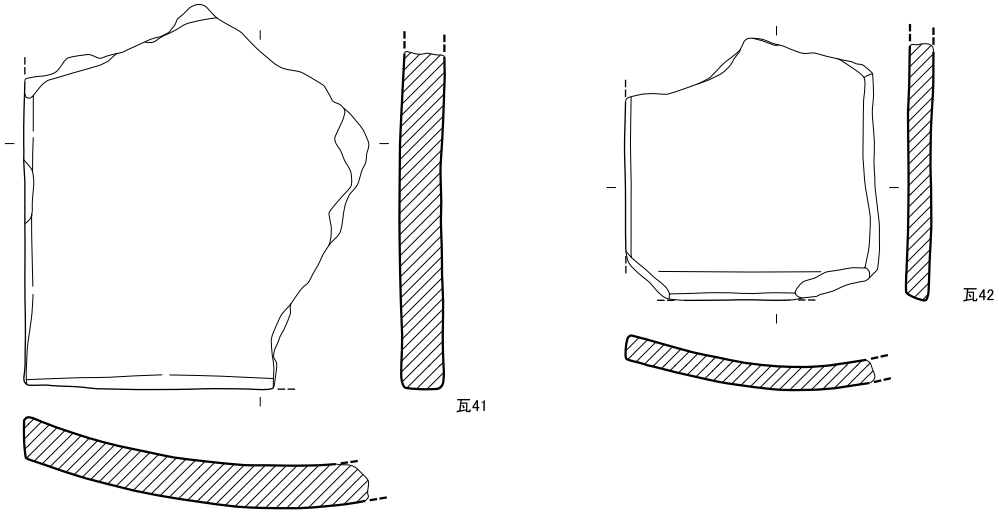




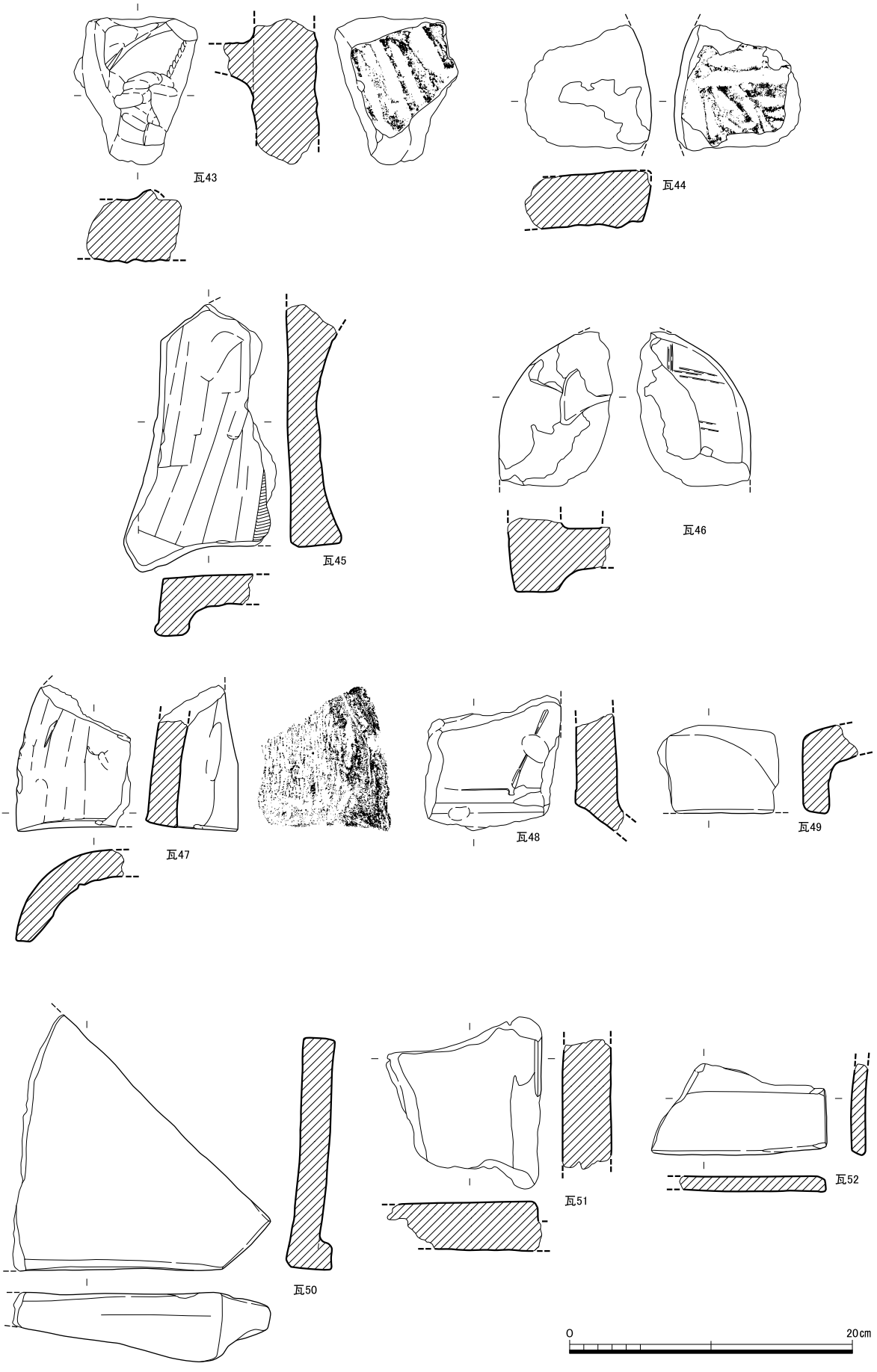
瓦拓影及び実測図３（１：４）







瓦拓影及び実測図４（１：４）



瓦拓影及び実測図５（１：４）

1　調査区北半伏見城廃城後全景（東から）

2　溝20（南から）

3　土坑13（北西から）

1　調査区北半全景（南東から）

2　調査区南半全景（東から）

1　石垣30調査区北側（北から）

2　石垣30調査区南側（北から）

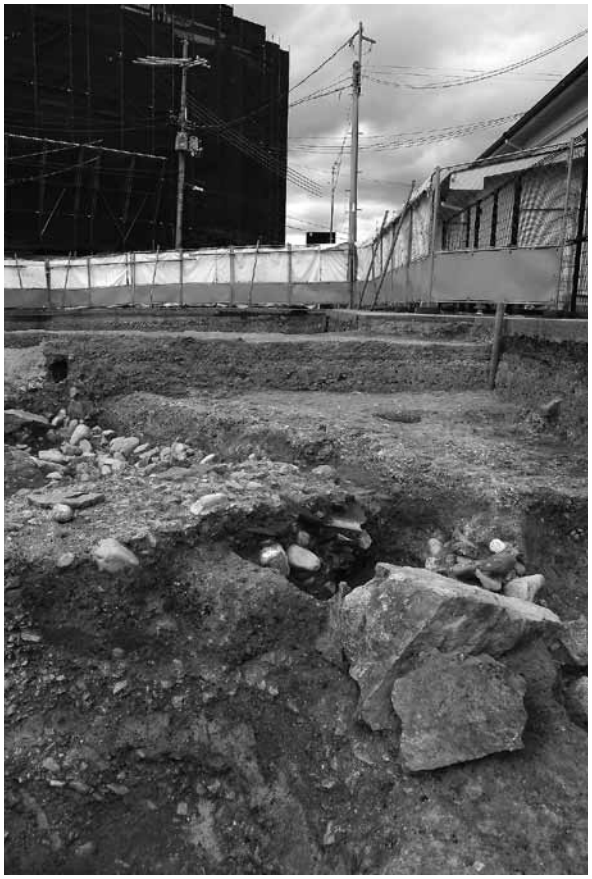
3　溝28断面（北から）

4　土坑98断面（北東から）

1　門1（東から）

2　石垣基礎10東側（南東から）

1　石垣基礎10埋没状況（東から）



2　石垣基礎10東側断面（南東から）

3　石垣基礎10根石（南から）

1　石垣基礎10東側詰石検出状況（西から）

2　石垣基礎10東側一部完掘状況（西から）

3　石垣基礎10人頭大栗石検出状況（東から）

4　石垣基礎10西側一部完掘状況（北東から）

瓦17

瓦21

瓦22

瓦24

瓦30

瓦35

瓦28

瓦36

瓦37
瓦41
瓦42
瓦40

出土瓦

瓦47

瓦52

瓦50

瓦45

4

2

土1

土2

金1

出土瓦・土器・土製品・金属製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふしみじょうあと
書名	伏見城跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－９
編著者名	渡邊都季哉
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2022年３月15日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
伏見城跡（ふしみじょうあと）	京都市伏見区（きょうとしふしみく）桃山町鍋島他（もものやまちょうなべしまほか）地内（ちない）	26100	1172	34度55分57秒	135度46分16秒	2021年８月17日～2021年12月６日	391㎡	桃山駅駅前広場整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伏見城跡	平城跡	安土桃山時代	石垣基礎、階段、門跡、石垣、溝、路面	土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、金箔瓦、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、金属製品	指月伏見城に関わると考えられる石垣基礎、階段を検出した。 浅野但馬守の屋敷と考えられる石垣、門跡を検出した。
		江戸時代	溝、路面		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-9

伏　見　城　跡

発行日　2022年3月15日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961